

ホロシユム通信

第5号

1971.9.18

主張 「米中会談」をめぐる新しい世界革命の前進と
日帝心臓部における我々の重大な任務

論文 プロレタリアートの階級闘争の戦術に関する覚書
闘争報告・方針 三里塚闘争

沖縄闘争

国際共産主義運動講座 1 中国革命と我々

寄稿 革命運動の総括と展望(1) / 佐野茂樹
労働戦線からの報告 / 山岡一雄

レーニン研究会理論機関誌

ホルン通信

レーニン研究会理論機関誌

第5号

1971. 9. 18

■ 目 次

主 張 「米中会談」をめぐる
新しい世界革命の前進と
日帝心臓部における我々の重大な任務
論 文 プロレタリアートの階級闘争の
戦術に関する覚書

古川 哲

闘争報告・方針

1. 「三里塚秋の陣」

——第二次強制収用実力阻止のために

京都大学教養部戦線・全学戦線

2. 今秋沖縄返還協定批准阻止！

佐藤政府を倒せ！

京都大学教養部戦線・全学戦線

国際共産主義運動講座 1

中国革命と我々 高田 宏・山本次郎

寄 稿

■労働戦線からの報告

——まきおこる中小・日雇・臨時工等下層未組織労働者の闘いを
自衛隊—帝軍解体闘争と固く結合し革命軍の一翼を作り出そう

山岡 一雄

■革命運動の総括と展望

——日本革命運動の〈否定の否定〉のために

佐野茂樹

主張

「米中会談」をめぐり新しい世界革命の前進と 日帝心臓部における我々の重大な任務

目次

- 第一章 「米中会談」への反動的評価にあらわれた日本「左翼」の腐敗・墮落とプロレタリア国際主義の道
- 第二章 ニクソン訪中の陰謀と米帝国主義の世界反革命戦略の手直し
- 第三章 「佐藤政府の危機」と日本帝国主義の七〇年代アジア侵略・反革命戦略

第一章 「米中会談」への反動的評価にあらわれた日本「左翼」の腐敗・墮落と

我々のプロレタリア国際主義の道

I 戦後世界体制を画期するニクソンの対内・対外政策の転換

ニクソン米大統領は、七月十六日、中華人民共和国との「関係正常化」のため、来年五月までに、中国を訪問したい旨の声明を、全米向けラジオ・テレビをとおして発表した。又、丁度、それから一

ヶ月後の八月十五日、彼は、ドル危機、慢性インフレ、失業問題等がぬきざしならぬ段階にきていることを認め、その「解決」の方策に「ドル・金交換一時停止」、「米国への輸入品に対する一〇％の輸入課徴金」、「物価・賃金の凍結」を中心内容とする「新経済政策」を打ち出した。

前者の事態は、戦後一貫して米帝がとりつづけて来た世界支配体制の巨大な一角が崩れ去った事を意味している。

ケネディ大統領以来、特に、顕著となった米帝の世界支配戦略は、国際共産主義運動の分裂・対立につけこみ、ソ連を中心とした現代修正主義諸潮流と結託して、「米ソ平和共存」を取りつけ、それを背景に、徹底した「中国封じ込め」と、ベトナム・インドシナ人民を先頭とした世界革命の新たな胎動に対する密集した反革命を遂行することであった。

そして、今、米帝の密集した反革命が、インドシナ人民の革命戦争によって打破されんとしている時、米帝は、一九五〇年代以来、最大の敵であった中国を訪問し、新たな自己の政治的延命の道をさぐるうとしていたのだ。

ではニクソン「新経済政策」はどうだろうか。

ここに於ても、第二次世界大戦後、米國資本主義の比類なき生産力の優位を背景にして形成されたドル金体制、IMF体制と自由貿易理念を基礎としたガット体制を、米國資本主義自らがもはやこれ以上維持しえないことを明白にしている。

慢性的ドル危機の形成は、戦後二六年を経る中で、日本、西独を中心とした敗戦帝国主義の復興・各國資本主義の生産諸力の不均等発展に基礎をおきつつも、やはりベトナム・インドシナ人民の不屈のねばり強い革命戦争の遂行によって、米帝をインドシナの泥沼に

引きずりこみ、ドル危機を更に深化させ、顕在化させ、しかもそれだけにとどまらず、その斗いが米国内反戦斗争、黒人解放斗争、軍隊内反乱等の革命運動と固く結合を開始したことこそ、今回のニクソン訪中計画と一体になったニクソン「新経済政策」の背景なのである。

しかも、このような米帝の戦後世界体制を画期する重大な対外、対内政策の発表が、その同盟諸國政府にさえも明らかにされず、「電撃的ニュース」であったことに見られるように、いかに、現在のニクソン政府が動揺しており、米帝の世界史的危機が深刻なのかを、われわれは読み取りなければならぬ。

国際共産主義運動が分裂と危機を深化させ、多くの旧コミンテルン系共産党が帝國主義との域内平和の道を歩みつつある今日、インドシナ人民を先頭にした新たな世界革命の波の形成こそが、戦後世界体制を画期する情勢を招来させたのであり、ニクソンの「電撃的政策転換、各國アルジョアジの狼狽、「佐藤政府の危機」を生み出した最も重要な要因なのである。

「米中会談」を中心とした中国共産党・中国共産党の積極外交の真の意図

米帝は、既に、六九年、インドシナ侵略戦争の破産、米国内の矛盾の累積、危機の深化の中で、自らの七〇年代世界反革命戦略を、「アジア人をしてアジア人と斗わせる」ことを最も主要な内容とするニクソン・ドクトリンとして確定した。

そして、ニクソンおよび米帝は、漸次、米軍のベトナムからの部分的撤退を開始しつつ、サイゴン政府に対して、政治的、軍事的、

経済的強化を開始したが、ベトナムの戦局は更に「悪化」するばかりであり、又、「アジア人をしてアジア人と戦わせる」体制を確立せんが為、今年春、破廉恥にもラオス・カンボジア侵攻を試みた。だが、その野望は、ベトナム、ラオス、カンボジア三国人民の共同の斗いによって粉碎され、更に又、七月一日、パリ会談ではベトナム民主共和国、南ベトナム共和臨時革命政府によって期限付米軍撤退と連合政府樹立を内容とする「七項目和平提案」を、ニクソンと米帝はつきつけられ、ニクソン政府は、国内的にも、国際的にも、そのインドシナ政策非難の渦中に立たされているのだ。

ところで、このように早くも暗礁に乗りあげたニクソン・ドクトリンの新たな手直しを、ニクソン政府が画策している丁度その時に、「米中会談」計画を中心とした中国共産党の積極外交をわれわれは評価すべきものとして考えなければならぬ。

その論拠は、プロレタリア文化大革命後、「反米帝、反ソ連修正主義」統一戦線を更に鮮明にした中国共産党の「米中会談」計画を中心とした積極的外交政策が、主に次の三点に要約できる新たなアジア情勢を切り開いており、又切り開こうとしているからである。

第一の論拠は、中国共産党は、ニクソン訪中承認によって、五〇年代以来、米帝がとり続けてきた反動的な対中国政策、即ち、「中国封じ込め」と蔣介石一派との反革命同盟の維持に対して、最後の転換を迫ろうとし、事実、ニクソン政府に対して、中華人民共和国の承認、在台米軍の撤兵等の方向で大きな圧力を形成することに成功している。

例えば、今秋国連総会を目前にした八月二日のロジャース國務長官声明にみられるように、ニクソン政府は、中国国連参加問題に対し

て、これ迄の中華人民共和国の国連参加反対から支持へと転換し、国府追放を重要事項指定とし、国府職務擁護を自論む政策を採用した。勿論、ニクソン政府が、今秋国連総会において逆重要指定決議案をとるにしても、又、安保理事会議長を中華人民共和国に与える複合二重代表制案をとるにしても、蔣介石一派の擁護の立場を崩すことはないだろうが、だが又一方、ニクソン訪中計画がうたっているように「米中国交正常化」をも、ニクソン政府は、遅かれ早かれ自己の任務としてかかえているのである。

こうした米帝の「二つの中国」への画策に対して、いかに早く、中国共産党、中国共産党は、台湾に関する六項目原則を掲げ、「米中唯一の合法政權と認めねばならない。……米國は台湾および台湾海峡から軍隊をひきあげなければならぬ。米台相互防衛条約は不法なものである。われわれはこの立場を貫くであろう。われわれの立場は将来も変わらない」（七月十九日、周恩来首相のアメリカ中国研究者代表団との会見における発言）と断言し、更に、もし今秋国連総会で、「二つの中国論」が決議されたならば、中国は国連には参加しないという強硬な態度を、中国共産党がとり続けているのは、しごく正当なのである。

さて、かかる中国共産党の強硬な態度は、単に現在の中国国内問題の解決だけの為、意図されているのだろうか。

否である。なぜなら、中国共産党の台湾問題に関するこのような強硬な態度は、明白に帝國主義者に対して、中国革命戦争の勝利を「追認」させる意図のものであり、中国革命戦争に続くインドシナ人民、朝鮮人民の反帝斗争を更に勇気づけるものなのである。

第二のわれわれの論拠は、周恩来首相が、七月十九日、米大学代表団に対して、「われわれは、真先に解決されなければならないのはインドシナ問題だと信じている。アメリカおよびその他参戦国のインドシナ撤退要求は、米中両国民間の関係回復びかけよりなお強いといえる」と述べ、中国政府、中国共産党が、「米中関係正常化」の為に、インドシナ問題の解決が前提であるという立場をとり、インドシナ人民を無視した「新ジュネーブ会議」を開催する意志を持たないことを既に表明した点である。

われわれは、過去『ボル通版』、中ソ論争と過渡期世界におけるマルクス主義』やその他の論文で明らかにしたように、スターリン・コミンテルンと中国革命、又、中ソ論争・文化大革命の総括を通して、今日の中国政府、中国共産党の対インドシナ政策が、口先きだけのものではないと判断する。

なぜなら、中国共産党は、中ソ論争の過程で、米ソ平和共存を批判し、「いかなる場合にも、平和共存を被抑圧民族と抑圧民族の関係、被抑圧国と抑圧国の関係、被抑圧階級と抑圧階級との関係の面におしひろげてはならず、平和共存を資本主義から社会主義への移行のおもな内容だなどと言わなくてはなりません。……平和共存は各国人民の革命斗争にとってかわることは絶対にできません。……平和共存を社会主義の対外政策の総路線とするは誤っています。」「（『根本的に対立している二つの平和共存政策』）と明言しており、又、現実には、中国共産党はパレスチナ解放斗争やインドシナ革命戦争等の新しい世界革命の波に対して、一貫して精神的、物質的に支援してきているからである。

第三の論拠は、日米反革命同盟の新たな段階の下での日本帝国主義の露骨なアジア侵略、反革命の道に対して、最近の中国政府、中

国共産党のニクソン訪中承認を中心とした外交が、極めて時宜にかなった政治的打撃を与えている点である。

中国政府、中国共産党のニクソン訪中承認は、危機に立つ米帝の伝統的中国政策をわずかも転換させることによって、例えば、中国国連参加問題に対する米帝の態度の豹変——ニクソン・ドクトリンの一環である「七二年沖繩返還」を通じた日米反革命同盟の再編——強化過程での、日米帝両者の「独自利害」の相異を顕在化させ、中国敵視政策をとり続ける（と）り続けざるをえない）日本帝国主義を国際的に「孤立化」させ、佐藤政府を、根底的動搖の淵においやることに成功している。

中国政府は、朝鮮政府とともに、昨年春以来、「日本軍国主義の復活（注1）」を批判してきたが、最近の対外路線の最も重要な柱の一つとして、「日本の『韓国』、台湾への侵略の野心」（周恩来首相のニューヨーク・タイムズ紙・レストン記者への発言）について全てのアジア人民に警鐘を鳴らし、それとの対決を、とみに訴えていることについて、われわれは、注目し、且つ、日本人民の任務、日本の共産主義者の任務とは何かとして、主体的に理解しなければならぬ。

注1、中国共産党は、最近の日本資本主義の（経済的）・政治的動態総体を「復活した日本軍国主義」と規定しているが、その規定について、日本の一部の毛沢東主義者の主張する「日本軍国主義論」と、かなり異なっているようにある。

一九七〇年冬、農村青年訪中団との会見で「周総理は、日本軍国主義の基礎をなす日本経済の問題について意見をのべて、現在の日本独占資本主義は、イギリス帝国主

義のように海外の市場と資源に依存する型をしめして……と論断した。」（『中国の農村と日本の農村』管沢正久編著）

又、井上清氏は、ある対談の中で、「『現代の眼』九月号所収）中国の共産主義者の『日本軍国主義論』を報えているが、要約するところである。

- 1、「日本は高度に発展した独占資本主義であって、それが外へ膨張政策をどんどんやっている。これは資本主義の最後の段階であり、日本が帝国主義であることに間違いない。
- 1、「ただ、その帝国主義が依然としてアメリカに、軍事的・政治的に縛られている、経済的にも対米依存が強い。」
- 1、「日本の左翼の諸君が帝国主義という場合、それは自立した帝国主義、アメリカ帝国主義と並んで立つところの帝国主義を意味しているのが一般的」なので、日本帝国主義と呼ばないで、日本軍国主義と呼ぶ。

III 「米中会談」への反動的評価にあらわれた日本「左翼」の腐敗・墮落

ニクソン訪中の決定の報道は、国内でも巨内な反響を呼び、様々な論評があらわれ、いりみだれたが、われわれは、今日の日本の諸階級、諸階層の複雑な諸利害を背景にした様々の論評について言及してみよう。

ブルジョア新聞や、自民党の一部、又、民社党、公明党は、「米中対立から米中共存へ」とか「ニクソン大統領の決断と勇気」等とまくしたて、ニクソン賛美を送っているのは論外である。

又、社会党は、アメリカは、将来「冷戦構造」から「緊張緩和」への道を進むだろうし、七〇年代は、「平和共存」「平和外交」の時代であるなどと小市民風に思いこみ、「対決外交」の「佐藤政府」に対して「平和、中立の政府」等と主張しているが、こうした見解は、ニクソンを北京に飛ばせることの真の背景である階級情勢、インドシナ人民を最先頭に新しい世界革命の力強い前進を見落した、或いは隠蔽したものである。

こうした見解は、彼等が日本帝国主義に対する小ブル民主主義的反対派たることを、日本帝国主義の侵略・反革命、新しい帝国主義戦争の準備に対して、日本人民の革命戦争、内戦で反対する事を否定する小ブル平和主義者たることを、明白にしているだろう。

ところで、われわれが、決して見のがせないのは、代々木「共産党」から新左翼にいたる日本「左翼」のほとんど全てが、「米中会談」の真の背景である、インドシナ、中国、朝鮮を貫く、米帝と対決し、日帝の侵略、反革命と対決する「統一戦線」の成熟、新しい世界革命の前進を全く理解できず、従って、帝国主義心臓部の日本人民の国際主義的任務を鮮明にしえない態度に終始していることである。

ベトナム労働党は、ニクソン訪中決定の四日後、次の「大國主義」批判の見解を表明した。

「ニクソン一派の状況は、実際きわめて悲劇的である。かれらは追いつめられている。

全米、全世界が声を大にしてさげんでいる。『ベトナムでの侵略

をやめて全米軍を引きあげよ」と。そのような窮状のなかでニクソンは、狂気のようになって出口をさがしていた。

しかし、かれはまちがったところへ行つた。出口のとびらは開かれていたが、かれは袋小路の方へころがりこんだのである。

力によって自分の意志を他におしつけ、大国としての自分の強さに訴えて小国をおどすというのは、帝国主義者の伝統的なやり方である。……(ベトナム労働党中央機関紙「ニヤンザン」社説「ニクソン・ドクトリンはかならず失敗する」より)

ところが、わが日本「左翼」は、自己の日和見主義を隠蔽せんがため、ベトナム労働党の見解を、手前みそに改竄し、それを利用して、ニクソンと米帝が託す「米中会談」への陰謀(この評価自身も誤っているのだが)を、安直に、中国共産党の路線、陰謀などと理解しているのである。

ここでは、インドシナ人民を先頭にしながら新しい世界革命の前進、階級情勢総体の中に占める「米中会談」と、中国共産党の意図が、わずかも理解されていないのである。

今や日本帝国主義との城内平和の道を、「着実」に歩む代々木「共産党」は当然としても、革命的左翼の多くの部分までが、かかる見解をとっているという事態の中にこそ現在の日本階級斗争の危機の象徴をみてとらねばならない。

代々木「共産党」のブルジョア的「自主独立」の道、革共同の「反帝・反スタ」革命論に基づく反動的「米中会談」評価は、民社党の「一番のポイント」は、……ニクソン・ドクトリンについて「アメリカと中国の利害がだんだん一致しはじめているところにある」(佐々木書記長見解)という見解と本質的に同一であり、その思想

の基底は、「被抑圧民族」——インドシナ人民を中心とした真の世界革命の発展と帝国主義心臓部における日本革命の結合を否定する「抑圧民族」の思想に他ならない。

さて、代々木「共産党」は、八月二日、「赤旗」紙上に「ニクソンとアメリカ帝国主義」という題の論文を掲載している。

そこでは、代々木「共産党」は、最近の中国共産党、中国共産党の対外路線に対して次の二点を中心に「批判」し、「米中会談」の評価を与えている。

第一は、「反米反ソ統一戦線」などといながら事実上「ソ連修正主義」を主敵とみなしている。

第二は、「ソ連修正主義」主敵論と結合した「日本軍国主義主敵論」である。

われわれは、このマルクス主義とは無縁の見解、デマに関して詳しくは論じないが、唯、こうした見解、デマが、代々木「共産党」の次の真の反動的性格をよく示していることだけを指摘しておく。

彼等は、御都合主義的「フルンチョフ批判」をおこなっているが、その本質は、フルンチョフ主義、国際共産主義運動の中の最悪の日和見主義の継承者であり、彼等が口先で「反米」を強調するのは、他でもなく、彼等が日本帝国主義との城内平和を期待し、「自主独立」でもって世界の革命戦争が、日本に持ちこまれる事態を阻止せんとしているからである。

ところで、わが革命的左翼はどうだろうか。

革共同中核派機関紙「前進」(八月二日号)「アジアにおける米帝の危機とニクソン訪中」によるところである。

「この中国による米大統領ニクソンの公式招待は、……ベトナム人民を孤立させるものである。アジア人民からはもとより、アメリカ

カ国民からも支持を失い、決定的に窮地にたなざれているニクソン

とアメリカ帝国主義に政治的救済の道を開くことであり……

アメリカ帝国主義打倒へとつき進みはじめているアメリカの労働者階級人民の階級の自覚を著しくさまたげ、氷をかけるものである。

そして、プロレタリア世界革命の勝利のために闘い抜いているベトナム、インドシナ人民を先頭とする全世界の革命的労働者人民を裏切るものであるといわなければならぬ。われわれは、ベトナム労働党をならびに南ベトナム共和臨時革命政府が、……「ニクソンが敗北を認めないならば、ベトナム人民はラオス、カンボジアの人民とともに戦いを継続する」と宣言していることの意味を深くうけとめなければならぬ。われわれは、中国の「ニクソン招待」という路線が文化大革命の結果登場した毛一林一周路線として、毛沢東の世界革命路線の現実の姿としてうちだし、世界的危機の時代における

毛沢東スターリン主義の世界革命運動にはたす決定的な裏切りの本質を徹底的に明らかにし、反帝国主義・反スターリン主義、世界革命の立場こそが唯一今日の時代におけるプロレタリア世界革命の立場であることを明らかにし、全力で斗わなければならぬ。

こうした小児的、客観主義の見解は、既に指摘したように、社会排外主義、社会帝国主義の道を歩む最悪の日和見主義、代々木「共産党」の「自主独立論」と同一の見解であり、その思想的基底は、帝国主義「抑圧民族」の思想に他ならない。

われわれは、中核派諸君のこの御都合主義の見解に対しては、次の素朴な質問を呈するだけで、彼等の「論理破綻」「論理矛盾」を明らかにすることができる。

彼等は、「米中会談」計画をたたちに米帝の陰謀への中国共産党の屈服とするならば、なぜ「パリ会談」を批判しないの

か。

彼等が主張するようくも中国共産党が、平和共存、一国社会主義、二段階戦略等のスターリン主義者ならば、未だ、現代修正主義との対決の路線を「公然化」せず、ソ連共産党や代々木「共産党」と「友好」関係にあるベトナム労働党や南ベトナム解放民族戦線は、真正正路のスターリン主義者だから、何故、「世界革命運動にはたす決定的な裏切りの本質を徹底的に明らかに」しないのか。

われわれが獲得したプロレタリア国際主義の地帯とは何ゆ。

さて、現在の日本の革命的左翼に課せられた試練とは、何か。それは、革命的左翼の思想(綱領)、組織、戦術全般に存在する左翼反対派的政治を、一つ一つ検証し、掃いていくことである。われわれは、かかる困難な任務を担うことによつて、かかる試練をくりぬけることよつて始めて、インドシナ人民を先頭にしながら新しい世界革命の一環としての日本革命を勝利に導く真の革命党を生み出すことに成功するに違いない。

五六年スターリン批判を契機にして、わが革命的左翼は、スターリン・コミンテルン、「既成左翼」の腐敗・墮落に対する告発として誕生した。

今、新しい飛躍を開始せんとするわれわれは、そこにおいて、革命的左翼が反対派の偏向を孕んでいたことを、正直に認めなければならぬ。

共産主義者は、決して真理を恐れるものではない。日本「左翼」が「米中会談」をめぐるアジア階級情勢の急転回に

対して手前みそに改竄し、客観主義的にか対応できないのに対しわれわれは、次の否定的現実の存在を指摘し、且つ、その否定的現実を、日本の共産主義者が如何に受けとめ、突破するかとして主体的に把握する。

ベトナム労働党、南ベトナム解放民族戦線は、確かに「米中会談」に対して、ある種の危惧を持った。

又、ベトナム労働党、南ベトナム解放民族戦線は、世界最強の米帝のどう猛な侵略との対決という極めて困難な情況に規定され、世界共産主義運動の中で現代修正主義との闘いの方向を一切明確にせず、先述のように、ソ連共産党や代々木「共産党」と極めて「友好」関係にある。

又、中国共産党は、最近の外交政策において、ガンジー政権の米帝、ソ連との結託を警戒するあまり、バングラ・デシュ運動の革命的性格を見ぬけず、その運動の絞殺にのりだしたヤヒア・カーンバキスタン政府を支持した。

このような否定的現実、われわれとの意見の相異は、「ボル通、版2」で主張したように、ここに指摘しただけにとどまるものではない。

だが、この現実を直視して、われわれが、われわれの解決すべき問題として把み取らねばならないのは、なによりも、インドシナ革命戦争を最前線とする新たな世界革命の前進に控え、日帝の侵略・反革命を内戦へと持ちこむ真の革命党の未成熟であり、革命的左翼の内部ですら、新しい世界革命の胎動を発見することのできない左翼反対派の体質が蔓延しているという危機的現実なのである。

現在、世界革命の最前線で闘いぬいている共産主義者の間の意見の相異は、一切の帝国主義、搾取者を地上から一掃する革命戦争の

実現の中で、揚棄されるだろうし、又そうしなければならぬ。これが、われわれのアロレタリア国際主義の立場であり、新しいコミンテルンを闘いとする為の革命的現実主義の態度である。

第二章 ニクソン訪中の陰謀と米帝国主義

の 世界反革命戦略の手なおし

I 「米中会談」へのニクソンの陰謀

「米中会談」をめぐるアジア階級情勢の急転回と、それに臨む中国共産党の意図についてのわれわれの評価は、既に述べた。だが、「米中会談」に臨む中国共産党の原則通り、ニクソン政府、米帝が直ちに屈服する等と考えるのは極めて危険である。

本章、Ⅱでみるように、ベトナム、インドシナ革命戦争は、米帝を長期にわたって泥沼にひきづりこみ、人類史上、比類なき世界征覇をなしてきた米帝の世界反革命体制を、極限まで消耗させ、そして、ついに、米帝を世界史的没落の道へと、ゆつたりと、だが確実に追いこんでいるのである。

こうして、米帝が世界史的没落への転換点に立たされているが故に、逆にわれわれは、ニクソン政府の「米中会談」に臨む陰謀と、インドシナ侵略戦争へのなりふりかまわぬ悪あがきの可能性を警戒する必要がある。

ベトナム・インドシナ人民の革命戦争は、雨季にもかかわらず、最後の勝利に向って、更に前進している。

トナム化」政策の遂行の糸口を発見せんとしていることがわかる。

だが、こうしたニクソンの訪中における陰謀は、全世界人民の手によって一撃の下に粉砕されるだろうし、又、そうしなければならぬ。

インドシナ人民は、「米中会談」によって攻撃の手を休めるどころか、米帝の凡ゆる策動を粉砕して、革命戦争を押し進めるだろう。又、中ソ論争、文革の中で鍛えられた今日の中国共産党が、ニクソンが期待するよりな「米中平和共存」「一大国」政治によるベトナム問題の解決に合意すると考えられる根拠はなす。

更に又、ニクソンは、「米中会談」によって、対中国政策は、深刻な矛盾におちこむに違いない。台湾は米帝のアジア反革命体制の最も重要な拠点であり、米台反革命同盟の維持と、「米中関係正常化」の道は、決して相入れないだろう。

ベトナム労働党「ニヤンザン」社説(七月十九日)は、正しくも断言した。

「ニクソンは、狂気のようになって出口をさがしてきた。しかしかれはまちがったところへ行つた。出口のとびらは開かれていたが、かれは袋小路の方へころがりこんだのである。」

Ⅱ ニクソン訪中と、米帝の七〇年代世界反革命戦略としてのニクソン・ドクトリン

第二次世界大戦後、対日帝、対独帝との「強盗戦争」に勝利した米帝は、その世界最強の軍事力と経済力を背景にして、独帝の侵略を打破したソ連、ソ連赤軍の進駐による東欧諸国の「人民民主主義

南ベトナム北部二省における大攻勢、中部高原での攻勢の強化、更に、タイニオン停泊中の米輸送船グリーン・ベイ号爆破にみられる補給困難なメコン・デルタへの浸透をみれば明らかだ。

サイゴン市内では、反米反テュー意識が拡がり、更に又、米軍は士気阻喪し、今秋大統領選に向けての、グン・バン・テューとグエン・カオ・キの政争、サイゴン政府軍のカンボジアにおける略奪、暴行、ロン・ノル政府によるネアクルン基地からのカンボジア軍派遣、サイゴン政府軍の撤退要求等のように敵は腐敗を深化、内部対立も顕在化させているのだ。

本年春のカンボジア、ラオス侵略などのインドシナ侵略戦争の拡大、強化、「ベトナム化」政策の失敗が明白になり、更に、パリ会談で「七項目提案」を胸もとにつぎつけられたニクソン政府は、なにか米帝の世界反革命体制の危機を補修せんと策動しており、米大統領選挙の打算もからみ、その危機からの「活路」を求めて「米中会談」を決意したことは推測に難くない。

ニクソンの「米中会談」にかける陰謀は、第一に、インドシナ情勢の危機的現実を前にして、インドシナ人民の「後だて」としての中国に対して、過去一貫してとりつづけてきた米帝の「中国封じこめ」政策を転換し、国際共産主義運動の分裂・対立、中ソ対立を利用して、かつて、「米ソ共存」を取りつづけたように、「米中(ソ)共存」に持ちこみ、新たな世界反革命体制を形成することであり、そして、第二に、対中国政策において、一定の「犠牲」を払いながら、米軍の完全撤退期限を七一年中とする、「七項目提案」への回答を回避し、来年五月までに「米中会談」を持つという大ニュースで、全世界人民によるニクソンのインドシナ政策糾弾の矛先をかかわし、時間をかせぎ、ニクソン・ドクトリンの反動的な手をおし、「ベ

革命」更に西ヨーロッパの戦後革命の波に対する反革命戦略、又、一方では、中国革命の勝利と、日本、朝鮮、インドシナ半島等への革命の波及に対する反革命戦略を追求してきた。

一九五〇年代を通じて、米帝の「ソ連封じ込め」は、米ソ「緊張緩和」へと向った。

米帝の六〇年代にはいつてからの世界反革命戦略は、部分核停条約など「米ソ平和共存」体制を確立し、国際共産主義運動の「鉄の一枚岩」の崩壊、中ソ対立にとりこみ、「中国封じ込め」と旧植民地、半植民地、とくにアジアの重点においた民族解放斗争の圧殺へと移った。

そして、インドシナ半島こそ、戦後、中国革命に続いて不屈に斗われてきた「革命」の最前線であり、世界帝国主義の「反革命」との死にものぐるいの激突の場所であった。

英雄的に斗われているベトナム、インドシナ革命戦争の真の偉大さは、世界最強の帝国主義軍隊を撃破し、ベトナム、インドシナ民族の解放をかちとろうとしているだけでなく、するすると米帝をインドシナの「泥沼」にひきづりこみ、米帝の世界反革命体制を極限まで消耗させ、遂に、その矛盾を露呈させ、更に又、その解放の雄叫びは、国際プロレタリアートの心臓を揺がし、新しい世界革命の巨波を形成し、熟しきり、「寄生性と腐朽性」を強める米資本主義、米帝国主義の世界史的没落の道を掃き清めている点にこそある。

さて、六〇年代後半、顕在化したベトナム侵略戦争の完全破綻、ドル危機、慢性インフレ、失業問題等の内外にわたる政治的、経済的危機をかえこんだ米帝は、ケネディ大統領以来の六〇年代世界反革命戦略を転換し、七〇年代世界反革命戦略としてうちたした。それは、ニクソン・ドクトリンである。

悪化した国際収支の中で、唯一の積極要因であった貿易収支すら四億ドル近い赤字を記録して、ドル危機がぬきざしならない状態になったことであった。

こうした、ニクソン・ドクトリンの最初からの躰きに直面したニクソン政府は、急遽、対中国政策の転換を中心にして、米帝の七〇年代世界反革命戦略の実施を手おしせざるをえなかった。これこそ、ニクソン訪中の直接的背景である。

従って、ニクソン訪中、「米中会談」計画を直ちに米帝の七〇年代反革命戦略、ニクソン・ドクトリンの根本的転換とみるのは誤りである。

又、このことを根拠にするからこそ、既に主張したように、三十年間にもわたって「世界征覇」をなしてきた米帝が、いま、その世界史的没落への転換点に立たされているが故に、われわれは、ニクソン政府の「米中会談」に臨む反人民的陰謀を徹底して暴露し、新たな「ベトナム化」政策、インドシナ侵略戦争への狂気の悪あがきを警戒し、沖縄斗争を中心として、インドシナ、中国、朝鮮人民の闘いと連帯し更に、米帝をアジアからたたきだす戦線を強化する必要があるのである。

III ニクソン訪中とニクソン「新経済政策」

米帝が、世界史的没落を開始したことは、その世界反革命体制が根本的危機を迎えているだけでなく、戦後、各国資本主義の復興を支えてきた米國資本主義自身が、既に爛熟しきり、極度に「寄生性と腐朽性」を強めていることから判断できる。

ニクソン政府は、「米中会談」計画の発表につづいて、八月十五

しかも、重要なのは、米帝の六〇年代世界反革命戦略が、ヨーロッパにおける東西「緊張緩和」、「米ソ平和共存」をおしすすめるがらのアジア反革命体制の強化であったことの当然の帰結として、新たな戦略が、もっぱらアジア反革命体制の転換を主要内容として

従って、ニクソン・ドクトリンは、「アジア人どおして戦わせる」ために次の三つを中心として実施され始めた。第一は、中ソ対立を利用しつつ、「米ソ平和共存」体制を持ちこんだように、長期的には「北京との対話」で「米中平和共存」体制を準備し始めた。

第二は、空軍、海軍をのぞいて、米帝の在アジア地上軍を削減し、拠点防衛を中心に移したが、それは、「フォーカス・レチナ作戦」や、「フリーダム・ボールド作戦」にみられるように、核恫喝を背景にし、空軍、海軍を活用した、機動戦型反革命体制の強化として実施され始めた。

そして、第三は、復活した日本帝国主義のアジア侵略・反革命の野望を利用して、日米反革命同盟を再編・強化することであり、それは、七二年沖縄返還と在日米軍基地の再編であった。

ところが、ニクソン政府の七〇年代反革命戦略は、実施されるや否や、「予期せぬ」暗礁に早くも乗りあげたのである。

勿論、沖縄人民の爆発的闘いも、日米反革命同盟の再編・強化の野望を危機的状況においこんでいるが、なによりもニクソン政府の「予期せぬ」暗礁は、「ベトナム化」をおしすすめる為、不可欠であった本年春のラオス、カンボジア侵略が、ベトナム、ラオス、カンボジア三国人民の手によって一撃で粉砕され、同時に、「パリ会談」では「七項目提案」をつきつけられて、「ベトナム化」政策は、更に困難な状況においこまれ、しかも、本年前半には、米國経済の

日、ドル金交換一時全面停止、一〇多輸入課徴金制度の採用、等を中心内容とした八項目にわたる非常事態宣言、「新経済政策」をうちだした。

ベトナム情勢の「悪化」と、五月マルク騒動以降の米國金準備高の百億ドルを割らんとする激減、過去、ほとんど唯一の黒字項目だった貿易収支の本年度前半における四億ドル近い赤字、更には、七〇%に到らんとする高失業率、物価急騰という未曾有の経済危機に直面することによって、ニクソン政府が、戦後世界体制を画期する二つの政策をうちだしたことは、推測に難くない。

ニクソン政府は、戦後、米帝みずからが推し進め、世界資本主義の統一市場を支えてきたドル金体制としてのIMF体制とそれを基礎にした「自由多角無差別貿易」としてのGATT体制の「終焉」を、なりふりかまわず宣言し、絶望的なドル危機と不況を、対外的には、輸入課徴金の圧力による各国「平価切り上げ」、特に「最強の通貨」「円の切り上げ」、又対内的には、物価、賃金の九十日間凍結等を伴う景気回復政策を中心にして補修せんとしている。

だが、ドル危機、「スタグフレーション」としてあらわれた米國経済の危機は、一九二〇年代以降、既に熟しきった米國資本主義の「寄生性と腐朽性」及び、戦後の各国資本主義の生産力の不均衡発展に重要な経済的基礎を置く以上、ニクソンの「新経済政策」は、米國経済の危機を救うことは決してできないだろう。

例えば、国際収支悪化の従来を要因は、海外軍事支出、対外政府無償援助と、対外長期投資であった。

前者への対策は、ドル危機対策の一環としてのニクソン・ドクトリンが、インドシナ人民を先頭にした新しい世界革命の前進によって早くも暗礁に乗りあげているようにままならず、又、対外長期投

資、民間資本の「世界企業」「多国籍企業」形態での流出は、米國資本主義の「寄生性と腐朽性」にもとづく利潤率の極端な低水準にある以上、後者の対策も決して容易ではない。

又、過去、黒字をつづけていた貿易収支も、七一年度は、七五年ぶりの赤字へと転化するが予想されるが、その原因が、農産物輸出による黒字幅を上回る工業製品部門の赤字と、景気刺激政策としての「人為的」インフレ政策による国内消費の増大、それによる輸入増であることを考えあわせるなら、いかに米國の貿易収支も危機的であるか明白である。

又、ニクソンは、景気回復政策として、投資減税によって設備投資を活性化させ、又、自動車消費税廃止、個人所得税減税繰上げ実施で、国内消費増大を計り、更に、インフレ対策としては、九〇日間の物価、賃金凍結等による強引な所得政策の導入で乗りきらんとしている。

だが、こうした「人為的」インフレ政策の追求は、既に歴史的に破綻しており、独占ブルジョアジーの利益追求のためのかかる政策は、その結果起る矛盾を、所得政策によって米國労働者人民に押しつけるものに他ならない。

米帝の内外にわたる政治的、経済的危機の矛盾は一切、米國の労働者人民に、特に、劣悪な生活条件を強らされている「プアー・ホワイト」や黒人層に押しつけられているのだ。

こうした状態を、米國労働者人民は決して許さないだろう。インドシナ人民を先頭とする新しい世界革命の前進に迎え、米國の労働者人民が、急速に政治的に成熟し、世界ブルジョアジーの最強の要塞を奪取する日は、決して遠くないに違いない。

第三章 「佐藤政府の危機」と日帝の七〇年代アジア侵略と反革命戦略

I 「米中会談」をめぐるアジア階級情勢の急転回と日本帝国主義

日本帝国主義の七〇年代初頭の動向、階級支配の再編に対する詳細な分析は、次の機会にして、ここでは、「米中会談」をめぐるアジア階級情勢の急転回が与える、我々の最も主要な敵日本帝国主義の七〇年代アジア侵略・反革命戦略への影響、現在の日帝の政治的理念を代表する「佐藤政府の危機」の性格について明らかにしよう。米帝の「米中会談」計画、对中国政策の転換にあらわれた世界反革命戦略の手をおしと「新経済政策」の実施は、まさに世界的没落に瀕する米帝のむき出しの特殊利害の強力的推進であり、それは一挙に、アジア階級情勢を流動化させ、米帝を中心とした全ての國際反革命同盟の矛盾を顕在化させ、そして特に五〇年代初頭以来の自民党主流派政治の危機、「佐藤政府の危機」を招き寄せ、日帝の七〇年代アジア侵略、反革命戦略に根底的影響を与えようとしている。

米帝の对中国政策の転換は、蒋介石派、国民党政府の國際的地位とその将来の展望を完全に喪失させ、その國際的危機は、間違いないく、対内政治の危機へと転化し、爆発するだろう。

又、朝鮮半島では米帝のこうした世界反革命戦略の手をおしは、在「韓」米軍の削減として直接的に表われ、朴政権は、その政治的延命のため、日帝の朝鮮侵略、反革命の野望と結託し、更にその腐

敗・反人民性を強めざるが、そのことは同時に、民族自決と南北朝鮮統一を求める朝鮮人民による反朴、反米帝、反日帝の諸斗争の激化としてあらわれるに違いない。

そして、朴政権が政治的に不安定になればなる程、加速度的に日帝による朴政権への介入、南朝鮮への、経済的、政治的進出は急速に押し進められるだろう。

例えば、早くも、八月十日、第五回日「韓」定期閣僚会議では、「韓国」に対する特惠関税制度の「改善」や、ソウル市地下鉄建設、「韓国」国鉄電化への借款供与、船舶に対する借款供与等が決定されているのだ。

ところで又、こうした急激な米帝のニクソン・ドクトリンの手をおし、对中国政策の転換は、佐藤政府を根底的動揺におとしこみ、日帝の七〇年代アジア侵略・反革命戦略に決定的影響を与えんとしている。何故か。それは、日本ブルジョアジーが、戦後、中国革命の進撃につづく、アジアの戦後革命の嵐に恐怖し、その延命の道を、第二章でみた米帝の世界反革命体制・日米反革命同盟の下でのみ求めてきたのであり、事実六〇年代において日本資本主義は、米帝の「中国封じ込め」、ベトナム、インドシナ革命戦争任務を中心とするアジア反革命体制に依拠することによって、「世界第二の経済大國」になりあがった。

だから、七〇年代初頭の沖繩返還を通じた佐藤政府と日帝のアジア侵略・反革命の道は、米帝の七〇年代世界反革命戦略・ニクソン・ドクトリンの一環としてあり、そして、その「順調」な実現・米帝のアジアからの戦術的後退を大前提として打ち立てられており、従って、日帝独自の「世界反革命戦略」が未だ全く不確定なままの、いわば、六〇年代「対米協調」政治の延長にあつたのである。

だが一度、米帝の七〇年代世界反革命戦略の実現が、ベトナム、インドシナ革命戦争によって暗礁に乗りあげ、米帝が、その政治的、経済的危機の深さ故に自己の特殊利害を一挙につき出し、七〇年代世界反革命戦略を転換し、手をおしするや否や、日米共同声明以降の日米反革命同盟の再編・強化過程の日米帝間の矛盾は、顕在化し、日帝独自の七〇年代「世界反革命戦略」が鋭く問われ、佐藤政府の「対米協調」政治の決定的限界を露呈させたのである。

II 「中国問題の解決」と日本帝国主義

こうした佐藤政府と日本帝国主義の七〇年代アジア侵略・反革命戦略をめぐる動揺は、「中国問題の解決」をめぐる集中的にあらわれている。

日本帝国主義は、既に指摘したように、米帝の七〇年代世界反革命戦略・ニクソン・ドクトリンの一方の重要な担い手であり、沖繩返還による日帝のアジアにおける新たな「盟主」としての登場、アジア反革命体制における米帝との「肩がわり」の遂行は、米帝のみならず、アジア反共諸國政府から期待され始めていた。

日帝の運命にとって、「アジア」は、米帝にとってのそれと、比較にならない程、重い。

日本資本主義の再生産構造からして、アジア市場の確保は、その一切の運命を決定する程の死活問題であり、日本資本主義にとってアジア市場の果す役割の重大さは、将来、強まりはすれ、弱まることは全くない。

更に又、日本資本主義は、その地理的、政治的位置からして、「大國」中国を「後だて」にしたアジアにおける新しい世界革命の巨波

環といては、利益の一致のため、米帝の急進と日帝の急進(?)の間に、必然的に近づいていくのだ。



**プロレタリアートの階級闘争の
戦術に関する覚え書**
—— 共産主義者の〈系統的活動〉について ——
古川 哲

→ 日帝の露骨な自利主義

日帝の露骨な自利主義は、中国の革命を誘導し、米帝の侵略を始めた。

を真向うからかぶらざるをえず、その革命の一步一步の進撃は、直ちに、日本資本主義の墓場への歩みなのである。

だから、米帝のニクソン訪中計画・対中国政策の転換は、日帝にとつて腰をぬかす程の重大問題であり、日帝は、たとえ当面表向きには米帝の対中国政策の転換に「同調」することはあつても、従来「中国封じ込め」政策を根本的に転換することは非常に困難なのだ。

日本帝国主義者こそ、かつて中国を侵略し、「殺しつくし、奪いつくし、焼きつくす」三光政策の下手人であり、不屈の中国人民の抗日戦争によって中国大陸から放逐されるや、今度は、彼等は、恥知らずにも、中国人民の敵ミ英帝と結託した蔣介石一派と手をむすび、日台条約を締結して、米帝とともに戦後一貫して「中国封じ込め」政策を取りつづけてきたのである。

今再び、朝鮮、台湾を侵略せんとしている日本帝国主義にとつて「日韓」台反革命体制の強化の道は至上命令である。同時に、又、一方では、日帝は、当然のことだが、国際政治の趨勢である革命中国の承認——蔣介石一派との断絶問題への態度、対中国政策の転換を迫られているのである。

ここにこそ、日本帝国主義にとっての「中国問題の解決」の困難性とこの問題をめぐる佐藤政府の深い動揺が存在しているのだ。

米帝の内外にわたる政治的、経済的危機が深化し、米帝がアジア反革命体制を自己の特殊利害を先行させて再編するにつれて、日本帝国主義は、史上最強の帝国主義ですら絞殺しえなかつたベトナム・インドシナ革命戦争、新しい世界革命の前進との真正面からの対決を自己の運命としてかかえこまざるをえない。

かかる運命が日帝にとって過酷であればある程、日帝はアジア人民に対して最も露骨な帝国主義として登場するに相違ない。

七二年沖繩返還を目前にして、日本帝国主義は、急速に国内の諸階級、諸階層を再編し、人民の一切の民主主義的権利を奪い取り、政治警察を更に強化し、その頂点として帝國主義軍隊を完成させんとしている。

こうした情勢の展開の中で、日帝心臓部の革命的左翼は、新しい世界革命の胎動を発見し、その世界的地平を理解し、日本労働者人民の国際主義的任務を鮮明にすることの重大性をはっきりと理解しなければならぬ。

◎ 今秋大衆斗争の主要スローガン ◎

- インドシナ革命戦争に連帯し、今秋武装した三里塚、沖繩諸斗争の爆発で、佐藤政府を倒せ！
- 日帝のアジア侵略・反革命を許すな！
- 一、三里塚農民とともに「新東京国際空港」建設を粉砕せよ！
- 一、沖繩人民と団結し、日帝による沖繩の侵略前線基地化を阻止せよ！
- 一、沖繩返還協定批准阻止！
- 一、自衛隊の沖繩派兵阻止！
- 一、米軍基地撤去！ 米軍政打倒！
- 一、在日アジア人民への民族的抑圧！入管体制を粉砕せよ！
- 一、入管法国会工程阻止！
- 一、日「韓」台反革命体制の強化粉砕！
- 一、中華人民共和国の承認！
- 一、日台条約粉砕！
- 一、日「韓」条約粉砕！
- 一、米帝をアジアから叩き出せ！
- 一、南ベトナム臨時革命政府の「七項目提案」断固支持！
- 一、日帝のサイゴン政府援助反対！

次

序	マルクス主義戦術論を我々の活動の基礎とし、現在の革命的左翼の混乱に終止符打たねばならない
第一章	プロレタリアート（一党）の階級斗争の戦術の基礎——戦術とは何か
Ⅰ	戦術の一般的性格
Ⅱ	プロレタリアートの階級斗争の戦術の一般的性格
Ⅲ	プロレタリアートの階級斗争の戦術全体における「革命的戦術」（レーニン）の位置
第二章	プロレタリアート（一党）の階級斗争の戦術の土台——「正しい情勢分析」とは何か
Ⅰ	プロレタリアートの階級斗争の「客観性」
Ⅱ	情勢分析について
Ⅲ	「正しい情勢分析」について
第三章	プロレタリアート（一党）の階級斗争の戦術——「正しい戦術」とは何か
Ⅰ	プロレタリアートの階級斗争の戦術に対する価値判断の「客観性」
Ⅱ	「正しい戦術」について
Ⅲ	「正しい戦術」と共産主義者の主観的內面的価値

目

序 マルクス主義戦術論を我々の活動の基礎とし、現在の革命的左翼の混乱に終止符を打たねばならない。

1. この論文で意図した内容は、主に次の四点である。

第一は、日本に於ける革命的左翼の創成期以来の、無自覚ではあったが、その胎内に孕んでいた「ラディカリズム」をマルクス主義戦術領域から対象化する第一歩とする事。

一九三五年コミンテルン七回大会「反ファシヨ統一戦線戦術を、更に反動的に、更に一国主義的に解釈し、議会主義政党の道を歩み始めた代々木「共産党」や、第四インターの左翼反対派の偏向をより観念的に拡大した日本型トロツキズムとしての黒田サークル集団に対して、旧共産同の生命は、六〇年安保斗争への全精力の投入に見られたように、なによりもその「ラディカリズム」であった。又、六七年〜七〇年迄の巨大な政治的昂揚を索引してきた「精神」も、その「ラディカリズム」の継承として理解する事ができる。

だが、六〇年代に於て、その「ラディカリズム」は、マルクス主義戦術領域から対象化される事は、ほとんどなかった。

この事は、歴史的制約を捨象すれば、六〇年代の革命的左翼の運動の左翼反対派の性格を合理化するものであった。ある場合は、戦術が、「階級関係の全体性」の中で決定されないで、単に「左翼」陣営内の「党派性」として決定される。戦術左翼の性格であったり、

「少数派は、批判的見地の代わりに独断的な見地をもちだし、唯物的な見地の代わりに観念的な見地をもちだしている。少数派にとっては、革命の推進力となっているのは、現実の諸関係ではなくて、たんなる意志である。われわれは労働者にこう言う、『諸君は諸関係を変えるためだけでなく、諸君自身を変革し、政治的支配の能力をもつようになるために、なお十五年、二〇年、五〇年間というもの、内乱と民族的斗争をとらねばならない』と。ところが諸君はこう言う、『われわれはただちに政權をにぎらなければならぬ。それができなければ寝てしまってもかまわない』と。……民王々義者は人民ということばをまつりあげているが、諸君はプロレタリアートということばをまつりあげている。民王々義者と同じく、諸君は革命的発展を『革命』という空文句にすりかえられている。』（カール・マルクス『ケルン共産党裁判の真相』ME全集八巻）

「いつ、どこで死のうが、おそれはしない。ただわれわれの戦いの叫びが、誰かの耳に入り、誰かが代つてわれわれの武器をとり、ほかの誰かが進み出て、機関銃の連続音と新しい斗争と勝利の雄叫びと相和したく読経をつとめてくれれば、それでいいのである。」（チェ・ゲバラ『三大陸人民運帯機構執行書記局へのメッセージ』一九六七）

又ある場合は、党建設、党活動が系統性のない、即ち「革命的戦術」（レーニン）——蜂起・労働者権力樹立へ向けた「計画された戦術」として理解されないで、自然成長的、運動至上主義の性格であったりする傾向が、それである。

これらの傾向は、日本の革命的左翼が、最近の三年間の烈火の階級斗争の試練をくぐりぬけ、それを教訓化し、六十年代の左翼反対派の衣裳を脱ぎ捨て、真の革命主体へと飛躍する為に、極めて大きな阻害要因なのだ。

例えば、戦術が、「階級関係の全体性」の中で決定されない「戦術左翼」的傾向は、階級斗争が、デモの様な比較的未成熟な段階では、さして危険な傾向ではないが、六九年春から秋にかけての様に、斗いが非和解的になればなる程、本格的な武装斗争を要求すればする程、最も危険な傾向として作用するのは、明らかだろう。

従つて、かかる左翼反対派の運動の限界を克服し、且つ、革命的左翼の最も秀れた特質の一つたる「ラディカリズム」を我々が継承する為には、まず、理論的に、無自覚的であった「ラディカリズム」をマルクス主義戦術論として対象化する事から出発せねばならない。

第二は、「安保斗争の政治理論としての総括」という表現にみられる関西共産同の、未整理だが、秀れた問題意識を更に発展させ、且つ、六〇年代階級斗争の限界と一体になった「政治過程論」や、「革命的政治斗争とは何か」等の内容的な決定的な限界を鮮明にする事である。日本の革命的左翼の「ラディカリズム」は「政治過程の独自の運動法則」という「政治過程論」の有名な表現の中に、象徴的に見ることが出来る。

この意味に於て、『ボル通』本号は、『ボル通創刊号』、「政治過

程論」と我々の新しい出発点について―日本マルクス主義運動の客観主義「プラグマチズム」を克服し、革命的現実主義の活動態度をかちとうろくする」の更に積極的な展開でもある。

詳しくは「ボル通創刊号」を是非参照してもらいたい。政治過程論」の政治理論上の限界だけを、再度次の三点に整理しておく。①「大戦術」(レーニンの表現では「革命的戦術」)の内容規定の致命的な程の不充分性。②「政治過程論」では「革命的戦術」(「大戦術」)の内容は、次の様にしか理解されていないのだ。

「ブルジョアジーの支配能力の動揺危機(内閣危機)体制危機」へと発展する過程で味方の内部にプロレタリア権力の組織を拡げ、喪失された国家の集約性をプロレタリア独裁のもとに集約しなす事、ロシア革命の教訓からレーニンによって発見されたこの「二重権力」の状態は、現在もなお有効なプロレタリア革命の基本法則である。……」

この内容では、無政府主義(経済主義、サンジカリズム)を決定的に批判する事が出来ない。ここでは、プロ独樹立に到る「政治革命」の血みどろのダイナミズムが表象されていず、レーニンの「革命的戦術」の核心が、武装蜂起―ブルジョア国家組織の解体―労働者権力樹立として把握されていない。従って、それでは、十七年ロシア革命の二月から十月にかけての「二重権力の状態」が「プロレタリア革命の基本法則」と固定的に理解され、自己目的化されてしまう。「二重権力の状態」とは、二月蜂起のプロレタリア革命の深さと広さの、不徹底性に基く、革命の或る特殊な状態にしかすぎないのだ。

②「革命的戦術」(「大戦術」)の内容規定の欠落は、「大戦術」と「小戦術」の弁証法的関係の考察を曖昧にさせ、「小戦術」(改良斗争)の外的総和として、「大戦術」(政治革命)を理解する傾向があり、それ故、実践上の帰結として、経済主義的、サンジカリズムの傾向を正しく批判する事が出来ないでいる。

③この事を、組織論の次元で換言すれば、党の現実的に果すべき役割、それを保証する組織性格が、全く不鮮明になっている。武装蜂起を組織する、ボルシェヴィキの組織原則に基いた党形成の為の斗いの意義に対する無自覚の招来。

以上である。

我々は、単に過去の「政治理論」の文献考証を意図しているのではない。過去の日本の革命的左翼の無自覚的な「ラディカリズム」を、マルクス主義戦術論の中に確定する事は、決して過去の課題にとどまらず、極めて、今日的な実践的課題なのだ。

第三の内容は、六七年以来の巨大な階級斗争の波の底部に陥ちこんでいる今日、最も革命的な同志の活動の中に存在している主観主義的傾向、実践上の混乱を克服する為の第一歩とする事である。

自然発生的「ラディカリズム」は、階級斗争の昂揚が中断したり、過ぎ去ったりするや、必ず混乱した姿をとって、生み落されるものである。(パリケードが撤去された今日の学園に於ては、一つの共通した混乱が存在している。この事については、「ボル通」参照。)

この現在の革命的左翼の実践上の混乱は、序、2で検討するが、この原因は、精神的には、政治理論、マルクス主義戦術論理解の低水準に基いている。

第四は、我々がマルクス主義戦術論をしつかりと学習し、且つ、学習一般にとどめないで、日々の活動、斗いの基礎とし、活動の中でこの理論を体得する為の一作業とする事である。

現在の革命的左翼の実践上の混乱―混迷は、単に過去の活動家の政治理論の低水準という認識内容だけにその根源があるのではなく、より本質的な問題は、六〇年代の革命的左翼の活動及び活動態度―実践の中にこそ存在しているのである。

それは、明白に、自然成長的な狭い階層運動、特に、インテリゲンチヤ運動を背景にした主観主義的な活動態度に他ならない。我々はまず、このような自然成長的活動を克服し、更に、更に活動に系統性(系統性)の内容が、第一章以下の内容に他ならない。)を持たせ、活動態度の中で、マルクス主義戦術論を体得する事に心を配らねばならない。又、マルクス主義戦術の本質的な政治的諸側面が現象形態の面に投影されたものが、マルクス主義軍事理論であり、従って、我々は、マルクス主義戦術論を常に武器として、最近の数年間の革命的左翼の軍事的経験、軍事理論の諸論争を教訓化し、日本に於ける革命戦争(戦争を最も広義の意味に解釈して)の性格についてもっとも真剣に考え抜く必要があるだろう。

戦斗の武器の破壊力の大小で、共産主義運動の「左翼性」の尺度とするような、マルクス主義戦術論と無縁な小児病的発想では、決してこの数年間の豊富な経験を教訓化する事は出来ない。

2. 現在の革命的左翼内部の主観主義的傾向について

既に述べたように、自然成長的「ラディカリズム」は、階級斗争の昂揚が大きければ大きい程、又、その昂揚の終息が急速であれば

ある程、運動自身のダイナミズムによって、昂揚が過ぎ去った後に、大きな混乱に陥ちこむものである。

現在、最も革命的な部分が確かに主観主義という病気に患っている。

我々は、この病気を克服しないかぎり、この数年間の試練を教訓にし、口先だけのレーニン主義ではなく、真のボルシェヴィキ的組織原則にのっとり革命党建設に成功することはできないだろう。

この数年間の試練を真剣に正しく教訓化した部分こそが、将来の更に非和解的で、全人民的決起の時代に於いて、最近の権力―警察が「披露」してくれた以上の破防法攻撃―組織潰滅攻撃の真只中ですら、革命党を防衛し、プロレタリア革命を勝利させる偉大な事業を担うことができる。

以下、2点に整理して、現在の革命的左翼の典型的な主観主義的傾向を検討する。

① 主観的戦術論―戦術の不可知論について、この傾向は、革命的左翼の諸政治組織のみならず、無党派だが、パリケードが撤去された以降でも、斗いを組織している献身的な全共斗系活動家に広範に存在している。

「大学」が自己の頭の中で「解体」した事を、今も敵として存在する大学が解体したと取り違える傾向を持った、地区運動―地域斗争派や、「武装斗争」を如何に準備し、革命運動の前進の中に如何に組み込むのかという問題に無自覚なまま、革命的スローガンを強調する傾向がそれである。(「ボル通」参照)

この二つの傾向―戦術が、日本の革命運動の中に揚棄されないのは、戦術が、単なる個人や、目的設定の不明確な少グループのみの次元から決定されており、結局、個人や、少グループの恣意

的な選択に戦術が依拠しているからである。(この傾向は「戦術の不可知論」と呼ぶ事ができる)

マルクス主義戦術論には「正しい戦術」が存在するという非常に重要な命題が含まれている。(第3章参照)

「正しい戦術」が存在するという確信から始めて、我々は当面の闘い―戦術の可否を検討する事ができる。

我々は、たとえ本人が自覚していなくとも「戦術の不可知論」者たるこの「無党派」活動家に対して、その政治水準を高め、闘いの目的を明確にし、「無党派性」を一掃し、彼等の闘いを、日本の革命運動の有機的の一環に組み込まねばならない。

② 「単純なる軍事的見地」について

④ 政治と軍事が対立する、もしくは、後者が前者に優先するという見地について

現在、最も革命的な同志の中に、政治と軍事が対立する、もしくは、後者が前者に優先するという見地が顕著に見られる。

七〇年秋以降の闘いの中断、停滞の原因を第一義的に敵階級と味方階級の関係の中に、特に、味方陣営では、党と階級の結合関係の中に、即ち一言で言えば、「政治」的側面に求めないで、単純に「軍事が悪い」からだと考える見地は、マルクス主義戦術論(政治―軍事論)とは無縁である。

この見地は、実践的には、「党の武装」―「軍事路線」が党の「大衆路線」と対立するという見解と結合して、召還主義の傾向を、又、「革命的スローガン」が着実に準備されないで、「革命的空白句」に終ってしまう最も危険な傾向を招かさせてしまう。

レーニンは、一九〇五―六年、労働者人民に精力的に蜂起を

を、階級斗争の或る政治的側面を問題にしており、「実力斗争」とか「武装斗争」とは、その軍事的側面(ビン・棒・銃火器やデモ・ゲリラ等)を問題にしているものであり、「大衆斗争」と「武装斗争」が対立する概念と理解する事は、明らかに④の誤りと同一なのである。

この誤った主張は、少くとも六九年春から秋にかけて、日本階級斗争が「本格的武装斗争」を必要としたという戦術上のしかも斗争形態上の問題を固定化した、実に素朴な政治理論に基づいているのだ。

この主張は、「政治過程論」の限界―革命が単なる過程としてしか理解されず、弁証法的に理解されていない事、「小戦術」の外的総和としての「大戦術」の実現という発想―をそのまま引き継いでおり、しかも、七〇年代の運動を、なにか一つの特定の斗争形態―武装斗争にしばりつけてしまっている。

そもそも、プロレタリアートの階級斗争の戦術は、刻々変化する生きた社会的現実から決定されるものであり、従って、その戦術は、極めて柔軟に決定されるものである。ましてや戦術形態の部分的側面たる斗争形態に到っては、その持つ無限の多様性を承認しなければならない。

斗争形態の諸問題について、長くなるが、極めて教訓的なので、以下レーニンの言葉を利用しよう。

「すべてのマルクス主義者は、斗争形態の問題を検討するにあたって、どういう基本的要求を提出しなければならないか。第一に、マルクス主義は、運動をなにか一つの特定の斗争形態にしばりつけないで、すべての原始的な形態の社会主義とはちがう。マルクス主義は、多種多様な斗争形態を認

呼びかける時ですら、次の事(傍点の部分)を付け加える事を忘れなかった。

「ロシア革命の偉大な数日の教訓を自分のものとしながら、われわれの活動をさらにひろく展開し、われわれの任務を更に大胆に提起しよう。われわれの活動の基礎には、現時点で諸階級の利害と全人民発展の諸要求との正しい評価がある。……いつもそうであるように、大衆の意識の発展が、われわれの全活動の基礎であり、主要な内容である。」

しかし、ロシアがいまたたきだされている、このような時機には、この一般的で、恒常的で、基本的任務に、さらに特殊な任務がつけくわえられることを、わすれないようにしよう。」

⑤ 「モスクワ蜂起の教訓」

⑥ 「大衆的実力斗争は六〇年代型斗争であり、武装斗争が七〇年代型斗争である」という主張について

我々は、将来の日本の階級斗争を、六九年の春から秋の闘いの成熟以上のもので想定すべきであるし、この意味に於て、大胆に武装蜂起―権力樹立へと登りつめる「本格的な武装斗争」を、思想的にも、組織的にも準備し、六〇年代に比較的自然成長の運動に依拠して建設された組織を貫徹的に鍛え直さなければならぬ。この事をぬきにして、武装蜂起を組織する党建設はありえないし、あの 六九―七〇年の階級斗争の課題に真剣に答える事がなく、何も教訓する事がなかった革共同中核派等の諸政治組織が将来の血みどろの決戦で必ず敗北する事を見るより明らかなのである。

だが、⑥の主張は誤っている。何故なら、「大衆斗争」とは、階級斗争の遂行主体の広がり

めるものであるが、そのさい、それらの形態を「思いつく」のではなく、運動の過程で自ら生ずる革命的諸階級の斗争形態を普遍化、組織化し、それに意識性を与えるにすぎない。あらゆる抽象的な公式、あらゆる空論的処方箋に、無条件に反対するマルクス主義は、進行中の大衆斗争―それは運動の発展、大衆の自覚の成長、経済的及び政治的危機の激化に伴なってたえず新しく、ますます多様な防御と攻撃の方法を生みだす―に對して注意ぶかい態度をとることを要求する。

だからマルクス主義は、どんな斗争形態をも拒否するなどは絶対に誓わない。

マルクス主義は、ある場合だけ実行可能で、その時機だけ行なわれる斗争形態にとどまることはけつしてなく、その時の社会情勢の変化にもなつて、その時代の活動家の知らない、新しい斗争形態が不可避となることを認めるものである。……この点でマルクス主義は、大衆的実践のなかで字ぶものであり、書斎の「組織屋」が思いつく斗争形態を大衆に教えようなどと、うぬぼれるものではけつしてない。……第二に、マルクス主義は、斗争形態の問題を、かならず歴史的に考察することを要求する。具体的な歴史的情勢をよそにして、この問題を提起することは、弁証法的唯物論の初歩を知らないことを意味する。

経済的発展の種々の時機には、政治、民族、文化、生活様式その他の条件の違いによって、色々な斗争形態が前面におしだされて、主要な斗争形態になり、それに関連して、第二義的付随的な斗争形態も同様に形をかえる。ある運動のある発展段階における具体的な情勢を細かく考慮せずに、特定の

斗争手段の問題にイエスカノーかを答えようとするのはマルクス主義の基礎をまったくおきざりにすることを意味する。以上が、我々の指針としなければならぬ二つの基本的な理論的命題である。」(『バルチザン』)

「大衆的実力斗争は六〇年代型斗争であり、武装斗争が七〇年代型斗争である」という混乱した主張は実践上では次の危険な道を進むことを促進する。

即ち、前衛の労働者人民に対する宣伝、煽動を否定し、労働者大衆を決起させて政治的自覚を促す事を否定し、同時に毛沢東流に表現すれば「大衆路線」の一方の側面たる「幹部政策」一緊急不拔の共産主義者の創出―党建設を困難ならしめる。

六〇年代の前衛の活動が「大衆運動主義」であると規定する時、それは、決して前衛が、労働者大衆に依拠し、決起させることを否定するのではなく、当時の前衛の活動が、マルクス主義戦術論に依拠して、即ち当面の闘い、活動が、系統性のない自然成長の性格の運動であり、従って、その下で結晶された前衛組織が、合法主義に毒されたものであるという意味なのである。

① 日本のプロレタリア革命過程を単純に「遊撃戦の発展―正規戦(蜂起)」に限定する戦術論について

この戦術論は、現在の日本社会の政治・経済構造と、かつての中国社会の政治・経済構造の特殊性の相異を無視し、かつての中国の革命戦争や、現在のインドシナ革命戦争の発展過程を、そのまま日本の革命戦争に類比させたものである。

例えば、我々は、代々木「共産党」の日和見主義派の革命観と、この戦術論の持つ革命観との「奇妙な」一致を発見する。

「究極目的」と「現在の状態」とを媒介する実践的環であるとも換言出来る。(注1)

従って、その組織の設定する「究極目的」が、「現在の状態」に対し、何如なる関係にあるのか、即ち、前者が後者に対して超歴史的に、先験的に指定された超越的なものか、それとも、前者が後者の中に可能的に存在する内在的なものかによって、その組織の目的的活動たる戦術は、一貫した合目的のそれか、否かが決定されてしまう。

ブルジョアジー(ブルジョア政党)による階級斗争に於ても、「自由、平等、博愛」に象徴されるブルジョアの諸理念―「究極目的」は設定されはした。そしてブルジョアジーは自らが掲げた諸理念の下に、「封建的な、家長長制的な、牧歌的な諸関係を、のこらず破壊した。」(マルクス、エンゲルス「共産党宣言」)

だが、一度、ブルジョア革命が実現され、その社会で資本主義的生産様式が支配的になるとともに、又、一方の極に、生産手段から強力的に分離された直接的生産者の登場、しかも、自己の労働力を市場に投げ出すことよってのみしか、自己の生活資料を獲得することが出来ない階級の登場とともに、ブルジョア革命の成果たる諸制度は、自己目的化され、過去の変革の旗印だった諸理念―「究極目的」は色あせ、純粹に形式的なものへと変貌し、もはや、一切の主体的活動の現実的指針たりえなくなった。商品形態が社会の普遍的形態となり、全ての人間の生活現象を包摂する時、人間の相互関係は商品の対象性形態として、物象性として立ち現われる。

そして、こうした物神的な対象性形態の直接的、イデオロギーの諸規定は、常に資本主義社会の諸現象を超歴史的実在へと、人間にとって「第二の自然」へと、現象させるものであり、この内容こそ

即ち前者は、民主連合政府―民族民主統一戦線政府―プロ独政府と、観念世界で革命過程を図式化し、革命の発展を形而上学的な「ゆるやかな発展」と規定し、従って日々の活動は、議会における得票数の勘定に対して、獲得した徐々に拡大する「鉄砲」の数の勘定に置かれていたのだ。

日本における革命戦争の性格・戦術論の基礎は、レーニンが簡潔に述べたように「過去の観点からだけではなく、また未来の観点からも考察され、しかもゆるやかにしか変化しない『進化論者』の卑俗な考え方によってではなく、弁証法的に考察され」(『カール・マルクス』レーニン全集第二巻)なければならぬだろう。

「根本的(ラディカル)であるというのは、ものごとをその根本においてつかむことである。ところで、人間にとって根本的なものは、人間そのものである。」という青年マルクスの有名な言葉は、又、我々が問題にしようとしているマルクス主義戦術論の出発点でもあるのだ。

第一章 プロレタリアート(一党)の階級斗争の戦術の基礎―戦術とは何か

1. 戦術の一般的性格

戦術とは、或る組織によって設定される目的への意識性にもとづいた主体的人間の活動の事であり、それは又、或る組織の設定する

がブルジョア思想、歴史観、世界観の本質に他ならない。

かくて、ブルジョア社会では過去を支配し、ブルジョアジーの「戦術」は、首尾一貫した、合目的的活動のそれではなかった事が明白になった。

我々は、ここではプロレタリアートの歴史観―世界観の根本問題について、これ以上論究しない。

プロレタリアートこそが、自己の特殊利害を追求することにより、人間の相互関係の対象性形態の直接的、イデオロギー的諸規定たるブルジョア思想の虚偽性を突き崩す事が出来る。

プロレタリアートこそが、「現存する階級斗争の、つまりわれわれの目前で現におこなわれている歴史的運動の、事実上の諸関係」(『共産党宣言』)の中に、「究極目的」の実現へ指向する潜在的語力を、「究極目的」の可能的存在を認識し、且つ、歴史的に実践する運命を与えられているのだ。(注2)

注1. 理論、組織、実践について

理論を実践へと媒介するものは、組織であり、三つの契機は、相互に不可分のものであって、一つの契機を抽象的に取り出して論じる事は誤まっている。

プロレタリアートの階級斗争に於ても、共産主義的理論、共産主義的組織、共産主義的実践の三つ契機の間み合いによって始めて共産主義運動の全体性は構成されるものである。

レーニンは、十九世紀後半の全国単一の革命家の組織の建設を強調する時に於ても、常に「綱領、組織、戦術」全体にわたって組織問題をあつかっていた事に注目しなければならない。

(例えば「われわれの運動の緊要な任務」等)

こうした事さえ理解すれば、ソ連共産党のスターリン主義へ

墜落を、単純にレーニン、ボルシェヴィキ的な組織形態に求める西ヨーロッパ社民、反スタ構改派、又、我が解放派を先頭にした革命的左翼団部の経済主義者の見解は、全く馬鹿げている事が明白だろう。

注2. マルクスとエンゲルスは、この問題について非常に理解し易い表現で、次の様に述べている。

「……共産主義者は、実践的には、すべての国々の労働者政、党のうち、もっとも確固たる、たえず推進してゆく部分であり、理論的には、プロレタリア運動の条件、進路、一般の結果を理解する点で、プロレタリアートの他の大衆にまさっている。」
（『共産党宣言』―俟点論者）

2. プロレタリアートの階級斗争の戦術の一般的性格

従って、真にマルクス主義的に打ち出された戦術は、「現在の状態」の変革としての「当面の目的」と「究極目的」の間に存在する断絶、俗流マルクス主義者が必らず実践上陥るあの二律背反への転落から自由である。

たとえば、日和見主義の潮流である改良主義は、たとえ、口先ではマルクス主義を承認しても、実践上では、現存する社会的現実に対して、「現実主義」的態度をとることにより、「当面の目的」一時的に獲得される利益のために、「プロレタリアートの根本的利益」を洗い流し、「究極目的」を「現在の状態」の彼岸へと押しやり（注1）、また、一方、空想社会主義者は、社会主義を、「現在の状態」に対して超越論的に夢想し、実践上では、マルクス主義的戦術論とは無縁に、自己満足的な主観的行動―戦術で終始してしま

うものである。

マルクス・エンゲルスは言う。

「共産主義者の理論的命題は、あれこれのなんでも改良屋の発明または発見した理念だの原理だのにもとづくものではけつしてない」
（『共産党宣言』）

「共産主義とは、われわれにとって成就されるべきなんらかの状態、現実かそれへ向けて形成されるべきなんらかの理想ではない。われわれは、現状を止揚する現実の運動を共産主義と名付けている。」
（『ドイッツ・イデオロギー』）

従って、プロレタリアートの階級斗争の戦術の一般的性格に関して、次の様に規定できる。

プロレタリアート（一党）の戦術は現存する資本主義社会・「現在の状態」と、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるような一つの協同社会」（『共産党宣言』）。「究極目的」とを、常に首尾一貫して、媒介する実践的環であり、それは又、単なる抽象的目的設定とは異った合目的な意識性に基づく、マルクスとエンゲルスが述べた様に「もっとも確固たる、たえず推進してゆく」（『共産党宣言』）主体的人間の活動に他ならない。（注2）

ところで、この領域こそ、若きマルクスが機械的唯物論を批判し到達した思想的地平であり、又、旧コミンテルン系共産党の腐敗墮落に抗して誕生した革命的左翼の「創造的マルクス主義」「ラディカリズム」（根本性）の思想上、実践上の赤い精神でもあるのだ。

だから、「政治過程論」が「既成左翼」の「経済決定論」に対して、六〇年安保斗争の昂揚を「政治過程の独自の運動法則の追求」と「正しい戦術」の確定という問題意識から総括せんとしたのは、極めて正当なのだ。

そもそも、マルクスがフランス三部作で、見事に分析してみせたあの革命と反革命を両極軸とした、諸階級・諸階層の拮抗、政治過程の複雑なダイナミズムに関する政治理論は、日和見主義者の硬化した頭では毛頭理解できないものである。

従って、当然の事だが、彼等にあつては、六七年十／八羽田斗争の豊かな政治的衝動力や、六八年六／十五安田講堂占拠―機動隊導入を契機とする東大全共斗運動の発展や、数年間にもわたる全国津々浦々の学園、職場、街頭で巻き起った闘いが実に神秘的な事件として映らざるを得ないのである。

だが、我々は、この側面の指摘とともに、即座に、次の事を指摘しなければならない。

プロレタリアートの戦術とは、「究極目的」と「現在の状態」とを首尾一貫して媒介する実践的環であるという規定は未だ抽象的水準に留っており、又、「意識性」・「主体的人間の活動」の側面の強調だけでは、主意主義だという批判に論駁できない。

戦術―主体的人間の活動の内容の検討―「正しい戦術」とは何かという問題への回答が、我々の次の課題とならねばならない。

注1. ベルンシュタイン主義（改良主義・修正主義）に対する
レーニン

改良主義者は、「現在の状態」の中に単に「理的なもの」しか見る事が出来ないで、その頭の中では「究極目的」と「現在の状態」の間にひそむ探淵と両者の間の動揺に悩まされはしない。

例えばベルンシュタインは、次の様にマルクスに論難する。
「その著作が科学的研究であろうとしながら、しかもなお、その起草のはるか以前にできあがっていた命題を論証しようと

していることに、すなわち、その著作の基礎には一つの図式があり、そこでは発展の到達すべき結果がすでにはじめから固定されているということに、その二元論が存するのである。」
（『社会主義の諸前提』）（なんと宇野弘蔵の科学・イデオロギー論と酷似していることか）

レーニンは次の様に言う。
「修正主義の経済的および政治的および政治的傾向は当然に補足して考えなければならないのは、社会主義運動の究極目標に対する修正主義の態度であった。『終極目標は無であり、運動がすべてである』……このベルンシュタインの標語は、多くの長たらしい議論よりもずっとよく修正主義の本質をあらわしている。」

その場合でも、自分の行動を決定し、日々の諸事件や政治上の些事に順応し、プロレタリアートの根本的利益と、全資本主義体制、全資本主義的進化的基本特徴を忘れ、目前の現実の利益を犠牲にすること―これが修正主義の政策である。」
（『マルクス主義と修正主義』全集第十五巻）

又、ローザの『社会改良か革命か』（ローザ選集第一巻）も、教訓的である。ローザのベルンシュタイン主義批判の不充分な点、レーニン主義との相異については、第一章、三参照。

注2. レーニンは、カール・マルクスの思想の中から、戦術論の基礎として次の様に整理している。

「マルクスはすでに一八四四―一八四五年に古い唯物論の根本的な欠陥の一つが革命的実践活動の諸条件を理解できず、またそのような活動の意義を評価できなかった点にあることを明らかにしたが、その全生涯を通じて、理論的労作とならんで、

プロレタリアートの階級斗争の戦術の諸問題にためみない注意をはらった。この点については、マルクスのすべての著作が大なる材料を提供している……われわれはここでは……マルクスが、この側面の欠けた唯物論は中途半端で一面的で、死んだものだと正当にも考えていたことを強調しておく。マルクスは、プロレタリアートの戦術の基本的任務を、彼の唯物弁証法的世界観のすべての前提に厳密に一致して規定していた。……」

（『カール・マルクス』全集二一巻）

3. プロレタリアートの階級斗争の戦術全体に占める「革命的戦術」（レーニン）の位置について

まさに革命家としてのマルクスが「勿論、レーニンに於てもそうなのだが」ブルードン主義との論争―党派斗争の過程で、「プロレタリア独裁」―「旧支配階級―反革命の反抗を粉砕するべく、革命が自ら武装して行なう恐怖政治」（佐野茂樹「蜂起に関する覚え書」）の承認にマルクス主義の非常に重要な核心点を置いた事は有名である。

マルクスによる、原始的な社会主義の諸形態に対する革命論上の注目すべき問題提起は、近代プロレタリアートが社会革命の担い手として運命づけられている事を単に指摘した点にあるのではなく―俗流マルクス主義者は例えば、反代々木、反スタを、唯一、無政府主義、経済主義への純化に於いてその党派性をもつ革労協（社会党・社青同解放派）の諸君は、マルクスの思想をこの程度にしか理解していないが―プロレタリアートによる真の社会革命の諸々の要求は、プロレタリア独裁へと開示する、その政治革命の革命的進行によってのみ、始めて実現されたものであると指摘した点にある。

その規則は、そういうばあいに考慮すべき当事者と状況の性質から論理的に出てくるものであって、さわめて平明、単純なものなので、一八四八年の短い経験によってさえ、ドイツ人はかなりこの規則をのみこんでいたのである。

第一に、最後まですすむ決意がないなら文字どおりには、諸君の勝負から起こる結果を敢然として迎える十分な覚悟がないなら、決して蜂起をもてあそんでおかない。蜂起は、さわめて不定な量もちいておこなう計算のようであって、その量の数値は日々に変動するかもしれない。諸君の相手の運勢は、組織の点でも、規律の点でも、伝統的権威の点でも、すべて有利である……

さわめて優勢な兵力をもってこれに對抗しないかぎり、諸君は敗北し、破滅する。

第二には、いったん蜂起の道にすすんだなら、最大の決意をもって行動し、攻勢をとれ。

守勢はあらゆる武装蜂起の死である。そのばあいには、敵と戦いをまじえないうちに、すでに蜂起は敗北したも同じである。敵の単勢が分散しているあいだに、その不意をうて。

どんなに小さい勝利でも、日々新しい勝利をあげるように心がけよ。蜂起の最初の勝利によって得た精神的優越を維持せよ。こうして、つねにもっとも打撃力の強いものに従い、つねに安全な側をさがしよとめる動揺分子を、味方に引き入れよ。敵が諸君にたいして兵士を集結できないうちに、これに却却をよぎなくさせよ。歴史上に知られた最大の革命的政略の大家であるダントンの言葉を借りれば、大胆なれ、大胆なれ、かさねて大胆なれ」（エンゲルス

『ドイツにおける革命と反革命』全集第八巻）

ところで、レーニンこそ、こうしたプロレタリアートによる権力

市民社会の総括態としての国家は、プロレタリアート、全人民の社会革命の諸々の要求の成熟、物質―精神交通の場たる市民社会が、公然たる「内乱の体系」へと顕現する時、市民社会に対して最も外的となり、その暴力的本性を露わにする。

市民社会の深部から、又、全ゆる領域から熟成してくる。過去の人民の虐げられた歴史が刻みこまれた社会革命の無数の要求の結晶たるプロレタリア人民の国家への意志―「組織された暴力」が、既存国家の暴力性に勝るその瞬間、世界史の中でも度々おとずれはしないだろうが、又、必ずくるその瞬間のみ、プロレタリア人民の武装蜂起―政治革命は、勝利するのである。

階級社会の死滅へ向け力強い第一歩たる、このプロレタリアートの歴史的行為―武装蜂起・労働者権力の樹立の人類史上に於ける意義を正しく評価する事によって始めてプロレタリアートの階級斗争の戦術論はその真の生命をふきこまれる。

資本主義社会でプロレタリア革命を準備し、組織している革命党にとつて「究極目的」の実現へ到る一連の戦術の大系の中で、武装蜂起―労働者権力の樹立という戦術を、単なる一つの戦術として理解してはならない。軍事論的に表現するならば革命党の組織するプロレタリア人民の武装蜂起は、単なる一つの戦術、戦役でありながら、且つ、革命戦争の全局の運命を決する一つの戦術、戦役なのである。

エンゲルスは、蜂起に対する共産主義者の心構えについて次の様に指摘した。

「ところで、蜂起は、戦争や、その他の技術とまったく同様に、一つの技術であって、若干の規則に従うものである。その規則を無視すれば、無視した側は破滅をまねくであろう。

奪取―武装蜂起・労働者権力の樹立という戦術を、単なる戦術と区別して「革命的戦術」（注上）と呼び、それをプロレタリアートの階級斗争の全過程、全戦術の中に、正しく位置づけたのであった。

第2インター諸党、特にドイツ社会民主党とレーニンボルシェヴィキ党との相異を何処に発見する事が出来るだろうか。

綱領問題では、ベルシュタイン・カウツキー共同執筆であった「エルフト綱領」に見られるように、前者はドイツの権力分析を与える事なく、マルクスの一般理論を示し、権力奪取の問題―「革命的戦術」の問題は「なにも語りえない」として回避し、結局、改良的諸要求の指摘にとどまっているのに対して、後者は、「プロレタリアートの普遍的利益」を抽象的理念にとどめないで、常にプロレタリアートによる権力奪取―「革命的戦術」の実現として把え、ロシア社会の権力分析をもっとも重視している点である。

従つて戦術問題では、前者が最大限綱領と最小限綱領の分裂―改良斗争にとつて、革命斗争が彼岸化されるのに対して、後者は、改良斗争、民主主義斗争等の個々の闘いが、「革命的戦術」の実現に到る戦術の体系として位置づけられているのである。

最後に、このような、綱領、戦術問題の相異、よつて、組織問題に關しては、両者は何如なる相異をきたすのだろうか。

第2インター諸党にみられる最大限綱領と最小限綱領の分裂、戦術に於ける革命と改良の分裂は、社会主義・共産主義社会の建設を抽象化せず、マルクス主義を去勢化し、党员―字者、党活動―啓蒙運動、労働組合運動―日常的、経済的要求運動を招き寄せ、革命党を、小市民風の、合法主義、日和見主義政党へと墮落させた。これに對してレーニンボルシェヴィキ党の組織原則は、一切「蜂起を組織する為の」という点から帰結されているの言うまでもない。

我々は、これ以上、レーニンの革命理論について触れないが、少くとも次の事を確認しておく必要がある。

「革命的戦術」の決定的意義が内包されていないプロレタリアートの階級斗争の戦術論換言すると、国家論に媒介されていないプロレタリア革命過程論は、実践に転化された場合、不可避に、次の二つの傾向を、改良主義―合法主義・日和見主義政党への傾向、或いは、サンシカリズム、経済主義―無政府主義、党自然成長論への傾向を招来させる。

そして、かかる後者の傾向こそ、第二インター諸党、ドイツ社会民主党に対して「左翼的」な批判を展開しながらも、ローザンズバルタクス・ブントやルカーチの思想が転落していった轍であった。

(注2)

我々は、プロレタリアートの戦術論の領域をマルクスとエンゲルスが述べた「共産主義者の当面の目的は……プロレタリアートの階級への形成、ブルジョアジーの支配の転覆、プロレタリアートによる政治権力の獲得である。」というこの領域へ最も主体的に引き寄せて把え返さねばならない。

この事によって、始めて我々は、レーニンの『なにをなすべし』で主張されているボルシェヴィキ的組織原則が単にロシア的特殊性からのみ帰結されるのではなく、レーニンが「カール・マルクス」で要約してみせた、あの彼の戦術論を構成する一契機たる事が理解できるし、又、我々の戦術上、実践上極めて有益な多くの結論を獲得する事が出来るのである。(注3)

注1. レーニンの「革命的戦術」論

レーニンは『共産主義の「左翼小児病」』で「革命的戦術」という言葉を使用している。この部分である。

「究極目的」と「現在の状態」との間の二律背反を批判する事であり、一言で言えば、歴史過程総体に占める人間の革命的实践の諸問題―戦術の諸問題に他ならない。

我々は、ここでは、ルカーチの戦術論に於けるローザン主義とレーニン主義の折衷的性格についてだけ触れる。

ルカーチは、理論と実践の媒介環として組織問題を扱うという注目すべき問題意識を持ち、ローザのドイツ社会民主党内の組織問題への日和見主義に対して、レーニンの組織問題に対する敵しい態度の方に味方している。曰く、「ロシア社会民主党の分裂をもたらしたものは、一方では、来るべき革命の性格のとらえ方の問題であり、したがってまたそれから生ずる任務の問題（「進歩的」なブルジョアジーと手を結ぶか、それとも農民革命に加担して闘うかという問題）であったし、他方では組織問題だったのであるが、このことは決して偶然ではない。しかし、この二つの問題が、元来、ひとつのものであり、相互に分離しがたく、弁証法的に全体を構成しているものである事を、当時（ローザ・ルクセンブルグをも含めて）だれも理解していなかったのである。」（『歴史と階級意識―第八章組織問題の方法論』）と。だが、ルカーチの躰きのもとには、彼の思想の最も秀れた点と一体になっているのだが、彼の「過程」という言葉の中に象徴されている。

即ち、ルカーチは、プロレタリアートの戦術論領域を、単に「現在の状態」から「究極目的」の実現する「過程」と規定するに停っており、この点に関する限り、ローザの戦術論―革命観と同一なのである。

「大衆の間に革命的な気分がなく、このような気分の高まりを助言する諸条件がなければ、勿論革命的戦術を行動に移すことは出来ないが、われわれは、ロシアで余りにも長い苦しい血みどろの経験によって革命的気分丈にもとずいて革命的戦術をうち立てることは出来ない。」

レーニンによる蜂起の勝利への政治・軍事的諸条件の考察は以下参照。

『モスクワ蜂起の教訓』

『マルクス主義と蜂起』等の十七年秋、蜂起の必要を論証せんとした一連の論文、手紙。

『共産主義の「左翼小児病」』等。

注2. ルカーチ戦術論批判―ローザン主義とレーニン主義の折衷理論。

ロシア革命の勝利、世界革命の嵐、ハンガリー革命、ドイツ革命とそのみじめな挫折の真只中で公にされた『戦術と倫理』（一九一九）や、亡命、逮捕―精神病院への収容期間中執筆された『知識人の組織問題によせて』『日和見主義と一発主義』（以上いづれも一九二〇年春から夏。尚、以上の論文は池田浩士氏訳で『共和国』合同出版、1号、2号で出版されている。）『歴史と階級意識』『レーニン論』に続く一連の政治論文で伺えるルカーチのすさまじい執念は、理論戦線に於ては、第二インターの主流となった、新カント派―マッハ主義に毒された俗流マルクス主義―修正主義の、理論と実践、意識と存在、科学とイデオロギー等の諸問題に於ける二元論に対して、マルクス主義の精神としての「革命的弁証法」を復権させ、これを武器にして、日和見主義者（或る場合は、日和見主義と共通の根を

ルカーチは、プロレタリアートの社会革命の要求が政治革命を媒介してのみ、始めてそれが真の意味で実現されるという事、ブルジョア独裁社会下での革命党にとって、その戦術論に於て、「革命的戦術」が極めて重要な位置を占める事を、正当に把握していない様である。

例えば彼の次の表現に見られる。

「……過程そのものが、本生的に革命的なものである、というたえかたがなされるなら、武装蜂起は、この途上におけるある一定の状態においてはせひとも必要な一歩ではあっても、本質的には、ほかの歩みと原理的に区別できるような一歩では決してないのだ、ということが明らかとなり……」（『日和見主義と一発主義』）

ボルシェヴィキ的組織原則が、レーニンの戦術論、即ち、「革命的戦術」が、主体的に引き寄せられ、把え返された戦術論の重要な一契機たる事を、ルカーチは真に理解していない。

(注1. 参照)

ここに、ルカーチ戦術論のローザン主義とレーニン主義の折衷的性格を窺う事が出来る。

「ハンガリー革命の経験は、すべてサンシカリズムの理論の脆さ（革命における党の役割）をきわめて明瞭に教えてくれたが、それでもなお極左的王親主義はその後長くわたしのなかに生きつづけていた。……わたしの著書『歴史と階級意識』は、この過渡期をきわめて明瞭に示している……」という老ルカーチの痛苦にみちた言葉は、思想的生命力を喪失した老人の述懐として片付けられるものではないだろう。

注3. レーニンの戦術論とボルシェヴィキ的組織原則の関係

レーニン『なにをなすべし』の評価

レーニンが『なにをなすべし』で主張した有名なボルシェヴィキの組織原則は、確かに、十九世紀後半以来のロシア革命運動の血の経験的総括であった。

我々も、ヘーゲルの「現実なものは理性的であり、又、理性的なものは現実的である」という言葉を持ち出して来る迄もなく、過去の実践上の経験を常に教訓化する努力を怠ってはならない。

だが、日和見主義者達（レーニンの時代では、西ヨーロッパの多くのマルクス主義者達）は、単に当時のロシアの特性の指摘でもって、ボルシェヴィキの組織原則を、常に「東欧的、ロシア的野蛮さ」の中に押し留めてきた。

今日の日本では、日本「共産党」の「大衆的前衛党論」や「四／二九論文」の中に、日和見主義者特有のこの言い回しを発見する。

我々は、ボルシェヴィキの組織原則の中から、レーニンが自覚していたマルクス主義戦術論に内包された普遍的な組織論・組織原則を抽出しなければならない。（勿論、現実的な党の組織原則は、各国の革命の性格の特殊性に依存している。だが、我々は、資本主義の生産様式が支配的におこなわれている社会、市民社会を国家が総括しているところの資本主義社会の下でのマルクス主義戦術論を抽出せんとしているのである。）

レーニンの戦術論は一方で「現在の状態」から戦術論が設定されると同時に、その過程で既にみたように「プロレタリアートの根本的利益」特に「革命的戦術」の実現の側面が常に媒介されている点にある。

【え書】

党の「全国性」や、「職業的組織ではなく、地区的な組織」等の諸問題も同様にして接近する事が出来るだろう。

以上で、プロレタリアートの戦術論領域を、「共産主義者の当面の目的」の領域に引きよせ、戦術論を把え返すことによって、我々の戦術上、実践上の多くの重要な結論を獲得出来る事的一端が伺えたであろう。

第二章 プロレタリアートの（一党）の階級斗争の戦術の土台——「正しい情勢分析」とは何か。

I プロレタリアートの階級斗争の「客観性」

或る情勢の下で、特定の戦術が「正しい戦術」なのか、否かとして検討される時、即ち戦術に対する客観的価値判断の基準が検討される時、それは、プロレタリアートの解放の歴史・プロレタリア革命過程の総体性と、その総体性を構成する一契機としての、主体的人間の活動・戦術との連関そのものが、問題にされているのだ。

だから、「正しい戦術」の検討、かかる「連関そのもの」を問題する以前に、プロレタリア革命過程の総体性の性格について、その（主観から独立した）「客観性」について考察する必要がある。

ここで始めて、共産主義的戦術の貧困は、プロレタリアートの解放の歴史、人間の歴史に対する「哲学の貧困」でもある事が明白になるだろう。

この事によって、我々は、プロレタリアートの根本論の一契機たる組織論・組織原則を演繹する事が可能となる。

プロレタリアートの党は当然要求される「非合法性」・「陰謀性」を演繹して見よう。

ブルジョア独裁下の社会で、「当面の目的」として「プロ独」の為に、「革命的戦術」・武装蜂起・労働者権力樹立を闘い取らんとする党は、既存ブルジョア法体系に対して、最も「ラディカル」に対立するが故に、本質的に党は「非合法」である。

我々は、ここでは、「革命的戦術」に到る戦術の体系、平時の党の活動、闘いが、「合法」か「非合法」なのかという事を問題にしているのではない。従って、当然だが、共産主義者は決して「テロリズム」・殺人・徵発・強盗活動一般を否定しない。唯一、その活動に対して下される共産主義の価値判断の基準はその活動・戦術が、権力奪取へ致る戦術体系の中で、「正しい戦術」として機能しているのか、否かという点だけである。

党の「陰謀性」についても、「革命的戦術」から演繹可能である。

「陰謀性」とは、蜂起や武装が直接の対象とし、それとの対抗に現制されるところの敵の武力の優位、専門的習熟のゆえに必要となる。明らかに、開放性は、これこそが敵のこの力を解体し、うちまかすものとして爆発するのであるが、第一には、開放性を全面的に成熟せしめる敵との斗争の系統的展開のために、第二に、爆発的な開放性を最も有効に集中、凝縮しうよう統御、キャナライズするための、全般的な計画的「陰謀性」がなくてはならないのである。」（佐野茂樹『蜂起に關する覚

さて、労働諸生産物が商品形態をとり、それが社会の普遍的形態となり、全ての人間の生活現象を包摂する資本主義社会では、人間の相互関係（人間の自己への関係・人間の自然への関係）も、商品の対象性形態として、物と物の関係として、物象化され見かけの上では完結した「客観的」な法則として、顕現する。

資本主義社会以前の「従来の社会諸形態においては、この経済的神秘化は、主として、ただ貨幣と利子生み資本についてのみ生ずるのである。このような神秘化は事態の本性からいって次のような場合には起こらない。第一に、使用価値のための、すなわち直接の自己需要のための生産が優勢な場合、第二に、古代や中世におけるように、奴隷制または農奴制が社会的生産の広大な基礎となっている場合である。この後者の場合には、生産者に対する生産諸条件の支配は、支配諸関係と隷属諸関係によって蔽い隠されているのであり、支配諸関係と隷属諸関係が生産過程の直接のパネとしてあらわれ、目にみえるものになっているのである。」（マルクス『資本論』第一部第一篇第二章第四節）

ところで、ブルジョア思想は、こうした資本主義社会の物象化された諸現象の「幻影の形態」（マルクス）の直接的、イデオロギー的諸規定に他ならない。

だから、ブルジョア思想の「虚偽性」本質的欠陥は、一般に、次の点に認められる。

即ち、その思想は、内容的には、資本主義社会の諸現象の物象性形態を、直接的に反映する事により、「客観的」な諸現象を、永遠の自然形態として取り違えており、この事を根拠にして、形式的には、諸現象のカテゴリーの連関性の欠落した繁雑な形而上学、「客観的」

法則の羅列、単なる媒介なき分析に終始しているものである。(注1.)

「こうして以前には歴史が存在した。しかし、もはや歴史は存在しない。」(マルクス『哲学の貧困』)マルクスの国民経済学批判—資本主義批判の方法は、幻影的な物的形態・商品形態から始めて、現実の人間相互の具体的関係の「客観性」へと帰着させる事であり、且つ、商品形態の対象性形態としてのその物本性を、人間相互の根源的關係から、導き出す事であった。

我々は、この方法に基づくマルクスの思想的営為の内容、国民経済学批判—資本主義批判の内容については触れない。

ただ、こうした方法的立場によって、資本主義社会の諸現象の分析によって獲得される諸カテゴリーの「内的紐帯を嗅ぎ出」(マルクス)す事が可能となり、又、資本主義社会の諸現象に対応するカテゴリーの内的連関の体系が、相即して、歴史の規定性を与えられ、従って、その社会の全ての現象が生成・発展・没落の様相に於て、即ち、歴史過程の中で認識されるという事を指摘しておく。

「市民社会は、最も発達した最も多様化した歴史的生産組織である。したがって、その諸関係を表現する諸範疇、その構成の理解は、同時に一切の没落した社会形態の構成と生産諸関係への洞察を与える。この市民社会は、没落した社会の破片や要素をもってつくり上げられたものであり、それらのものうち或るものは、まだ克服されない残滓としてこの社会の中に生き残っており、僅かな暗示だけだったものが、完成された意義のものにまで発展している、等々。人間の解剖は、猿の解剖の鍵である。」(マルクス『A経済学』批判序説)マルクスも述べているように、資本主義社会に於る人間の「物質的生活諸関係」の対象化、国民経済学批判を基礎にして

始めて、人間の社会的生活の全歴史に対する認識が与えられ、唯物史観の論理は完成されたと言う事ができる。

このようにして、人間の社会的生活の発展—歴史過程総体は、「意識された企図、意欲された目標」(エンゲルス『フォイエールバツハ論』)、即ち、人間の主観的意欲や、経験的意識から、「独立」した「客観性」としてマルクスが「経済学批判」で、土台・上部構造論として定式化したように、存在するとともに、真に現実的な人間相互の關係の歴史、究極的には、階級斗争の歴史となる。

従って、この限りで当然の事なのだが、一八四八—四九年の西ヨーロッパの革命期が終った時、マルクスが、共産主義者同盟の分派斗争—ウィリッヒ・シャッパードとの闘いの過程で主張した内容に見出来るように、(注2)プロレタリア革命は、決して少数の人間の単なる「意志」「恣意」で産出されるものではなく、「唯、人民のみが歴史を創る原動力」であり、プロレタリアートは、鉄火の革命斗争の坩堝の中で、打ち鍛えられ、旧社会の汚物を一掃する事によって、自己を支配階級へと昂める事が出来るのだ。

だが、又一方、プロレタリアートの解放の歴史にとって、共産主義者や自覚したプロレタリアートの死をも恐れぬ闘い、全生活、全生涯をかけたねばり強い精力的活動、一言で言えば、共産主義的戦術を必要としなところか、必らずそれを不可欠の条件として要求するものなのである。

共産主義者の任務「正しい戦術」が決定される為には、プロレタリア革命過程の総体性の性格、その「客観的」総体性に対する反省認識が、常にその前提となる事は、既に理解出来たであろう。

このような認識こそが、「正しい戦術」の土台としての「正しい情勢分析」なのである。

注1. マルクスは、古典経済学(とりわけリカード)の欠陥を次の様に指摘している。

「古典経済学は、諸種の固定した互に無関係な富の諸形態を、分析によってその内的統一に還元し、そしてこれらの諸形態がそのなかで互に無関心に並存しているすがたをはきとるるところをみる。それは、種々雑多な現象形態とは異なる内的連関を把握しようとする。……古典経済学は、ときおりかかる分析にさいして矛盾をおかしている。すなわちかれらはしばし中間項なしに直接に還元に着手し、種々なる形態の諸源泉の同一性を立証しようとくわだてる。このことは、しかし、かれらの分析的方法——批判や理解はこれから始めなければならぬ。——から必然に生ずるものである。それは、種々の諸形態を発生的展開することではなくて、それらの諸形態を分析によってその統一性に還元すること興味をもつ、けだしそれはこれらの形態を与えられた前提として出発するからである。けれども分析は発生的叙述の、現実の形成過程のさまざまな諸段階の理解の必然的前提である。最後に、古典経済学は、資本の根本形態すなわち他人の労働の領有に向けられた生産を、歴史的形態としてではなく社会的生産の自然形態として説明する点において誤っており、欠陥をもっていている。けれどもそれはかれらの分析そのものによってかかる見解を除去する道をひらくにいたるのである。」

(マルクス『剰余価値学説史』)

注2. マルクスは、ケルン共産党裁判で、ウィリッヒ・シャッパードを次の様に批判しています。「少数派は、批判的見地の代わりに独断的な見地をもちだ

し、唯物論的な見地の代わりに、観念的な見地をもちだしている。少数派にとつては、革命の推進力となっているのは、現実の諸関係ではなくて、たんなる意志である。われわれは労働者にこう言う、「諸君は諸関係を変えるためだけではなく、諸君自身を變革し、政治的支配の能力をもつようになるために、なお十五年、二〇年、五〇年間というもの、内乱と民族の斗争をおらねばならない」と。ところが諸君はこういう、「われわれはただちに政権をにぎらなければならぬ。それができなければ寝てしまってもかまわない」と。……民王々義者は、人民ということばをまつりあげているが、諸君は、プロレタリアートということばをまつりあげている。民王々義者と同じく、諸君は革命的発展を「革命」という空文句にすりかえている。……」

(カール・マルクス『ケルン共産党裁判の真相』M・E全集8巻)

II 情勢分析について

情勢分析とは、主体をも包めて対象化された客体世界への反省、認識の事であり、従って、共産主義者が、或る情勢下で、自己の任務「正しい戦術」を決定する際には、常に、情勢そのものの把握、「正しい情勢分析」がその土台となる。

マルクスによる国民経済学批判—資本主義批判の方法の基礎は、資本主義社会の物象化された諸現象、「商品形態の対象性形態」の中に、根源的な人間相互の關係を見て取る事であった。そして、人間相互の關係とは、究極的には、階級關係の事に、

「斗争」という言葉を最も広義に使用すれば、階級斗争の事に他ならない。

「経済学が取り扱うのは、物ではなくて人間と人間とのあいだの関係であり、究極的には、階級と階級とのあいだの関係である。しかし、これらの関係は、つねに物に結びつけており、物として現われるのである。」（マルクス『経済学批判』に対するエンゲルスの書評「全集第十三巻」）

従って、「正しい情勢分析」は、「現在の状態」にある時は、流血を供い、又ある時は「平和的」性格を呈す階級斗争—階級関係の複雑な諸様相の中に、「究極目的」たる無階級社会の実現へ向うプロレタリア革命の潜在的諸力を発見する事であると言う事が出来ま

す。偉大な共産主義者、革命家は、それは理論的形式をとらず直感という形式をとる事もあったが、情勢そのものが孕む「潜在的諸力」を発見する能力に於て、現存する階級斗争—階級関係の分析能力に於て、誰よりも優位性を持っていた。

例えば、レーニンに於てはどうだろうか。

レーニンの初期の著作の一つたる「ロシアにおける資本主義の発達」（全集第3巻）では、彼が、ロシア第一回国勢調査の職業構成表を基礎にして、階級構成表を作成しているのを発見する事が出来るが、こうした当時のレーニンの膨大な量の農業問題やロシア農村の研究、ロシア農民運動と労働運動の総括——一言で言えば、——ロシア社会の政治・経済構造の特殊性の認識こそが、マルクス主義とロシア革命運動の具体的実践の結合の基礎であり、革命家レーニンの革命的現実主義の背景になっているのである。

又、レーニンは理論的にも（例えば「マルクス主義と蜂起」や

「カール・マルクス」でマルクス主義と社会主義運動の原始的諸形態の一つたるブランキ主義の実践上・戦術上の相異を論じるに当たって、その相異は、（唯物史観に基づいて）「階級の相互関係の総体を客観的に考慮する事」——「正しい情勢分析」を土台にして、共産主義的活動を、戦術を決定するのか、否かの態度にあると、はっきりと指摘している。

合法マルクス主義の「風土」と、自然生長的インテリ運動を基礎にして、日本の革命的左翼の多くの部分が、今なお、王親主義的「情勢分析」と王親主義的「戦術論」に終始している中で、我々は、こうした「戦術的唯物論」の態度に注目すべきである。

又、「調査なくして発言権なし」とまで言った毛沢東の革命思想を、日本の共産主義者は「狭い経験主義だ。プラグマチズムに貫かれている。」と言って排撃するよりも、字ぶべきものの方がはるかに大きいと考えるべきではないだろうか。

「これまでこのべた意見にもとづいて、わたくしはつぎのことを提案する。

（一）周囲の環境を系統的に綿密に研究するという任務を全党に提起する。マルクスレーニン主義の理論と方法にしたがって、敵と友と我（三つの契機に分析している事に注目せよ）論者）との三つの側の、経済、財政、政治、軍事、文化、党務の諸方面にわたる動きについて、くわしく調査と研究の仕事をすすめ、そのうえで、当然の、また必要な結論をひきださなければならない。この目的のためには、同志たちの注意を、そうした実際のところからの調査と研究にむけさせなければならない。共産党の指導機関の基本的任務は、情勢の理解と政策の把握（「正しい情勢分析」と「正しい戦術」の決定）——論者）という二つのたいせつなことから——前者は、世界

を改造することである にあることを同志たちに、理解させねばならない。調査なしに発言権はないということ、得意になって、デタラメなおしゃべりをしたり、一、二、三、四というように現象をならべたてることが、みな、なんの役にもたないということを、同志たちに理解させなければならない。たとえば、宣伝活動についてみても、敵と友と味方との三つの側の宣伝情勢を理解していないならば、われわれは、われわれの宣伝政策を、正しく決定することはできない。どの部門のしごとにしても、まず、はじめに情勢を理解しなければならず、そうしてはじめて、することがうまく処理できる。全党的に調査・研究計画をたてるのが、党の活動態度をかえる基本的な環である。」（毛沢東「われわれの学習を改革せよ」）

Ⅲ 「正しい情勢分析」について

ここでは「正しい情勢分析」—プロレタリア革命過程の総体性を構成する諸契機の分析の為に是非とも注意すべき諸点について論及する。

レーニンは「正しい情勢分析」に関して、次の点に注意を促している。

「マルクスは、プロレタリアートの戦術の基本的任務を、彼の唯物証法的世界観のすべての前提に厳密に一致して規定していた。

ある社会の、あまさずすべての階級の相互関係の総体を客観的な発展段階をも、この社会と他の諸社会との相互関係をも考慮すること、したがって、この社会と他の諸社会との相互関係をも考慮することだけが、先進的な階級の正しい戦術の土台となりうる。このばあい、すべての階級とすべてが、静態においてではなく動態にお

いて、すなわち、静止の状態においてではなく運動（この運動の諸法則はそれぞれの階級の経済的な生存条件から生まれる）において、考察される。マルクスはエンゲルスへの手紙にこう書いている、「大きな歴史的發展においては二十年は一日にも等しい。」「もつとも、そのあとで、二十年を一つに圧縮した数日がかかることもあるが」（「往復書簡集」第3巻一二七ページ）（レーニン「カール・マルクス」全集第二一巻）

「正しい情勢分析」—プロレタリア革命過程の総体性を構成する諸契機の分析に、顧慮すべき重要な点。

① 「正しい情勢分析」は、レーニンが述べているように「唯物証法的世界観に厳密に一致して規定」されるプロレタリア革命過程の認識であり、当然、その過程に於る主体的人間の活動を包めて対象化された客観的な其れとして考察される。

② マルクス主義の実践的立場の考え方は、まず第一に、生き生きとした歴史的所与の現実——「現在の状態」を、現実性として、承認する場から出発する。だから「正しい情勢分析」は第一義的に「現在の状態」への反省であり、「ある社会の、あまさずすべての階級の相互関係の総体を客観的に考慮すること」である。

但し、ブルジョア社会は、常に「国家」・「民族」として総括されるとともに、世界性として登場するものであるから、プロレタリア革命の世界性の考慮として情勢分析が問題にされる場合には、レーニンが続けて論述している様に、「この社会と他の諸社会との相互関係をも考慮」されなければならない。

③ 「あまさずすべての階級の相互関係の総体を客観的に考慮」する際、階級の相互関係は、常に、政治—軍事的側面から考慮される必要がある。

政治とは何か。

それは階級支配の下で、階級間の相互関係の中で形成される幻想的な共同意志それ自身である。

では、軍事とは何か。

それは、最も、広義に定義すれば、階級間の幻想的な共同意志の崩壊に基づく、(質としての)政治の(弁証法的な意味で)否定された形態、換言すれば、「量化された政治」の事である。

従って、軍事(一戦争)が「量化された政治」であるという意味に於ては、「蜂起(一軍事、戦争)は技術」であり、一定の法則性を持つており、丁度、算術のように学習する事が出来る。

だが、マルクス主義軍事論の、ブルジョア軍事論に対する優位性は、(又、認識上の困難性は)後者が、政治なき軍事を論じ、形式主義の枠内にあるのに対して、軍事に現象される複雑で、刻々変化する階級関係一階級斗争即ち政治的諸関係を把握せんとする事にあるのだ。

一般に俗流マルクス主義者、例えば、議会主義者や、唯武器主義者は、階級間の相互関係を、マルクス主義的内容を付与された政治一軍事の関係一弁証法的関係として理解しないで、階級相互の関係を、俗物らしく見える表現だけで、或る場合は、議会内の得票数、或る場合は、獲得した武器の数だけで、判断するという限りで、共通した根を持つているものである。

④ ところで、確かに、マルクス主義の實踐的立場の構え方は、歴史の所与の現実一「現在の状態」を現実性として承認する事から出発するのだが、又、それだけにとどまらない。

資本主義社会の物象化された諸現象の連関を、物と物との永遠の「自然的」連関として理解するブルジョア思想に対して、マルク

第三章 プロレタリアート(一党)の

階級斗争の戦術一「正しい戦術」とは何か。

I プロレタリアートの階級斗争の戦術に対する価値判断の「客観性」

主体的人間の活動によって、媒介されたプロレタリア革命過程総体が「客観的」であるという事は、戦術に対する価値判断の「客観性」を、プロレタリア革命に於ける共産主義者の「正しい戦術」の存在を根拠づけている。

というのは、戦術に対する価値判断の問題とは、主体的人間の活動の革命過程総体に対する「媒介性」を検討する問題であり、(主観的意識、価値から相対的に目立した)「行為の客観的価値」を問題にする事なのである。

だから、共産主義者は、「なにをなすべきか」として、自己の實踐の内容を決定する際、経験的所与たる主観的意識、価値に幻惑されるものではない。

共産主義者は、ブルジョア社会での自己の苦悶を、決して、実存主義者の様に、超越的彼岸たる暗黒の「未来」への、不可知たる「歴史」への投企に解消してはならない。

我々が、このような事を問題にするのは、日本の革命的共産主義運動が、過去一貫して、初期マルクスの「疎外」の概念を自己の俗物的頭一小市民的個人主義に似せて理解し(例えば、革労協の「哲

ス主義は、資本主義社会の歴史上所与の現実を、現実性として承認するとともに、その現実を否定する内在的な発展の契機を、人間の歴史を階級斗争の歴史を発見しようとする。

だから、「正しい情勢分析」は、直接的には「現在の状態」の階級相互の關係総体への反省でありながら、又、其の階級相互の關係総体は、プロレタリア革命過程として、レーニンが指摘しているように「動態的」に考察されなければならない。

しかも、この非常に重要なのだが、その革命過程は単なる過程ではなく、「弁証法的」に理解されなければならない。

プロレタリアートは、近代資本主義世界の産物であり、資本主義社会の諸現象の物象化は、勿論、ブルジョアジーだけにとどまる事なく、プロレタリアートの生活現象にも、深く浸透している。このような条件下に於ける、プロレタリア革命の発展は緩慢で、階級斗争は、比較的「平和的」性格を呈する。

だが、一度、物質・精神交通の場としての市民社会が崩壊し、国家が市民社会を総括する能力を喪失する時、言い換えると、資本主義社会の諸現象の物象化が錯乱され、その物象化から、プロレタリアートの生活現象が少くとも、現象的には、「自由」になる時、革命の発展は、かつての頭では信じられない程、急速であり、又「血みどろ」の階級斗争として斗われる。

この時代に於ては、プロレタリアートの政治的成熟は過去の「二〇年」をたった「一日」で経験するのである。

学草稿』の低俗理解、吉本の『カール・マルクス論』等、代々木「共産党」との斗いを経済主義・サンジカリズム一無政府主義への墮落の道に於て満足している傾向、一言で言えば、共産主義者の「正しい戦術」一「系統的活動」を否定する傾向を孕んでおり、かかる傾向が六七年来の大衆的実践と武装斗争の中で打ち鍛えられた真の革命党建設の任務という、今日の最も重要な階級的課題に対して、極めて有害な作用を果しているからである。

「日本の反スタ運動(?)」の理論に大きな影響を与えた宇野弘藏は、次の様に、公然と「戦術の不可知論」を主張する。

「寧ろその国の資本主義の分析はそういう必然性の立証の基礎をなすに過ぎないのです。実際またその社会を変革しようという革命的勢力は、その時々々の情勢の変化によって変化するものであって、単なる科学的分析で立証されるものではありません。いわゆる戦略を基礎にした具体的な戦術の問題に移るわけで、僕などが理論的に規定したり論証したりし得るものではないものになってくる——そういうように考えます。」(『八資本論』と社会主義 P 五〇—五二) ここでは科学主義者、二元論者たる宇野は人間の「主体的行動」に媒介された「その時々々の情勢の変化」、変化する情勢の個別性の認識に対する諦観を吐露しているにすぎない。

多様な「具体的なもの」の個別性を、「具体的」に即ちその全体性に於て認識する事は決して安易な事ではない。

だが、対象認識の形式即ち内容たる弁証法に於て、対象規定の「困難性」とは、宇野はこの「困難性」を安易に「不可知論」にすりかえるのだが——諸規定が、不断に、其の規定性の根拠を否定していく過程概念の自己超出過程を辿る事の困難を意味しているにすぎないものである。

こうした字野の「王体的行動」と「歴史的必然」等の問題に対する小市民的「常識」的見解は、マルクス主義者の政治活動と結合するならば、十九世紀末から二〇世紀初頭、第二インターに流入した修正主義——「科学」の名による弁証法否定、「不可知論」の旗をかかげる新カント派のマルクス主義の去勢化の試みと同一の思考方法であると、我々は指摘せねばならない。

我々は、プロレタリア革命を勝利に導く一本の赤い糸としての「正しい戦術」の存在を確信し、複雑な情勢の中からそれを捜り出し、自己の実践をそれに厳密に一致させなければならない。

共産主義者の「系統的活動」の問題、戦術上の問題に関して、こうした厳格さがあるの少しでも曖昧にされるならば、共産主義者の実践が「不可知論」のあの奈落に転落し、更に、人間の経験的に与えられた主観的意識・価値——「情熱」や「自己犠牲精神」——の魔術にとりつかれ、結局その場、その場の運動の自然生長性を刻印してしまい、又、共産主義者の若干の実践上、戦術上の対立が一つの「正しい戦術」へと揚棄されるための共通の場を喪失してしまうのである。

Ⅱ 「正しい戦術」について

もはや、「正しい戦術」について多言を要さないだろう。

以下、諸点にわたって要約すると、

① 共産主義者は、その戦術を、歴史的所与の現実を基礎にして、あくまで「現存する階級斗争」を基礎にして、決定するものです。

だから、共産主義者は、或る情勢における戦術を、先験的に「発明」したり、又、戦術形態を永遠に固定化したりはせず、それどころか、

ろか、凡ゆる戦術形態の存在の可能性を「冷酷」に承認する。誤解を恐れず言えば、共産主義者は、自己の戦術形態の決定に関して、謙虚に「大衆の実践のなかで学ぶ」(レーニン「バルチザン戦術」)ものなのである。

今日、日本の革命的左翼の活動態度の中に濃厚に存在する理論の観念性・先験性が、明白に、日本革命運動の前進にとって桎梏化している中で、こうした事を、しっかりと確認する必要がある。

② 又、共産主義者は、プロレタリア革命過程の客観的総体性とその総体性を構成する主観的契機との弁証法的連関を正しく認識し実践しているものである。(注1)

だから、或る特定の戦術に価値判断を下す際、決して、人間の主観的「意志」や「情熱」への素朴なロマン主義に幻惑される事は無い。

唯一、「正しい戦術」の規準は、或る戦術が、「現在の状態」を变革し、プロレタリアートの「究極目的」の実現へ向けて、決定的に作用しているのか、否かというその一点にのみ依拠しているのである。

「社会民主主義派は、自分たちのもあわゆる勢力に相応しており、そのときの諸条件のもとで達成できる最大の成果を達成する可能性を与えるものでさえあれば、あらゆる斗争手段を認める。」(レーニン「我々の運動の重要な諸任務」)(傍点—論議)ものがあり、「どの発展段階にも、どの瞬間にも、プロレタリアートの戦術は、この、客観的に避けられない、人類史の弁証法を考慮にいれて、一方では、先進的な階級の自覚と力と斗争能力を向上させるために、政治的停滞の時期、または亀の歩みのようにのろろした、いわゆる「平和的」発展の時期を利用するとともに、他方では、そ

の階級の運動の「終局目標」に向って、「二〇年を一つに圧縮した」偉大な日々がきたとき偉大な任務を実践的に解決できる能力をこの階級のうちにづくりだす方向に向って、この利用の活動全体をおこなわなければならない。」(レーニン「カール・マルクス」)

③ プロレタリア革命過程の客観的総体性と、その総体性を構成する主観的契機との弁証法的連関を正しく認識し実践する共産主義者は、常に、客観的な「プロレタリアートの階級斗争の戦術」を、主観的(王体的)な共産主義者(一党)による「プロレタリアートの階級斗争」に対する戦術として把握するものである。

プロレタリアートの戦術問題を、共産主義者は、「なにをなすべきか」として理解出来ない俗流マルクス主義者、経済主義者—サンジカリスト達は、その素朴な(自然生長的な)政治「理論」に基づき、マルクスのあの有名な「労働者階級の解放は、労働者自身の事業でなければならない」という命題の真の内容を理解せず、その直接的意味に押しとどめている。

そして、次の彼等の二つの傾向は密接不可分ののだが、彼等が、運動上の問題では、プロレタリアートの「当面の利益」と「将来の利益」を媒介に結合させようとし、又、或る時には、両者の間に深淵を作ったりする事や、組織上の問題では、プロレタリア革命の勝利への鍵を握る「革命党」建設の困難な任務を軽視し否定したりする事は極めて必然的帰結なのである。

なぜなら、人類史上、プロレタリアートの階級斗争の戦術こそ、最も首尾一貫した合目的活動である事を自覚し、且つ共産主義者は、今(—資本主義社会の下で)「なにをなすべきか」として、主観的に実践上の諸課題を提出する事によって始めて、「労働者階級の解放は、労働者自身の事業でなければならない」というマルクス

の命題の「概念的」な意味が、換言すると媒介された現実の意味が、認識されるものである。

このような共産主義者の王体的立場に立つ事によって、プロレタリアートの階級斗争の戦術全体に占める「革命的戦術」の位置、及び、そのような戦術体系を現実化する組織(一党)の荷うべき真の役割が認識される。

④ プロレタリアートの階級斗争の戦術全体に占める「革命的戦術」の位置については、第一章、3を参照してもらいたい。

確かに、プロレタリアートが自らを、支配階級へとたかめる端緒を獲得する斗い—武装蜂起は、現実の個々のプロレタリアにとってプロレタリアートの数限りない階級斗争の全道程の中の或る一つの斗いにすぎない。

だが、資本主義社会—「白色地区」の真只中で苦闘している共産主義者にとってはどうか?

「革命的戦術」は、単なる一つのプロレタリアートの階級斗争の戦術ではない。「革命的戦術」の実現はプロレタリアートの「究極目的」を表現する結節環なのである。

我々はプロレタリアートの戦術問題に関するレーニンの著作の全てに、かかる把握の方法を発見する事ができる。

だから、共産主義者は「プロレタリアートの根本的利益」への結節環たる「革命的戦術」(—蜂起—労働者権力樹立)の実現の一点に向けて、一切の自己の政治生活を律し、組織の全ての活動、斗いを、その実現の為に系統化させ従属させるものである。

⑤ だから、真の共産主義者だけが、プロレタリアートの「理論」を、プロレタリアートの「実践」へと媒介する組織(一党)問題を、最も自覚的に取り出し、「強固に組織された党」建設の任務と、当面

の大眾的実践の任務とを嚴格に區別し、且つ、現下の大眾的実践・階級斗争の中で、革命党を打ち鍛えていく。

特に、我々は、プロレタリア革命が勝利する為の、最も重要な条件は、「革命党」の成熟に依存していると言つても過言ではない事を指摘しておく。

労働者人民が相像を絶する速さで政治的に成長する「革命的危機」の時代は、過去、何れも、全ての資本主義社会の歴史に現われたし、又、将来も、必ず登場するものである。

だが、そうした内乱の時代、「革命的危機」の時代は、必ずしも、勝利への「革命的情勢」の時代であるとは限らない。

「革命的危機」を「革命的情勢」へ転化するものは何か。

それは、市民社会の全領域から湧き起こる盲目的な民衆の「闘う意志」の奔流を、旧社会の国家機構を粉々に砕く為、一本の雄大な大河へと合流させる事を可能とさせる革命的労働者党に他ならない。

こうした劇的な時代に於ては、どんな俗物の目にも、過去、何なる弾圧にも屈せず、工場、学園、労働者街等で、ねばり強く積み重ねられて来た少数の共産主義者の精力的活動、人間の主体的活動が、人類史の巨大な一角をもつき崩しうろという事が明らかになるのである。

「強固に組織された党があれば、個々のストライキは政治的デモンストレーションに、政府にたいする政治的勝利 転化しうる。強固に組織された党があれば、個々の地方における蜂起は、勝利的な革命に拡大成長しうる。

われわれは個々の要求のための政府との斗争や、個々の譲歩の獲得は、敵との小ぜりあいにはすぎず、小さな前哨戦であつて、決戦はまだ前方にひかえていることを、記憶しなければならぬ。われわ

しぐものであった。

だが、真の共産主義者は、こうした世界史の本性的な「残酷さ」に直面しても、たじろぐものではないし、又、世界史の修羅場を前にしてすら、その姿を現わそうとしない「理性の狡智」(ヘーゲル『歴史哲学』)に對して、嘆息する事も、決してない。

中南米人民が生んだ偉大な革命家、チェ・ゲバラは、全世界人民に對して、こう叫んだ。

「もしわれわれ——世界地図の上の小さな一点上にいるわれわれが、自己の責任を果し、どんなに些細であつても、われわれの提供できるもの、すなわち自分の生命や犠牲を喜んで斗争のために提供するならば、また、いつの日か、すでにわれわれのものである異国で血まみれて最後の息を引きとるにしても、人々には次のことを知らせたいのである——われわれは、われわれの行動範囲を正確にわかまえていくこと、われわれはプロレタリアの大軍の中の一分子にすぎないことを自覚していること、しかし、われわれは、キューバ革命と、その偉大な指導者から学んだことを誇りにしていること、キューバにおける、この指導者の態度からほとぼり出る偉大な教訓人類全体の運命が危機にひんしているとき、一個人、一国家の危険もしくは犠牲が一体何であらう。Vを誇りにしていることを、いつ、どこで死のうが、おそれはしない。ただわれわれの戦いの叫びが、誰かの耳に入り、誰かが代つてわれわれの武器をとり、ほかの誰かが進み出て、機関銃の連続音と新しい斗争の勝利の雄叫びと相和した読経をつとめてくれれば、それでいいのである。」

(『三大大陸人民連帯機構執行書記局へのメッセージ』一九六七)

プロレタリア革命過程の客観的総体性と、その総体性を構成する契機としての主体的人間の活動の關係自身の中に戦術に対する客観

れの前面には敵の要塞が、その全威力を擁してたちふさがり、そこからはわれわれのうえに雨あられと砲弾や銃丸があびせかけられ、わが最良の闘士たちをうばいさつていく。われわれはこの要塞を奪取しなければならぬ。そして、もしわれわれが、目ざめつつあるプロレタリアートの全勢力とロシアの革命家の全勢力とを結合してロシアにおける生命あるもの、誠実なものすべてを引き寄せる単一の党とするなら、われわれはこの要塞を奪取するであらう。」

(レーニン「われわれの運動の緊要な諸任務」全集4巻)

注1. 「共産主義者は、実践にはすべての国々の労働者政党のうち、もっとも確固たる、たえず推進してゆく部分であり、理論的には、プロレタリア運動の条件、進路、一般の結果を理解する点で、プロレタリアートの他の大衆にまさっている。」

(マルクス・エンゲルス「共産党宣言」)

III 「正しい戦術」と共産主義者の主観的、内面的価値

我々は、これ迄「正しい戦術」の問題、即ち、人間の歴史過程総体に占める共産主義者の「行為の客観的価値」の問題について論述してきた。

ところが、又、共産主義的戦術の実現の為には、何よりも一人、一人の共産主義者の革命的情熱、何如なる弾圧にも屈しない不屈の意志、革命運動の「正しさ」への確信といった主観的、内面的価値が、最前提の条件である。

プロレタリアートの解放の歴史は、これまでの人間の歴史と同様に、おびただしい人間の流血をその発展の真物として要求するものであり、又、往々にして「善意」ある人々の意志をみじめに打ちひ

くたした。この事を根拠にするからこそ、我々は、このボヘミアの山中で没した偉大な革命家の精神・人民の解放の為には、自己の思想と肉体を、惜しみなく提供する情熱、その主観的・内面的価値すらも決して他人の関与しえない「純粹の個別性」にとどまる事なく、普遍的に共有する事が出来るのである。

このような情熱・主観的・内面的価値に支えられた主体的人間の活動が、歴史の総体性の中に占める行為の客観的価値の問題へと転化され、「正しい戦術」として昇華される時、又、唯一、その限りにおいて、その情熱・主観的・内面的価値は、無数の最良のプロレタリア革命戦士の魂を、深く揺り、固く抱え、そして、もはや人間が人間を搾取し、支配する事のない来るべき社会の誕生の為の、かけがえない貴重な礎になるに相違ない。

我々は、過去の日本共産主義運動の最も「ラディカル」な精神と、その実践の成果を継承し、「新左翼」内部の反レーニン主義のこの道、即ち解放派・叛旗派等に見られる経済主義、無政府主義、解党主義の道と、革マル派に見られる蜂起に敵対する合法主義「党」建設の道に反対し、革命的左翼の最良の部分と力を合わせて真の革命党を建設する道を歩まなければならない。

そして、レーニンが述べたように「もしわれわれが、目ざめつつあるプロレタリアートの全勢力とロシア(日本)の革命家の全勢力とを結合して、ロシア(日本)における生命あるもの、誠実なものすべてを引き寄せる単一の党とするなら、われわれはこの(日本ブルジョアシーの)要塞を奪取するであらう。」

(『われわれの運動の緊要な諸任務』傍点論者)

闘争報告・方針

「佐藤政府を倒せ！ 武装闘争と 大衆路線を結合・発展させよ！」

—ニクソン訪中・世界革命闘争の新局面とわれわれの任務—

佐野茂樹

全国の書店にて発売（レニン研でも取り扱っています。）

定価 150円

「闘う意志」

京大 教養部戦線 執行委機関紙
全学戦線

13号まで発行 残部僅少

連絡先 京都市左京区東竹屋町京大熊野寮B棟307

京大全学戦線・C戦線宛

我々京大教養部戦線—全学戦線は、昨年九月京大に登場して以来、全共闘運動の革命的成果を貧慾に継承し、かつ、その限界を大胆に切開し——この事を通じ、代々木「共産党」から快を分かって以来の——数々の革命的左翼の闘い総体を思想—実践的に総括する端緒が切り開かれたのだが——新たな革命的學生運動の創出に向け、最も戦闘的、献身的に闘い抜いてきた。

誕生以来、革命的左翼諸潮流の混乱（これは偏に六〇年代階級闘争を一切主体的に総括しなかったこととの必然的結果であるが）を激しく実践的に批判し、代々木—民青との党派闘争を断固として推進しつつ日米共同声明以降の日本帝国主義の侵略—反革命に最も鋭角的に対決し、全人民的政治闘争を最先頭にたって闘い抜いた我々は、攻撃的叛軍闘争を日本海反革命拠点—舞鶴港解体闘争として展開し、沖繩—叛軍—入管闘争をまさに「組織された暴力とプロレタリア国際主義」の実体化として大胆にかつ細心の注意をもって推進したのだった。

この様な過程を通じ、我々は、三月における京大病院新病棟移転実力阻止闘争を、代々木—職組執行部の裏切りと革命的な左翼諸派の（とりわけ反戦会議諸君の）斗争放棄の中、二〇数名の逮捕者を出しながらも貫徹する事をもって、我々組織内部の飛躍と、同志社大学全学闘、立命館大学文学部戦線との共闘を勝ちとり、全国全共闘の形骸化の中において新たな学生戦線の再編の第一歩を踏み出したのだった。

この三大学共闘は、四・二八、五・一九斗争の戦斗的成果の上六月安保—沖繩斗争の爆発的展開の主導力となり、京大における八学部部のストライキ、同大全学パリススト、京都府立大の全学パリススト等、全京都の学生運動は我々赤ヘルを除いては一切語られない状況を作り出し、六月十二日には、全京都学生連合会の結成へと発展していったのだった。

我々はこの全京都学生連合会に結集する諸君とともに、空中分解した「八派共斗」をのりこえ、六九年秋の敗北以降、後退を重ねる諸派を尻目に、大衆的暴力斗争の地平を断固防衛し、インドシナ革命戦争に連帯し、日帝心臓部の階級斗争の最前線に位置している沖繩—三里塚の闘いの坩堝の中で自らをプロレタリア革命戦上へと鍛え上げるべく、返還協定調印実力阻止斗争、三里塚—二番地点、農民放送塔撤去阻止斗争を断固として、最後の最後まで、最先頭に立ち闘い抜いたのだった。

以下は我々の闘いの報告・方針である。



陣の秋の塚三里

九月末、全国から三里塚に結集し 第二次強制収用を死力を尽して実力阻止せよ

京都大学教養部戦線——学生戦線三里塚現闘団

一、一・二番地点―農民放送塔撤去実力阻止
斗争の成果の一切をかけて、第二次収用
実質化―収用を絶対実力阻止せよ

我々が日本階級斗争史上未曾有の5年有余にもわたる熾烈な闘いとして闘い抜いている三里塚闘争は、とりわけ二―三月第一次強制収用実力阻止斗争の比類なき英雄的な闘いで全国の人民の注目を集め、5月初旬以降は、第一次強制収用実力阻止闘争により死守された一・二番地点―農民放送塔をめぐる裁判闘争として展開されてきた。占有権をめぐる表裏一体の關係にある反対同盟より出された「土地保全仮処分申請」と空港公団側から出された「妨害物撤去仮処分申請」の千葉地裁の裁決が、七月十五日不当にも同盟側仮処分申請却下、公団側仮処分申請受理と出され、地裁は政府―公団と全く一体となり、七月十六日―二十九日まで執行を決定し、二十六日早朝執行官が三里塚現地へ入った。

二五日夕刻、反対同盟全戸に緊急動員指令のサイレンが鳴りわた

り、一・二番地点―農民放送塔撤去実力阻止斗争の火ぶたが切れておとされ、三里塚―芝山の全ての反対同盟を始めとする農民、全国から結集した労働者、学生が駒井野に集結し、バリケード内外で臨時体制をとり待機した。

二六日未明三里塚現地に進行中の関東管区機動隊の先導パトカー、装甲車、放水車に対し、成田―大清水間の法華塚付近で、ダイナマイト、鉄パイプ爆弾数本、火炎ビン等の熱い洗礼が浴びせかけられた。第一次収用阻止闘争の記憶と今春期からさらに精力的に武器をとるようになった人民に対する恐怖は、反革命突撃隊としてやってきた機動隊員の魂を寒からしめ、その出鼻を完全に打ち砕いたのだ。彼らは一旦後退せざるを得なくなった上に、動揺―恐怖を隠しきれずあわてふためき、現地到着は三―四時間も遅れた。彼らは、三里塚が強固な「人民の海」に支えられた「赤色地域」であることであらためて感じさせられ、彼らが襲撃におびえつつ、大回りをして駒井野についたのは、やっとなあたりが明るくなつてからであった。やっとの思いで現地に到着した機動隊を迎えたのは、決して公団女子職員の給仕する熱いお茶でもなければ、権力者には叩頭して従う無力な人民でもなかった。彼らが阻止線をはらんとするや、手に

手に竹槍・棍棒・石つぶて・火炎ビンで武装した、我が戦線を先頭とする完全武装の三百名の突撃隊が取香方面から突如現われ、地の底からの如き「空港粉碎ノ撤去阻止ノ」のコールと共に、新資材輸送道路二号線へと向う、それと呼応して、旧資材輸送路方面で、一・二番地点―農民放送塔に果敢なデモンストレーションを展開していた五百の部隊が戦線の竹槍・棍棒部隊を先頭に逆方向の駒井野方面から新資材輸送道路二号線へ、火炎ビンが放水車へ、放水車の燃えあがるのを合図にせきを切ったように突撃隊を持った突撃隊が、竹槍部隊が機動隊の大楯めがけてまっしぐらに突込んでいく。一時はこらえた機動隊もたまたま背中をみせ大楯を捨てて敗走していく。更に追撃を加えていく雨の如き投石。機動隊は、「中隊長、早く戻って下さい」と悲痛な叫びをあげ、応援を必死になつて頼んでいる。何とか突破されまいとして一・二番地点周辺の機動隊をかり集める。しかし、我々の果敢な闘いの前に阻止線は数度にわたって寸断され、彼らの狂暴な本質を露わにして催涙弾の水平射撃、大楯の水平打ち、果ては機動隊の指揮者の「投石」の号令で、機動隊の後ろにコン泥の如く隠れていた私服が、石・ビンを投げてくるなど、追いつめられた彼らの動揺と恐怖をあますところなく吐露したのだ。

我々は、決して自らを過少評価する事なく敵の力を過大評価することなく、敵の圧倒的な物量攻撃に際しては、密集した部隊で敵の最も弱い環を奇襲攻撃する戦法と、長期に亘る現斗団の綿密な調査活動と、全ての戦士の毎日の活動の成果を踏まえ、三里塚の地理に習熟した利点を生かし、「人民の海」を背負いつつ山林地帯に後退し、部隊を整えて更に攻撃を加えるという最も有効な斗争を展開し

た。機動隊は、我々の果敢な闘い、法華塚におけるダイナマイト、鉄パイプ爆弾の事が脳裏から離れず、山林地帯には一歩たりとも足を踏み入れることが出来ず、反撃を恐れた公団周辺の猫の顔ほどの彼らの「安全地帯」へ早く帰りつくことばかりを考えていたのであった。しかしその「安全地帯」においても、機動隊は、執行二ヶ月前から公団分室に先発隊を常駐させ、公団分室を守る形で一・二番地点―農民放送塔周辺に幅4m深さ3mの溝を掘りめぐらして阻止線をはり警備していたものの、いざ斗いになるや溝に落ちるのは機動隊ばかり、更には溝の中に火炎ビンが追いつちして見舞われるという有様。

さらに、地下塹壕においては、二六日午前五時、塹壕周辺のバリケード撤去作業が開始されるや、重機械に対し、火炎ビンが投げられ、まだうす明るい空に真赤な炎があげられた。バリケードの中にいる反対同盟員は、敵の作業を絶対に許さないという気迫に溢れ、糞尿弾と火炎ビンを集めたあひせかけ、パチンコ銃で作業員を打ち倒し、更にはブルドーザーの作業員をつき落とし、ブルドーザーを駆って敵の真只中に突っ込むなど果敢な闘いを展開し、敵を恐怖と消耗のどん底に追い込んだのだ。第一次強制収用阻止闘争において死守された農民放送塔は、クレイン車で無理やり引き倒されるといふ非道な権力の暴虐に対しても、その先端が傾き地につくまで我々の闘いの正当性と国家権力の反人民性を暴露し続け、地下塹壕においては、穴の中に本格的な火炎放射器が持ち込まれ、中に入ろうとした機動隊員が火だるまになつて外に放りだされ、這々の体で逃げ出すなど、敵を徹底的に追いつめていったのである。

この(1)法華塚における移動中の敵に対する破壊力の大きい武器に

よる待ち伏せ―奇襲攻撃闘争 (2)バリケード―地下塹壕戦 (3)更にはそれらを保険していく、それによって活動領域のより広い幅を与えられている突撃隊を先頭とする公然たる精神的な大衆的実力闘争。この三者の闘いが遊離することなく有機的な結合の下に推し進められていったのであり、政府の反人民的な策動に対して五年有余にもわたって斗いぬかれてきた三里塚の闘いをふまえつつ、より精神的な、より幅の広い攻撃的な闘いとして一・二番地点―農民放送塔撤去実力阻止闘争は展開されたのだ。

二七日も前日の闘争の成果を受けつぎつ闘いが持続され、二六―二七日と塹壕戦―地の利を持しての正面戦―白兵戦が展開される中で、執行官は二六日に執行は終了したとしてそそくさと逃げ帰り、機動隊はどしゃぶりの雨と炎天にあふられ、我々の闘いの前に火炎ビンによる火傷・竹槍による瘡傷・棍棒による打撲傷を中心とした重傷者が続出する中で消耗し、恐怖させられ、ブルジョア傭兵としての体質を露呈して、二八日の時点で何とか穴掘り工事を中止してくれと空港公団に申し入れるに至り、更に他方で、これ以上三里塚闘争が全国の人民の目を集中させ政治焦点化するのを恐れた政府による空港公団に対する圧力も高まった。

二八日午後三時、遂に今井空港公団総裁の記者会見で工事中止が発表され、公団は公然と自らの敗北を天下に告げざるを得なかった。しかしながら、なおも機動隊は一・二番地点地下塹壕周辺に居坐り、地下塹壕内で闘い抜いている反対同盟員に対し、「工事は中止したから出て来い」「出てこなければ威力業務妨害で逮捕するぞ」「左どと煽めと機嫌を行ない、何とか穴の中に入っている同盟員を逮捕して自らのメンツを守ろうとヤッキになつていたのである。この

彼らの卑劣な攻撃に対し、二八日夕刻塹壕内にいる同志に食料、衣服を届けんとする反対同盟員一・二番地下塹壕をなご包囲している機動隊の阻止線に向け突撃闘争を展開した。これと呼応して、我々は機動隊の士気の低下を見抜き、政府公団に敗北の追認を迫るべく大攻勢に転じ、駒井野北方山林地帯より真紅の赤ヘルの完全武装部隊を先頭として五百の部隊が登場し、一・二番地下塹壕周辺に居坐る機動隊の阻止線めがけ疾風の如き突撃を加えた。機動隊は火炎ビン攻撃にタジタジとなり、公団分室へ逃げ帰り、照明弾を打ちあげて公団分室の鉄扉をビッシリとしてみせ恐れにふるえていたのだ。

この大攻勢の軍事的―政治的な勝利によって、再度一・二番地点地下塹壕周辺は我々が完全に制圧し、翌二九日には、地下塹壕を守り抜く反対同盟・全ての武装した支援部隊の結集による、塹壕周辺の軍事的な制圧をもって、一・二番地下塹壕前に再度強固なバリケードを構築すると共に、断固としてこの地下塹壕を守り抜く固い意志統一を勝ちとつたのである。

ところが政府公団はこりした我々の斗争の前に仰天し、焦燥を深め、さらに破廉恥な策動を図っていたのである。三〇日に入ると、一時は「今後の工事に支障はない」と工事中止を発表した公団側はその舌の根もかわかないうちに全く整地作業が進まないのに焦りに焦り、公団下部職員も一切秘密にし、あらゆる報道を管制シャットアウトしておいて更に駒井野閉結小屋他数カ所の閉結小屋に強制捜索を行ない、その間に「穴の中に人間はいないんだ」と穴の中で闘っている反対同盟員の命など問題ではないと言わんばかりに、あらゆる重機械を持ち込み、穴掘り工事を強行し、中いたる反対同盟員を不当逮捕していった。

こうして結果的には公団のたまし打ちによって一・二番地下壕は撤去された。しかし、この一・二番地点撤去実力阻止闘争が、且つてなかつたほど熾烈な闘いとして展開され、第二次収用の全ての領域の闘いを決定づける闘いとして、更に第二次収用にむけ同盟を中心とする闘い隊列の更なる強化を勝ちとる闘いとして存在していた事を見るならば、この闘いで我々の得たものは測りしれないし、我々が必らずやこの一・二番地点一農民放送塔撤去実力阻止闘争の全ての成果を収約しつつくして闘いを進めるなら必らずや第二次収用を阻止できるであろうし、退止しなればならない。

一・二番地点一農民放送塔撤去実力阻止闘争で我々が獲得したものは、

第一点に「一・二番地点一農民放送塔撤去なくして第二次収用なし」と言われたこの闘いにおいて、日本階級闘争の新たな地平を切り開く闘いにせねばならない三里塚闘争の一大決戦一第二次収用阻止闘争のあらゆる領域にわたる戦術を確定する闘いとして闘い抜かれたと同時に、権力・公団の卑劣な「喝・懐柔をはねのけ更に激烈な闘いを担うべく同盟を中心とした闘い部隊の更なる強化を勝ちとつたこと。そして第二次収用に必らずや勝利しうる事を我々が確信させたこと。

第二点に、「七二年沖繩返還」を前にして、日米帝の反革命同盟の再編・強化一日帝による沖繩の侵略前線基地化の策動が進められんとし、アジア支配の再編一ニクソングラムドクトリンの実質化が行なわれんとしているのに対し、インドシナ人民を先頭にする後進国人民の英雄的な闘いが帝国主義者の意図をズタズタに引き裂き、それを受けつぎつつ中国共産党が巧みな外交戦により帝国主義者に

最終的な中国革命の迫認を迫り、インドシナ革命戦争勝利を最終的に確認させ、「アジア人をアジア人同士で闘わせる」というニクソングラムドクトリンの最終的な破産をさせんとしている中で、帝国主義国心臓部における新たな段階への階級闘争の前進を勝ち取る突破口を切り開いたこと。

第三点に、新左翼総体が六九年十一月の敗北以降、混乱と混迷を極め、六月十五・十六・十七日「沖繩返還協定」調印阻止闘争において如実に露呈された如く自らの立脚点を見失ない、六七年一〇／八闘争以降四年間の階級闘争の激闘を一切教訓化することなく、沖繩闘争の方針をめぐって更なる分解を引き起こしている現在、非和解的左階級闘争の時代に、真に人民の利益を代表して最後まで闘い抜ける思想・戦術・運動・組織を体現している部分はどこなのか、それを明らかに大衆の面前に公然とつきつめたこと。

以上の三点に要約できると考える。以下順を追って展開していく。

一・二番地点一農民放送塔撤去実力阻止闘争は第二次収用に対する闘い方を決定した。粉砕せよ、第二次収用を、
一・二番地点一農民放送塔撤去実力阻止闘争は、この闘いの道義性の広範な確認の上に、第一次収用以降、飯場・重機種類の焼き打ち、成田警備会社爆破etcの「天狗」の連日わたる闘いの頂点の闘いとして展開され、更に撤去作業中一終了以降も「天狗」の活躍は日に日にめざましくなり、駐在所襲撃・パトカー襲撃から成田警察署爆破闘争etcをもつて、より高度な技術をもつてする武器の登場も間近であることを告げている。

我々は政府公団が第一次収用をめぐる攻防戦が全国の注目をあつめ全人民的な課題として闘い抜かれたことを決定的なまずさとして

総括し、それ以後、徹底的な札束と縁故関係を動員した煽喝と切り崩し戦術を遂行して反対同盟を切り崩さんとしてきたのに対し、彼らの骨の髄に至るまでの反動性を暴露し、その上になつて、この三里塚闘争が非和解的な実力闘争として闘い抜かれなければならないことを明らかにし、実践的にその最先頭になつて闘いぬくことによつてその野望を完全に打ち砕いた。

先述したように、今回の闘いは政府一公団の反人民的な策動に対する全人民的な怒りと「闘う意志」を背景に、地の利を活かし、部隊の集中と分散・攻撃と退却、武器の製作とそれの部隊への結合の問題を正しく処理して (1)破壊力の大きい武器による待伏せ一奇襲攻撃闘争 (2)パトカー一地下壕戦 (3)敵の弱い環に対する密集した精神的な正面戦一白兵戦を高度に有機的に結合した闘いだつたのであり、結果的に一・二番地点一農民放送塔は撤去されてしまったとはいえ、より精神的な政治宣伝一煽動・組織化と、より精神的な武器の使用を前提にすれば、必らず勝つことができるという確信を我々に与えてくれた。この三つの斗いは、有機的に結合されることによつて相乗された攻撃力をもつ。

今、一・二番地点一農民放送塔の攻防戦を前後して、活発なゲリラ闘争が展開されている。それも、成田のガードマン会社爆破、駐在所襲撃、パトカー襲撃、成田署爆破とより目的意識的に権力闘争へ発展する道をたどっている。こうした一連の闘いの中で反対同盟を中心とした闘い隊列は確実に強化されている。我々は、この闘いを孤立させることなく、更には、第二次強制収用阻止へと、激烈な政治的昂揚を引き起こす闘いへと収約していかねばならない。

それとともに、三〇日に見られた如く、全面的な政治戦として闘

いが発展している中で、我々は、あらゆる場所、あらゆる機会をとらえ、宣伝一煽動活動を繰り広げ、あらゆる労働者、農民、学生を政治的昂揚の渦の中へ引き入れねばならない。

二、インドシナ人民の斗いに呼応し、帝国主義国心臓部における、ブルジョアジーの心臓を射抜く斗いを。

「七二年沖繩返還」を前にして、自衛隊の沖繩派兵をメルクマールに、日帝による沖繩のアジア侵略前線基地化の策動がなされ、本土における一大侵略一反革命拠点として「新東京国際空港」が建設されんとしている現在、この一・二番地点一農民放送塔をめぐる攻防戦は、この日帝の意図を徹底的に突き崩し、帝国主義心臓部を揺り動かす闘いへの大きな突破口としてあつた事をはっきりと確認しておく必要がある。

七〇年代初頭において、米帝はインドシナへズブズブとのめり込み、商品競争力の構造的な低下から、貿易収支の赤字を引き起こす中でドル一金体制の動揺を引き起こし、それに加えて、インドシナ革命戦争を先頭とする後進民族解放闘争の前進の中で、戦後IMF一ヤルタ体制の倒壊の危機を迎え、この危機をマクナマラ戦略から、実質的には反革命同盟を再編強化して反革命世界体制の破綻をとりつくりつつ、現象的にはアジアから地上軍を撤兵し、アジア人を同志で闘わせるというニクソングラムドクトリン戦略への転換

で乗り切らんとし、日帝自身はこれを自らアジアの盟主になる過程としてなし切らんとし、こうした中で、日米帝の反革命同盟の再編強化が急務の課題として日米両帝国主義に課せられており、彼らは「七二年沖繩返還」をメルクマールとしてこれを成し切らんとしている。しかしながら、インドシナ三国人民を先頭とする後進国民族解放闘争―革命戦争の前進の前に、米帝の意図は総破産しようとしている。この間の米中会談こそ米帝國主義者を始めとした世界の帝國主義者に第二次大戦とは何であったのか―中国を先頭とする民族解放革命戦争の勝利―を迫認させると同時にインドシナ革命戦争の最終的な勝利の確認と、ニクソン・アムドクトリンの中心点「アジア人をアジア人同志で闘わせる」野望を、日本帝國主義とアジアの民族ブルジョアにゆさぶりをかけることによって粉砕してゆくものであり、インドシナ革命戦争の前進の直接的延長上にある闘いである。こうしてますます米帝はいつめられており、インドシナでの敗北による世界戦略の破綻の弥縫策としてのニクソン・アムドクトリン―日米帝の反革命同盟の再編強化―日帝による沖繩の侵略前線基地化の野望は、インドシナ革命戦争の更なる前進と中国外交戦によりガタガタにくずされ、日本支配階級の内部に「親中派」を登場させつつ、日「韓」台反革命プロックの形成に対する強力なゆさぶりがなされているのである。このような情勢の展開は、ますます日本帝國主義者の反動性を明らかにしており、沖繩を侵略の前進基地としつつ、他方の侵略の一大拠点として「新東京国際空港」を建設せんとする犯罪性は、我々の実力闘争を契機にますます明らかになるろとしてい。

このように国家がますます反人民的なものとして、市民社会に外

・八羽田闘争以降の革命的左翼の闘いと不可分なものとして発展してきたであり、政府空港公団があらゆる手段を駆使して、恫喝と懐柔となしくずし的な工事進行を図っている時、これからの闘い、とりわけ今秋第二次収用阻止闘争の地平を決定する重要な闘いであったこの闘いに、「全国党派」として恥ずかしい闘いしかできなかつた諸党派、とりわけ革共同中核派の日和見主義は、日本の革命的左派の内部的な弱さとして徹底して糾弾しなければならぬ。我々は決して、個々の戦局局面で「やった」とか「やらなかった」とかいうレヴェルで問題を立てているのではなく、三里塚のこの闘いで要求されていた非和解的闘いの地平に答えることができなかつた「前衛」の思想、戦略―戦術、及び運動、組織はいかなるものでしかないかとして問題を立て、これに実践的な立場から答えようとしてい。

革マル派は、それまで、「農民エゴイズムの小ブル闘争だ」として、この闘いに対して敵対してきたことの破産が明らかにならんとするや、二六日にだけ現われ、三里塚闘争を闘いましたというアリバイだけの「闘争」を行ない、「明日は千五百人を連れてくる」などと大げらなふきながら以降の闘争から完全に逃亡し、「赤ヘル、青ヘルを領導した」（「解放」）などとたまたた「解放」に載せる写真と文章を作るだけに現われたのであった。

そして、又、中核派においては、三里塚闘争を「農民の土地を守る闘い」としてしか位置づけられず、一・二番地点、農民放送塔の所有権が法律的に公団に移るや、自らの闘争の根拠を失い、第一次阻止闘争でみせた日和見主義を拡大再生産し、二六日早朝から正面戦で闘っている我々の前には一切姿さえ見せず、二八日に至っては

的なものとして、市民社会に外的なものになっていくにつれ、日本における階級闘争は、爆弾の日常的な登場の中で、新たな時代に突入せんとしており。この間の一・二番地点―農民放送塔を前後してのゲリラ闘争の激発を見てもわかるように、この闘争は日本階級闘争の飛躍の突破口を築く闘いであった。

戸村委員長が「地下壕はベトナムまでも、つなげていかねばならない」と言っている如く、三里塚闘争はこのようにプロレタリア國際主義の旗を高くかけ、闘い抜かれたのであり、一・二番地点―農民放送塔撤去実力阻止闘争が日本階級闘争の新たなステップとしてあった。第二次収用は、更に大きな飛躍をかけた闘いとして、より激烈な闘争として闘い抜かれねばならない。

三、一切の日和見主義―逃亡を粉砕し、政治警察との熾烈な攻防戦に勝ち抜け！

二六日―三〇日の闘いにおいて、我が戦線のあまりにも果敢な闘いに、「戦線をパクレノ、赤ヘルをパクレノ」と権力は我々に対する徹底した弾圧を加えてきた。しかしながら、我々は二〇数名にものぼる逮捕者数にもかかわらず、最後まで先頭に立つて闘い抜き、その後の政治警察との攻防戦に断固たる対応をもって応えてい。

この闘争で歴然としたことは、どの部分が真に闘うのかである。「日共」、革マルは論外であるが、この三里塚闘争は、六七年一〇

「危険だ」、「まさこまれるな」などと激しい攻防戦を展開している我々の横をコンソソとヘルメットをぬいで逃亡したのである。

あらゆる諸党派が、現在の階級闘争の地平の中に三里塚闘争を正しく位置づけることができず、アリバイ作りのためだけにみ三里塚を考へ、何ら、この闘争を取り組みえなかつたのに対し、我々は正しく敵の力―味方の力を見極め、敵の残虐きまりないテロ行為、催涙弾乱射に対応すべく、部隊付きの医療班を編成するなど、正面戦はもうできないなどという日和見主義に対して断固として闘い、利点を利用し、創意工夫をこらし闘い抜いたのである。また、闘い部分がはつきりすればするほど、その部分に対しては弾圧もますます強められ、医療班であろうが何であろうが無差別に攻撃がかけられるし、彼らの攻撃手段も、涙がでなくて目がかすんでくるという更に毒性の強い「催涙弾」を使いなどますますエスカレートしてきた。我々はこうした攻撃に対しては強固な思想性をもった救済組織の編成を行ない、あるいは完全黙秘の強固な意志統一を取り、断固たる闘いを展開した。医療班は適切な状況判断の下に、終始部隊と共に闘い抜いたし、獄中につながれた二〇数名の同志も全員が完全黙秘で闘い抜いている。そして、また、現闘争も、八月七日成田署の爆破当日に行なわれた不当な団結小屋捜索、私服の尾行にも屈する事なく、連日の闘いを推し進めている。

この政治警察との熾烈な攻防戦に勝ち抜く事なくしては、決して我々の今後の勝利的展望は開かれ得ない事を認識し、獄中の同志と連帯して、決して権力のつけ入るスキを与えない体制を常時とっておかねばならぬ。

四、第二次収用の実質化―孤立化―分断策動を粉碎して第二次収用阻止へ更に戦線を固めよ！

九月下旬から一〇月に第二次収用が迫っている今、すでに第二次収用の実質的を開始がなされようとしている。駒井野では、団結小屋前の県道の付け替え工事が急ピッチに進められ、団結小屋を孤立化せんとしており、また、我が団結小屋のある取香においても、最前線で大団ひとり闘っている反対同盟員大木よねばあさんの宅地を孤立化させる周辺関連工事が行なわれんとしている。これに対し、戦線をはじめとする全京都学生連合会現闘団は、取香に団結小屋を構築して以来、我が団結小屋と大木よねさん宅の間を分断せんとして進められてきた東関東自動車道路工事をはつきりと第二次収用の実質化とらえ、測量阻止闘争を展開し、工事を実力で阻止しているのである。更に、よねさんの宅地と田んぼを結ぶ農道を分断し、生活を破壊すると共によねさん宅の孤立化をはからんとしたのでに対し、赤ヘル三〇の部隊で工事を実力阻止し、工事一時中断に追いこんだのである。

我々は、我が団結小屋の位置する周囲の丘には徹底した闘いで公団を一步たりとも踏み込ませず、工事を絶対やらせなかつたし、今後も絶対にやらせない闘いの決意である。

第二次収用は、帝国主義者が「沖縄返還協定」批准を目前にして市民社会総体に対する帝国主義的再編を行なっている中で、我々が

攻撃を加え、敵の意図を粉碎する政治的左圧倒的昂揚を引き起せるか否かの闘いである。
全国の同志たち！ 第二次収用阻止に向け、北総台地に総結集せよ！！
あらゆる「武器」をもって三里塚に結集せよ！！

「三里塚秋の陣」

第二次強制収用実力阻止のため

六九年十一月一七年までの闘いは我々にとってどのような教訓を与えてきたのか

①アジア民族解放闘争と我々の立場

②七〇年安保闘争の敗北の教訓を血肉化し、日本帝国主義打倒の大道を突き進め！

武装大衆闘争を「三里塚」で確立せよ！

三里塚での我々の闘い

爆弾闘争を断固支持せよ！ 更に発展させよ！

今年度に入って、二・三月そしてこの夏、官憲のくつでじゅりりんされた三里塚が、再び、この秋荒されようとしている。

日本資本主義のアジア諸国への露骨な侵略―反革命の開始は、「自衛隊」の強化と共に、新東京国際空港を来春五月に開港せんとせまっている。政府は資本家は、遅れに遅れた空港建設に業を煮やしている。

この様を政府―空港公団のあせりをさらに追いつめ、粉碎する為にも、我々は、今秋の第二次強制収用実力阻止の旗を高々と掲げ、闘い抜かなければならない。一九六八年二月二十六日、成田市営グラウンドに於て始まった革命的左翼と反対同盟の連帯は、「六〇年代の合法左翼のカンパニア政治を踏みつぶし、戦前、戦後通じ押しつぶされて来た人民の血の歴史を再びよみがえらせたのだ」と言っても過言ではない。六七年の二〇・八日羽田斗争の歴史的闘いを境に、六〇年安保斗争後のフロントの崩壊以後苦闘を強いられて来た革命的左翼の実践的成果は、政府との六九年十一月までの政治的軍事の対決へと煮つめあげられたのだ。

六九年以降の混乱の中で、我々は、自らの内部に巣食っている日和見主義的傾向を明らかにさせ、それを克服しなければならぬ。

その為にこそ「三里塚」を斗い抜かなければならない。「三里塚」が日本のブルジョアジーのアジア侵略・反革命を支える政治的要素であるが故に、「三里塚」を斗い抜ける潮流こそ七〇年代の新時代に応えられる事を意味している。

八六九年十一月〜七一年までの斗いは我々にとって
つてはどのような教訓を与えて来たのか。▽

五六年六全協の日共II代々木の方針、転換は、国際派官僚と所感派官僚とのボス交によって何の実もなく、デッチ上げられたのだ。今日、代々木が誇っている自主独立の原型はすでに作り上げられていたのだ。議会を通じた権力移行構想を、普遍的原則の如く、ふりまき始めたのである。「国家権力が平和的に移行する」などは、今日に始まった言葉ではない。レーニンの時代でも同じだ。ノ・マルクスマやエンゲルスの著作集のほんの一本を都合よく引用して来たり、自己の姿に似せてチリやセイロンの人戦線政府の樹立を持出したたり、代々木はエセ弁証法をやっきになって展開している。レーニンは「暴力革命の役割の歴史的評価は、エンゲルスにあっては、暴力革命への心からの賛辞となつてゐる。このことを「誰も思い出さない」。この思想の意義について語ることは、いやそれどころか、それを考えることすら、今日の社会主義諸政党では慣例になつてゐないし、大衆のあいだでの日常的な宣伝・運動においても、この思想はなんの役割も演じてゐない。ところが、この思想は、国家の「死滅」と不可分に結びついていて、整然たる全一をなしてゐるのである。『(国家と革命)』と日和味主義者への原則的批判を行つてゐる。ところがこうした、悪質なエセマルキストに対抗して結成された共産主

義者同盟(五八年)、革命的左翼も原則的立場(世界革命、社会主義革命)、プロ独、暴力革命)は掲げていたとしても、火災ピン軍事斗争への反対派(国際派)を母体として登場して来た事の中に、乗り超えられない非合法軍事の壁にぶちあたるゆえんを見なければならなかったのである。

① アジア民族解放斗争と我々の立場

一九一〇年の日「韓」併合以後、日帝の植民地となつた朝鮮は、中国大陸への侵略拠点として収奪をほしきままにせられた。朝鮮人民の苦難は、「太平洋戦争」の性格―日帝―米帝の帝国主義間戦争であると同時に世界革命戦争の波及としての中国革命戦争―日帝間の戦争という二重の性格に規定されて日帝の戦争敗北以後も「韓」のデッチ上げ、在日朝鮮人民への弾圧と間をあける事なく続いている。この事は朝鮮人民だけでなく、アジア人民全てにも言える事なのである。

蔣介石を擁護し、民族資本家によるブルジョワ革命を押し進めようとしたコミンテルン(スターリン)に対決し、確立された毛沢東主義はアジア人民解放の大いなる武器となつた。土地革命を軸にした「赤色地区」「根拠地」建設と紅軍建設による武装斗争によって、中国共産党は、日本帝国主義、買弁ブルジョア階級、二面的な民族ブルジョア階級に対する斗争を繰り広げ長い闘いの後、中国に於て共産党のヘゲモニーの下での独裁権力を打ち立てたのである。中国共産党は、その革命の成長過程から、第二次国共合作に於ても決して党一軍を溶解させる事なく、党のヘゲモニーによって有利に抗日斗争を押し進めたのである。農民大衆―都市小ブルジョアも又プロ

レタリア独裁によつてしか、自らを解放出来ない事を中国革命は明確に証明した。一九四九年の中華人民共和国の成立は、表面的にはブルジョア革命の形態を取つてはいるが、内実はまさに赤軍―赤色根拠地を軸とした共産党のヘゲモニーの確立でもあるのだ。中国の巨万の農民プロレタリアートと共に苦難の歴史を歩んで来た共産党の権力樹立こそ我々は積極的に評価しなければならぬ。小ブル的な反スターリン主義的意識では、四九年の中華人民共和国の確立から今日のインドシナ革命戦争への発展は到底つかみ得ない。革共同の反スターリン主義思想こそ「労働者国家」を平板的に理解した歴史的遺物である。現実のドラスタチックな階級斗争の発展は、我々を

も、無論人民をも鍛え成長させてゐるのだ。農村での土地革命を推進し、党一軍による長期の持久戦を貫いた中国革命の中から、我々は、先進国に於ける武装蜂起に向けた、あらゆる苦難に耐え抜ける武装地下労働者党建設の必要を学ぶ事が出来る。又その党によつて始めて、「世界の農村による世界の都市の包圍」戦略を包摂する戦略をうち立てられるのだ。

アジアに於ける雄大な人民の戦争は、我々の狭い視野を取りはらい、小ブル観念を脱皮した立場を要求してゐるのである。

ニクソン訪中に対する革共同中核派、第四インター、代々木の小平の反撥は全くこつてゐる。米中会談は中国共産党―共産党として革命勢力の原則を貫く場としてあるのであって、それ以外の何ものでもない。「米中会談」を中国共産党の米帝への屈服などとほごくならバリ会談などは何と説明すればいいのか。それよりも、ニクソン訪中声明による日帝の動揺こそ、我々は見過してはならないのである。日「韓」台反革命プロックを形成し、中華人民

共和国の存在とは本質的には相入れない日本帝国主義のジレンマこそ日帝の弱い環でもあるのだ。(毛沢東主義を批判するつもりならもう少しましな実践的批判をすべきなのである。日本に於ける毛派の批判と取り違えてはいけないのである。)

一九七〇年七月七日の革青斗争以来、斗われている入管斗争は、一つには我々の反スタ路線克服の必要性を、すなわち真の「大衆路線」の確立を要求してゐるのだ。その路線からこそ、在日アジア人民の解放運動を指導し発展させ得るのだ。一つにはアジア解放運動の積極的評価を、我々の革命実践への取りこみと共に要求してゐるのである。(自己批判運動をする事ではさらさらしない。)

七〇年代をアジア人民と共に歩め、武装勢力を拡大せよ、
七〇年代をアジア人民と共に歩め、武装勢力を拡大せよ、
七〇年代をアジア人民と共に歩め、武装勢力を拡大せよ、

② 七〇年代をアジア人民と共に歩め、武装勢力を拡大せよ、

六九年の敗北は、我々にまた重くのしかかっている。ある者は獄中での苦闘を強いられ、ある者は崩壊した戦線を立て直すのに苦闘し、ある者は最前線からの後退を余儀なくさせられてゐる。だが敗北は決定的ではない。必ず立直れるのだ。六七年の一〇・八以来先頭になつて来たものの苦闘であるが故に、無駄な艱難ではない。日本に於てプロレタリア権力を樹立する事への糸口を見付け出せるなら、どれ程この「分裂」混迷が意義あるかはかりしれない。

レーニンは一九〇九年一月二八日、「ソツィアル・デモクラート」に、一九〇五年以降の反動期に於ける斗いを適切に述べてゐる。「自由獲得の為の最初の真に大衆的戦闘がおこなわれたあとで、自由主義者や途方にくれたインテリゲンチヤが元気をなくして、一度撃

破されたところには行くな、ふたたびこの不吉な道をとるな、と臆病に繰り返すなら、くりかえすがいい。自覚したプロレタリアートは彼らにこう答えるであろう。歴史上の偉大な戦争、革命の偉大な課題は、先進的な諸階級が一度ならず攻撃をくりかえし、敗北の経験に教えられて勝利の獲得をめざしたことよってのみ解決されたのである、と。」（『大道へ』）一九六九年の春から秋の闘いは敗北であった。我々が獲得しなければならなかった政治目標（政治危機すら）を一切勝ち取る事も出来ず、政治警察の余裕ある中に佐藤訪米を許してしまったのである。我々はこの惨敗を見なければならなかった闘いの中からこそ、つき進むべき原則を見つめる事が出来る。佐藤政府の六九年以降の反動は、日米共同声明に基づいた、その後の軍事強化、司法の反動化等にみられるようにあらゆる分野を厚くおおい始めているのだ。こうした反動に我々は力をこめて戦いを挑まねばならない。

我々がなぜ敗北をみなければならなかったかは、「前略今、我々は、組織についても同じことを証明する事が出来た。従来の党組織は平和的大衆斗争の組織であり、これがそのまま武装大衆斗争の組織に転化する事はあり得ないのである。」と花園論文（『自由への道』）がもつとも適切に論じている。批判はするどく、全く正しいのだ。だがそうであるならば、この当然の「武装大衆斗争の組織」を建設する事は何をもって可能であるのか。アメリカのウェザーマン、BPP、も又先進国の武装斗争の壁にぶちあたっている。党を軍事万能主義的組織に転化してはならない。レーニンの党組織論は「人民の意志」党への批判を通じて勝ち取られたのである。ロシアの「人民の意志」党はその闘いを蜂起—労働者権力樹立へ向け

貫として政治警察との闘いに勝利する非合法組織建設を述べている事を無視してきたのである。「何をなすべきか」一章、二章、三章は第四章の「経済主義者の手工業性と革命家の組織」を抜きに存在しえない事を知るべきであったのである。合法主義者共には非合法の「陰謀家集団」の重要性が理解できないのだ。大衆路線と軍事路線を堅持し、不拔の地下労働者党を作る事こそレーニン主義、否、共産主義運動の原則であるのだ。

七〇年七月七日の華青斗の告発が日本の「国家」のペルを引きさき、在日アジア人民、下層プロレタリアートの不屈の歴史を、革命的左翼がその大衆路線に刻印せねばならない事を教えてくれた。彼らの苦難の斗いに応えさねばならない。より深い大衆路線をとらねばならないのだ。それに応える事こそが武装大衆斗争を指導する「組織」に転化出来る道なのだ。より深い人民戦争を準備する道なのだ。大衆路線と軍事路線を結合せしめよ。

六月八派共斗の分裂は、一見、沖繩斗争への方針の違い—奮闘か返還粉砕か—のように見えながら本質的には、彼ら小ブル意識の、階級的煮つまりからの分裂に他ならないのだ。あいもかわらない「決戦」論の横行、実体のない大言壮語は、およそ主観的意図とは別個に、大衆の怒りの根源からますます組織を遠ざけているのだ。大衆の意識をくみ上げよう、そこにこそ、革命的軍事の原則が、レーニン主義の原則があるのだ。八武装大衆斗争を「三里塚」で確立せよ、今秋第二次強制収用を全国の労働者、学生の力で反対同盟と共に阻止し抜こう。V

「計画された戦術」として立てることなく、非系統的、自然発生的テロリズムに集中させ、一八八一年アレキサンダー二世暗殺後、弾圧に耐え切れず自己崩壊して行くのだ。断じてそうであってはならない。プロレタリアートの軍事斗争を正しく行う為には政治警察に耐えられる強固な政治に支えられた組織をもたねばならない。党の思想は一方では途方もない非実践家を作り出すのだ。革命家を鍛えあげる場を一般的にブルジョア社会にゆだねてしまっているのだ。そのような思想からは新しい実は絶対につみとれない。軍事はごく当然の事ながら、革命的政治の一環としてしか機能出来ない。もしもある軍事的行為が成功するのなら、それは必ず人民の大衆的闘いの深さに起因する事を知らねばならない。大衆斗争と無縁な「軍事」はその組織に腐敗と墮落を持ちこむ。軍事のみをとりあげ手放して称賛する事の危険はじゅうじゅう知らねばならない。レーニンは「労働者大衆はロシアの生活の醜悪事によって大いに興奮しているのだが、こういう言い方ができるとすれば、人民の興奮の水滴と細流をことごとく寄せ集め、集中する能力が、われわれにないのである。そうした水滴と細流は、われわれが想像したり考えたりしているよりもはかりしれないほど大量にロシアの生活からしたり落ちるのだが、しかし、それらはまさに単一の巨大な流れに結合されなければならないのである。中略—ところがテロルへの呼びかけも、経済斗争そのものに政治性を付与せよという呼びかけも、ロシアの革命家のもつとも緊急の義務—全面的な政治的煽動の遂行を組織すること—を回避する別々の形式である」（『何をなすべきか』）と、鋭くテロリズムへの批判を行っている。が残念な事にレーニン組織論への我々の生半可なこれまでの理解は、彼が

士は生きてゐる

神は愛だといふが、神の愛とは何か。

「神はそのひとり子を賜つたほどに、この世を愛して下さった。」（ヨハネ伝三の一六）といふヨハネの言葉に、よくいいつくされているが、その血肉化したものが十字架上のキリストである。刑死のキリストを十字架に仰ぐ以外に、「神の愛」を知るよしもない。神が愛であることは、十字架のキリストに万全がつくされている。そして神の愛は神の義である。

農民から土地を強権をもって奪ひ、その生命まで傷つけんとする国家権力に見るものは、神の愛と神の義に背く悪霊の支配権力であり、キリストを十字架にかけて殺したのも、またこれに外ならない。キリスト者は、この悪霊の支配権力に対して、たとえ血を流しても、徹底抗戦をもって応えなければならぬ。そこに私は「神の義」を覚える。ここに私の神の實在があり、私の三里塚闘争があったのである。

神の義とその愛は私の存在の一部であり、神を失って私の一切は無、——神に在って私のすべては有である。従って土地も農民も神の愛から一步も出ることができない。つまり、私の一切が神の手中に在る。しかし、このことは、抑圧者の手中に在る、^{とり}神とは全く違つて、神の愛とその義の中に生かされている。「再び罪の奴隷の軛に^くつな^ぎがれることのない」、悪霊の支配権力から解放された存在だといふことである。

だが、形而上学的な神観念には何らの力もない。福音の偉力としての、神の實在性に問題があるのである。「言は神と共にあった。」

そして、「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。」というヨハネの受肉の真理に、聖書の教える独自の福音がある。もし、言と肉体の分離したキリスト教を伝える者があるとすればそれは禍なるかなである。

受肉の真理（キリスト）そのものに、生きて神の存在を見るのであって、人間的な何ものにも神を見ることはできない。

私は、このテーマを考えるに当り、まずイエス・キリストの神を中心とする三者の関連性を考え、それを三里塚闘争の中に捉え返し、そこからひとつの方向性を発見していきたいと思ふ。

土地とは何か

土地とは何か。元来、土地は人的生産によらず、天地創造に関わる神の被造物である。恩恵としての天然資源である。いかなる権力によっても、生殺予奪を絶対に許さない、神の所有物であり、厳密にいつて土地は傲慢な人的権限の及ぶべき場所ではないのである。土地は政権野望のための独占所有物ではなく、従って、いかなる国家権力の要請といえども、農民の農地収奪は絶対に許されてはならない。

農民は土地をもって己れの生命の源とする。生きものとしての不即不離の土地である。農民から土地を奪ったら、後に何が残るか。

これは今日、日本の各地方で土地を補償金に替えていった多くの農民のその後の実態を探ることによって明白となる。一挙に巨額を補償金が舞い込んだとしても、何人の農民にその補償金によって、豊かな生活がもたされたか。

農民にとっての土地問題は、深刻なもので、特に祖先伝来の農地、

粒々辛苦の開拓農地ともなれば、その土着性からくる土に対する執着は格別だ。これは、土に生まれ生きんとする農民のみが知ることでできる苦業である。農民の土地は、農民の心を離れて存在しない。この土地を農民から生木を剥すように収奪せんとする、国家権力に対する抗争心は、農民ばかりでなく、誰しも覚えなければならぬ当然の義務と責任である。

農民に対してというよりも、支配階級の一方的な政権の野望遂行のために、造物主の創造にかかるとその被造物を、わがもの顔に自由に籠絡せんとする横暴な力の行使とその傲慢性には、心からの憤りを禁じ得ないのである。農民はもとよりこれがため、自然発生的ではあるが、「農地死守」を掲げて闘い始めたのである。土地は土地そのものに意義があるのでなく、土地に人間の心が投入され、土地と人間が血肉化した次元で、始めて「農地」としての絶大な価値が生じるのである。農民は土に全生命を托し、その土の中の生死を経て今日まで来た。ここに在る農民の土着性とは素朴な土地に対する愛着心というよりも、農民が土から煥発された絶対なる思想性である。農民の思想性の伝えるものは、土と農民の血の通った不可分さ、そこで見られる、権力に対する不屈の不服従精神である。六十年の苦闘の農民生活を支えてきたものは、ラディカルな不服従精神とその血肉であった。それは農民意識の変革の中で土と一体化した農民の絶対なる思想性から出てきたものであった。この点を明確にしないと、土地とは何か、そして土地と農民との不可分性とは何かが不明のままに終ってしまう。

働く農民にとっての土地は、土地ブローカーのように土地を転売して利益をむさぼらんとする営利主義の土地でない。これ以上の土地

の冒険はない。土に全生命を托し、全家族の労力と全財源を土地に投入し、農民は一年の収穫を得る。これは自然と労働の法悦境であり、宗教的信仰の世界でもある。どこにこのような自然と労働の血肉化した法悦の世界を見ることが出来るだろうか。土地とは働く農民の心の中に捉えられた生き物であって、決して無機物的な物質ではない。土は絶えず働く農民とともに生き、ともに呼吸を続けている生物である。だから土地をコンクリートの下敷化することは、農民を生き埋めにするのである。農民もまた不断に土との呼応の中に、土とともに生きてきたのである。

戸村一作『神・土地・農民』より

一九六六年六月の政府決定以来、三里塚の農民は既に六年にもわたる反対運動を展開している。帝國主義的膨張に見合った政府の国家政策として三里塚「新東京国際空港」建設はあるのだ。

ベトナム侵略戦争は、悪化していた米帝の国際収支をますます悪化させ、政治的、経済的戦略転換が要求されていたのである。（ニクソンドクトリン・ニクソン訪中・ドルの金交換一時停止と輸入課徴金の設置）そうしたアメリカの危機は日帝に、あらゆる犠牲をしいても、アジア侵略・反革命の防衛をしなければならぬさせたのだ。周回条件に対する一部アルジョアジの動揺もかかわらず、先日、日「韓」閣僚会議での日本の「韓国」への多大な政府援助は如実にこの事を示している。

三里塚「新東京国際空港」建設もこうしたアジア侵略反革命への経済的軍事的要としてある。こうした政府のゴリ押し空港建設に対して、農民の自然発生的な「農地死守」のスローガンのもと、斗

いは開始されたのである。政府と空港公団の露骨な空港建設計画はますます、農民を斗う農民へと成長させていったのである。測量阻止、ボーリング打ち阻止と言った初期の闘いは、政府による土地収用法の適用により農民のな意識を脱皮せしめ、土地を失っても闘い抜ける農民へと帝國主義に対決する姿勢をより鮮明にさせたのだ。公団のあらゆる手管による、反対同盟への攻撃は、かなりの脱落者を出さしめたが、がそれ故に皮肉にも反対同盟は強固になり三里塚斗争を永続的な闘いに転化させつつあるのだ。

農民の闘いは三里塚の地だけではない、減反政策、米備蓄置きを基調にした政府資本家の農民切り捨て政策は、北富士、日本原、長沼など全国各地で闘いを組織化させている。戦後の土地「改革」以後押さえられ、保守の地盤として存在した農村は、戦後日帝の復興・工業の爆発的な発展の中で犠牲を強いられた農村は、米備蓄置き、グレイプ・フルーツ等農産物の自由化は明らかに、日本のブルジョアジーの利益を優先にした政府の意図を表わしたもので以外の何ものでもない。農民への政府資本家の圧迫は、ますます農民を出かぎに追いやり、出かせぎなくして食っていけないさせている。日本の農村は、各地に過疎現象を生み出し、都市での住宅難とはうらはらに年寄と子供だけしかいないいきびしい現実が直面させられている。

そうであるが故に、農民の闘いは、一たん爆発するや、保守的な寄合組織を逆手に取り、家ぐるみ、村ぐるみの闘いとして頑強なものに転化するのだ。少年行動隊の諸君は同盟休校してまで闘い抜くのである。（谷中村の闘い然り、秩父蜂起然り。）

一歩一歩確実な前進が六年間かけて勝ち取られて来た。第二次強制収用をひかえ、厳しい訓練にかけられている事は、反対同盟こそ

一番よく知っているに違いない。我々は、三里塚の闘いを賛美してやまない。賛美することは自らの闘いを陰べいする為ではない。我々は、新しい路線を三里塚の闘いの中で身につける事だと確信している。

〈三里塚での我々の闘い〉

①秋への闘いの為、現闘体制の必要を痛感した我々は、五月現闘を確立し、全京都学生連合会の結成の一月前、今年の五月、三里塚労字連絡会議の一員として、援農や穴堀りやパトロールを開始したのである。六月、秋の闘いの一大拠点取香に団結小屋を打ち建て、三里塚現闘体制を確立したのである。周辺部落への援農、駒井野、取香のザンゴウ堀りなどで秋の第二次強制収用に備える一方、さし迫った一・二番地点、農民放送塔撤去実力阻止に向け、沖繩返還協定調印阻止斗争を闘いつつ現地―首都―関西での三里塚運集会を勝ち取り結集体制の確立をはかって来たのである。七月上旬千葉地裁が不当に一・二番地点農民放送塔の撤去を認めるや否や、我々は全力を挙げ、夏休みと言った困難さはねのけ、三里塚にかけつけたのである。七月二十六日、早朝、成田から輸送道路で三里塚に向う機動隊への火炎ビン、爆弾斗争によって闘いは開始された。爆弾に恐怖した警察はその道路をすこすこ引き下がった。それ故後方からの敵の攻撃を我々は気にかけることなく、京学連百五十の赤ヘルは三里塚労字連絡会議三百の中心となり、青年行動隊と共に公団機動隊への攻撃を開始したのである。赤ヘル突撃隊の圧倒的な攻勢に機動隊は自らが身を守るために掘った溝にあわれにも転落し、火ダルマになり、竹ヤリにより傷だらけになりつつ、一目散に退却したの

である。雨の強く降る中を、三里塚における我々の赤ヘル部隊は、中核、四トロ二百のひよわな戦闘力とは比べものにならない強さを誇り、穴にこもった反対同盟の必死の闘いに呼応し唯一二七、二八日も石つぶて、火炎ビン、棍棒、竹槍で攻撃を展開したのである。共産党を訓話的に修正したに過ぎない革マルは、何を血まよったのか二六日、三里塚に登場した。アリバイ斗争をきめこんでいる革マル派は三百もの隊列にかかわらず機動隊が前進するや否や一目散に逃げ出すしまつなのである。そして二七日、二八日は登場しないと言った徹底した日和味主義を露呈したのである。我々の思想をかけた闘いは、六〇年代左翼を乗りこえる「小さな火花」である事を全国の労働者、学生、三里塚の農民に示したのである。

②爆弾斗争を断固支持せよ、更に発展させよ、六月十七日、七月十日、七月二十六日の爆弾斗争は警察を恐怖のどん底におとし込めた。三里塚での一連の爆弾斗争は政府―公団―警察の横暴を弾圧への人民の回答なのである。「爆弾」は機動隊政治を粉砕し、より高度な軍事戦を可能にする。「爆弾」を共産主義運動の中で有効に使用しさえすれば決して自然発生的なテロリズムなどでなく革命運動への有効な武器になるのだ。政治警察の断崖をはねかえし、爆弾斗争を断固として支持し、三里塚斗争を中心とした今秋政治斗争と結合させ、更に発展させよう。

反彈圧委員会アピール

- ・一・二番地点、農民放送塔強制撤去実力阻止斗争に対する政府―権力の極悪非道な大弾圧―毒ガス使用・テロリンチ・大量逮捕等―弾劾！
- ・起訴・長期拘留の同志奪還のため、カンパ集中を！
- ・政治警察との闘いの為の思想的・組織的準備を開始せよ！

京大教養部戦線・全学戦線反彈圧委員会

七月二六日早朝より開始された駒井野一・二番地点農民放送塔撤去実力阻止斗争に対してかけられた国家権力―機動隊の弾圧は狂気に似たものであった。我々の高い思想性と固い組織性をもった闘いに恐怖した機動隊は、楯の水平打ちは勿論のこと、六月以降呼吸器

官に対する毒性が問題となつている「催涙」ガスを乱射し、部隊に直撃弾をあげせた。二六、二七両日で逮捕者は二八九名に登り、重傷者は四〇〇名を越えている。逮捕者はほとんど逮捕時あるいは逮捕後のテロリンチによって自傷しており、機動隊は更に、一旦逮捕したにもかかわらず、内臓破裂や背椎骨折等の命に危険があると思われる重傷者を置き去りにする卑劣なことまで行つた。我々の部隊の中でも、一名が二週間の入院を要するに重傷を負つた他ほぼ全員が機動隊員による投石、ガス弾によって負傷し、我々の医療突撃隊あるいは野戦病院で手当を受けたのだ。特にガス弾による皮膚炎は今なお多くの学友を苦しめている。このように斗争の度毎にエスカレートする機動隊の兇暴な弾圧に我々は満身の怒りで抗議する。権力は我々の部隊から集中的に二〇名の同志を逮捕し、その全員を拘留延長した（全体では二三三名、拘留率は八割を越える）。そしてその全員を接見禁止処分にし、我々の差入れ面会活動を妨害した上で、X名を起訴するといふ弾圧をかけてきた。少年鑑別所に移された者を含め、今なおX名の学友が拘留されている。今や公安事件において裁判所は中立の幻想性を棄て去り、警察、検察と共に治安弾圧機関として「有能な」役割りを担っている。拘留の長期化の

みならず、増々つり上げられる保釈金は、起訴後の処遇が階級的報復であることを示している。

政治警察は、戦時時の弾圧と起訴者への理不尽な処遇に加え、八月七日朝には取香の団結小屋を強制捜査し、物干場から竹ざおを持ち去ったのをはじめ、数十点の品を不当に持ち去ったのだ。

今回の弾圧は、第一に、七二年沖繩返還を軸に国内外の反革命体制の再編強化を行わんとする日帝ブルジョアジーが、アジアへ向け侵略反革命の一大拠点「新東京国際空港」の建設を焦り、反対同盟と支援団体に決定的打撃を加えることによつて、「第二次執行はしなくてもよい」というような状況をつくらんとしたものである。第二には、三月の京大新病棟移転力阻止斗争において我々が「全共斗運動以後、大衆的実力斗争は不可能になった」などという日和見主義者の流した「神話」を打ち破ったことを突破口として、四ノ二八沖繩斗争の昂揚から更に五ノ一九笹間石段下武装制圧斗争へと進撃し、日本階級斗争の新たなサイクルが開始されてきた、そして三里塚において、それが今一度飛躍を遂げようとしていることに恐怖した国家権力が、これをなんとか圧殺せんとしたものであった。特にわが戦線に対しては、七ノ一〇ガード会社爆破斗争の翌日、朝日新聞の「過激三派」と呼ばれる赤軍派、京浜安保共斗、京大戦線もきている」とか、八ノ七付毎日新聞夕刊の成田署爆破斗争と併列した「京大C戦線団結小屋捜査」の記事等に示されるように、権力ジャーナリズム一体となつて攻撃・弾圧がかけられている。

しかし、これらの権力の意図は木端微塵に粉碎された。公団は、我々の不退転の闘いの前に「工事中止宣言」なるペテンを行なわざ

るを得なくなつた。勿論我々の同志に対する恫喝、懐柔、長時間の取調べも、完全黙秘の前に一切用をなさなかつた。残つた部隊は、これまでの闘争の総括を真剣に行ひ、着々と戦線を打ち固め、今秋期の沖繩入管斗争、三里塚第二次執行粉碎斗争へ向け闘志を燃している。

全ての同志諸君、読者諸君、更なる闘いの前進と長期留留者の奪還のため、絶大なカンパを寄せられることを心より訴える。

送り先

京都市左京区東竹尾町京大熊野寮B-130七
京大教養部戦線一全学戦線反弾圧委員宛

TEL 〇七五-七七一-六二九一

三里塚はふたたび戦いに立つ!!

地下壕破壊の全容と私共の決意

三里塚・芝山の周辺住民のすべてのみなさん、近隣県民のみなさん、全国民のみなさん!

今日も駒井野にしっかりと立ち三里塚・芝山農民の決戦への執念に燃えて全国のみなさんに放送を続けている三里塚農民放送塔より、空港公団の三里塚地下壕破壊作業の全容の報告、ならびに強制代執

行阻止の戦いを貫く不滅の覇気を改めて申し述べると同時に、ふたたび決戦を目前に控えてここに我が闘魂の変わらざる決意を示し、準備を整え、来るべき戦いの勝利を日本農民の義に基づいて成就せんとするものであります。

駒井野の地下壕破壊! この農民殺しを許せるか

三月二五日、午前五時半、機動隊四七〇〇は午前三時から急を知つた反対同盟七〇〇人にむかつて襲いかかってきました。すでに私も少年行動隊・婦人行動隊・青年行動隊の多くの者が地下壕に坐りこみ、戦闘体制に突入してました。残りの者はすべて地下壕の入口に固いスクラムを組み一騎当千の決意をみながら地下壕の守りについておりました。

思えば、駒井野六カ所に地下壕を掘り始め、坐りこみ闘争に入つて七十七日目、強制代執行の開始から三十一日目の戦いの朝のことでした。

この時すでに駒井野一帯は機動隊が包囲し、周辺住民の一切の支援を断ち、村々への往来さえ実力で妨害する有様です。駒井野の団結小屋や農民放送塔の下の小屋にまで家宅捜査と称して機動隊が押し入りました。

駒井野第三地点。機動隊に対して、「どのような理由で私たちの地下壕をつぶすのか、人を殺そうとしているのか」と声の限り問いただす少年たちを手当り次第にゴボウ抜きしたあと、壕の入口の柱

にしがみついて抗議する婦人行動隊員を数人がかりでかつぎ出し、突然パワッシュヨベルがうなりをあげブルドーザーは壕の入口めがけて突進していききました。中には三十余名の老人や子供たちがぎっしりとお入っているのです。

巨大な鉄の爪は人間や土の区別なく地下壕の真上に振り下されてきます。壕はギリギリと音を立ててゆがみ土が大きく崩れてきます。私も太い杭木が一度に崩れかかったとき「死ぬ」と思いました。土を頭からかぶり、杭木の間にはさみこまれた少年は眼をつぶりじつと耐えぬいています。壕の出口に陣取るおっかさんたちは「作業をやめる」と公団や機動隊に土を投げ警告を続けますが、ブルもユニボも鋭い鉄の爪を休めるどころか、容赦なく襲いかけてきます。入口近くにいた数人は土や杭木といっしょに鉄の爪ではぎ取られていきました。杭木にはさまれている少年も土に埋まった老人も機動隊やガードマンに引きずり出されました。三六名の反対同盟の農民と数人の学生さんが生埋め同然ではりだされるまでの間、実に九時間余りがついやされました。

第四地点には二十人の反対同盟員と支援のかたが三人入っていました。特にこの壕は地盤が軟弱だったため掘るときから私も最も苦勞をしていました。したがってこの壕は他の三地点と異なり落盤はきわめて大きく、ユニボの鉄の爪が壕にいくこみ、ブルが壕に馬のりになったときには入口から数メートルの所までの坑道が完全に閉ざされましたが、人命に別状が無かつたのはまったく特別の避難壕があつたからなのです。この落盤を見たユニボの運転手は「このままやれば人を殺す」と作業を途中でやめて機械から下りてしまいましたが、公団職員は強引に作業の再開を命じたのです。

さすが念入りの壕も八時間余りで崩され、最後に残った反対同盟の農民は出口で公団職員らしき者数名のリンチを受け、全身打撲、失神状態のまま機動隊の包囲網の外にはより出されたのです。

第六地点は、第三・第四地点の報告よりもいつそり陰惨な状態であり、公団の本心をどの地点よりも明らかにさらけ出してあります。第六地点は立て穴式になっており、地下数メートル下りたところで網の目のように横穴がはりめぐらされました。地下道の総延長五十メートル余り、空気が薄く、特に換気孔を二ヶ所設けてあります。公団はまず、この壕の真上にユンボ、ブルを導入し、全体を真一文字に縦断するようユンボの爪を入れました。同じ頃、換気孔が引きぬかれたのです。

壕の中のロソクは三時間ほどのちに消えました。いくらユンボの爪が鋭く機械的であろうと地下数メートルに届くには大変な時間がかかるものです。正午頃壕内ではすでに数ヶ所で落盤が発生、ユンボの爪が壕の内に食い入ったのは午後二時すぎ、作業開始以来すでに九時間が過ぎています。壕は二つに分断されました。同盟員はお互いにはげましあいながらハンドスピカーを使って逐一壕内の危険な状態を外に知らせ、公団の殺人行為に抗議する。だが公団は「作業は絶対に止めません。非常に危険な状態です、どんなことがあっても作業は続行致します。すぐに出て来なさい」と威嚇高に繰り返すのです。この悪慮非道。下半身がどんどん落土の中に埋まる状態となり、退路は一切断られ、すでに六名と胸のあたりまで完全に埋まってしまっていて身動きも出来ません。もう一つ頭上で落盤が起これば……誰の心にも恐怖がいきなりなして襲ってきます。頭上にはすでに十一時間以上ブルやユンボがうなり地ひびきを立てて

ています。

約十四時間かかって切り裂かれたいくつもの横腹から機動隊の一斉攻撃を受け、三一日ぶりに外気を吸うよう強制されましたが、その内十人はそのまま獄中に連行され、反対同盟の内田行動隊長は、第六地点の最後の一人として検挙されてゆきました。

第一地点は午後二時過ぎ、開始されました。夜九時になっても壕は地中深く続々といました。「人命救助」しなればならないはずの公団はいよいよユンボを荒く動かします。鉄の爪は壕からさし出される農民の手によって、はっしと阻止される。サーチライトの強い光が穴の奥深く差しこまれ武装した機動隊が突入してきますが、穴の奥深く戦いは際限なく勇敢に展開された後退、ユンボは再び鉄の手を振りおとします。

第一地点の地下壕は奥行きは深く、同盟員のなかでもその大地下壕の極めて巧妙な構造を詳しく知る者は少ないのです。八時間後、十数メートルほりすんだところで午後十時近く、公団は遂に「人命救助作業」をあきらめ、「救助義務」を自ら放棄したのです。もちろん機動隊も一語に退却しました。壕の二つの入口にはごていねいにも厚さ三センチの板が強固な柱に打ちつけられ中に農民がいるにもかかわらず出入不可能に行ってしまったのです。公団のいり「人命救助」のほんばらにはつきりしたてはありませんか。しかも、機動隊、ガードマンはその公団のあからさまな傭兵となり巨大な暴力集団となり果て法を犯して民事の問題に介入し占有権を主張する農民を検挙したのです。死をも眼前にした戦いの十七年間、だが権力者たちは私どもの農民魂をうちほろぼすことはできませんでした。

近隣県民のすべてのみなさん、あの二月二日から三月八日まで
の公団・友納県知事の言語道断の悪慮非道はもとより、この三月
二五日の三里塚地獄図は何をもがたっているのでしょうか？

我々は、日本農民としてこんなことを許せない。

三里塚闘争とは日本農民の誇りや生活や未来などの一切をかけた
戦いの執念城なのだ、という理由がこの報告の中からいくらかでも
感じとっていただければ幸甚です。

今、三里塚では、再び我等の手によって決戦の が築かれてゆか
んとしています。

すでに、銚子・鹿島・北浦村・高谷川の周辺、近隣各県の住民が
住民運動を果敢に展開して為政者どもを震憾させている情勢にあり、
東北の女川の漁民もまた「三里塚の農婦のごとく、我が浜を死守せ
ん」と戦っているに聞かれています。我が三里塚芝山連合空港反対
同盟の農民軍はふたたび決戦に立ちむかひにあって意を決し、戦
闘準備に入りました。

全国・全県民・全日本農民の力とともに我々は勝利を期し一切
の妥協を排して戦い続けます。

第一次強制代執行の戦いに当り、全国からの支援と援軍の派遣・
監視体制に心底より感謝申し上げます。

三里塚農民放送塔より

一九七一年四月一〇日

三里塚・芝山連合空港反対同盟

連絡先 成田市天神降現地闘争本部

電話 〇四七六一三二八二五三

今秋沖繩返還協定批准阻止！ 佐藤政府を倒せ！

京都大学教養部戦線・全学戦線

一、はじめに

五・一九沖繩全島ゼネスト連帯京都祇園石
段下武装制圧斗争六・一七返還協定東京
調印実力阻止斗争が切り開いた新たな階級
斗争の地平

五月一九日沖繩の労働者人民は歴史的全島ゼネストを貫徹した。これに応え、「本土」では六九年以降の階級戦線のなしくずしの後退を突破すべく果敢な実力斗争が展開された。その中で、我が京大教養部戦線は京大教養部において代々木II民青の反動的な祖國復帰路線を粉砕してバリケードストライキを勝ち取り、このストライキを背景に全京都学生連合会に結集する同志社大全学斗、立命館文学部戦線、洛北戦線の学友諸君と共に断固として京都における祇園石段下武装制圧斗争を領導貫徹し抜いた。この斗いは我がが昨秋以来一貫して全共斗運動の最良の成果を守り抜き七〇年代の革命的な地平を切り開かんと続けてきた実践活動、とりわけ舞鶴軍港解体斗争

一京大病院新病棟移転実力阻止斗争を斗い抜く中で勝ち取ってきた政治的組織的成果の上にこそ実現を見たのであった。この五・一九沖繩全島ゼネスト連帯京都祇園石段下武装制圧斗争でその端緒をつかんだ「本土」沖繩人民の「血の団結」は六月返還協定東京調印実力阻止斗争の過程でさらに確実なきずなとなってゆくのであった。五・一九六・一七に渡る「本土」沖繩における一連の暴力斗争の実現は人民の側にも帝國主義者の側にも日本階級斗争がさらに非和解的段階に突入した事を宣言した。過渡期世界の構造に規定されつつも帝國主義ブルジョアジーの歴史的な延命をのみ見すえて打ち立てられた「戦後支配体制」は、インドシナ人民を先頭とする全世界人民の英雄的な斗いの前に根底的動揺を見せ、今やさらに再編を余義なくされている。

このような歴史の転換点にこそ我々の斗いが存在する事を確認しなければならぬ。沖繩人民の斗いは「戦後支配体制」の矛盾を鋭く反映して「祖國復帰運動」として「復帰協」を中心に、比類なき島ぐるみの斗いとして六〇年代においては貫徹された。この斗いの戦斗的エネルギーは「戦後支配体制」の確立が中国革命の勝利と朝鮮の階級斗争の前進を前に米帝と日本独占資本の利益をのみ見すえ

てなされたがゆえに、これとの対決の歴史を経過することにより、七〇年代に入り日米帝の支配の再編と沖繩人民の民族国家への幻想の丸め込みを突き破り、さらには屋良を中心とした既成指導部の腐敗をのりこえて大きく突き進んでいるのだ。六九年二・四ゼネストの空中分解の混迷を踏みこえてコザー国頭―美里―へと続く一連の実力斗争は五・一九全島ゼネストに至り戦後の斗いの一つの極限へと登りつめていった。日米帝の侵略・反革命との鋭い衝突、同時に右翼―日思会や人民戦線派との対決これらを通して不断に眞の革命性（人民の根本的利益を貫き、人民を率いて進むのは誰なのか）

が問われている沖繩の斗いと、これまでの歴史を通じて分断され続けた「本土」の革命斗争との結合、それも具体的な連帯を勝ち取ってゆく橋頭堡とすることこそ五・一九六・一七に至る「本土」の斗いの意味であり、しかも、それは不断にプロレタリア国際主義の内実化を要求し、インドシナ革命戦争と連帯しそれを世界革命戦争へと飛躍させる環としての帝國主義心臓部における労働者人民の武装蜂起―労働者権力樹立を要請するものである。沖繩人民の「本土」階級斗争への不信は「反復帰」「返還粉砕」などの自然発生的な意識を残念ながら生み出している。しかし五・一九六・一七の斗いは「本土」沖繩人民の「血の団結」のみが現在の桎梏を突破できる事を示した。「プロレタリア国際主義と組織された暴力」この二〇

八羽田斗争の総括こそ日本階級斗争の進むべき道を示したものに他ならない。六九年秋の敗北は斗いの暴力性の息の根をとめたかに見えた。しかし人民の怒りは、斗いの非和解性は革命の暴力のあらしを雄々しく呼び起したのだ。

三里塚第一次強制収用阻止斗争五・一九六・一七返還協定調印

実力阻止斗争―三里塚一・二番地点農民放逐塔死守斗争と続く一連の暴力斗争の表現は日米帝の侵略反革命を打ちたく人民の斗いの政治的質がより高度に非和解的な斗いを要求しているものとして主体的にとらえなければならぬ。共産主義者は全世界人民のさらなる決起に遅れてはならぬ。「武器をとるべきではなかった」というブレハーフ流の立き言を並べる日和見主義者を粉砕して人民の斗いは突き進むであろうし、共産主義者は七〇年代の非和解的な斗いに応えてゆかねばならぬ。

我々は日本階級斗争が当面しているこのような試練に耐え抜き、蜂起―労働者権力樹立に向けた斗いの重要な一翼を荷りべく、今秋の三里塚第二次強制収用粉砕から沖繩返還協定批准実力阻止の斗いを断固として貫徹する決意である。全人民の偉大な総決起と、武装斗争を先頭とする非和解的な階級斗争の坩堝の中で佐藤政府を打倒して日帝の侵略反革命を打ち砕きアジア人民との革命的な団結をから取る歴史的な斗いに断固として進撃しようではないか！

以下、我々は(1)「七二年沖繩返還」の「戦後世界」における歴史的位置と(2)沖繩労働者人民の階級斗争の到達した地平と「本土」労働者人民のそれを明確する中から斗いの方向を指し示してゆきたい。

一、「七二年沖繩返還」は日米帝の反革命同盟の再編・強化―日帝による沖繩の侵略前線基地化としてあるのだ！

1、ニクソンは六九年、グアム島で声明を発表し、「世界の憲兵」

として米軍が世界中に常駐留するマクナマラ戦略から、七〇年アジア支配戦略として「アジア人の中で戦わせる」「肩がわり政策」を行なりニクソン・グアムドクトリン戦略への転換が確定された。すなわち、米軍の地上兵力はアジアから撤兵し、そうしてできたアジア支配の空隙をアジア人に肩がわりさせて埋め、とりわけ後進国民族解放勢力に対しては買収した民族ブルジョアを対置し、米帝自らは重要な軍事拠点の掌握と核兵器、空軍力を中心とする圧倒的な軍事力でいささかもアジア支配をゆるめまいとするものである。

こうした戦略が当然のことであるが「有事」の際の緊急の米軍部隊の投入を要求する。それゆえに米軍は、一昨年の春のフォーカス・レチナ作戦に続いて、三月三日から四日間にわたり「米・韓」合同機動空輸演習フリーダム・ホルト作戦を行なった。これは、アメリカ本土から大機動部隊（戦車や兵士等）を「韓国」に直接空輸するもので、アメリカ・ノースカロライナから輸送される第八二空輸師団の兵力が四六輸送機で、「韓国」軍がヘリで作戦地域に投入され、仮想敵を殲滅するというものであった。

「韓国」では在「韓」米軍の撤兵（七二年までに四・五万人のうち二万人）が進められ、これが六九年の借款・農産物無償援助の打ち切りとともに朴政権が驚きあわてふためいて、国内の反共治安体制の強化・日本からの巨額の借款・民間資本投下（馬山輸出貿易自由地域）の受け入れ、貿易の拡大をなせしめ、農村の破壊・官僚・ブルジョア階級の腐敗・墮落（今回の大統領選における不正選挙、そして国会議員選挙における買収・不正投票にもかゝらず、与党民主共和党が都市部を中心に、第一野党新民党に敗れているという事実もその一端を表わしている）を伴わざるを得ない「韓国」の「近代化」を生ぜしめている。（六九年には日本との貿易がアメリカとのそれを抜いて「韓国」との貿易第一位におどり出ている。）

七二年沖繩返還を、明確に以上のようなニクソン・グアムドクトリンの一端として我々は位置づける必要がある。六九年一月の日米共同声明以降、七〇年一月沖繩「国政参加」選挙、六月「返還」協定調印、七二年自衛隊の沖繩派兵という形で着々と準備されている。

在沖米軍は、あの沖繩人民の爆発的エネルギーの噴出をみたコザ人民の決起の翌日十二月二日、「米軍基地縮小、兵力削減計画」と、軍用者三千人の解雇を発表した。発表は自ら「ニクソン・グアムドクトリンにそのものであり……」と宣言し、「七一年六月三日までに、兵、家族五〇〇〇人を本国に引きあげ、軍用地四〇〇ヘクタールを解放する」と宣言した。しかし、米軍自身、今回の海兵隊基地縮小は「基地機能と訓練に縮小を加えることなく解放が可能となった」と認めているように、不要地返還であり、また海兵隊基地の削減は示されていない。現実に、フリーダム・ホルト作戦で見られたごとく、中継基地としての機能が重要視される中で、嘉手納基地等は増々強化されているのだ。（最近では、最新型偵察機SR71「米空軍戦略航空団の超音速偵察機」による定期的な中国本土の偵察飛行が、沖繩を拠点基地として行なわれている。）二十六日に明らかになった基地再編の計画によると、嘉手納基地のほか、普天間海兵航空隊基地第二兵九部、各地の訓練施設、弾薬貯蔵所などの主要基地はもろろん、完全返還を求めた那覇軍港も第二兵九部の運営を円滑にするという理由で返還されず、米軍の思いのままになるとともに返還される基地も、自衛隊が引継ぐ個所が大部分（那

覇市のホイール・エリア（米軍車両集結所）リーダーガイドなど三ヶ所）なのである。

また、昨年十二月二日には、横田、三沢基地からフロントム部隊をそれぞれ、沖繩、「韓国」へ移駐させるなどの在日米軍実戦兵力のほぼ全面的な削減計画が発表されている。そしてまた、ベトナムにおいては、「南」政府軍へのテコ入れ等による戦争の「ベトナム化」が、もくまれたが、「南」政府をはじめとする民族ブルジョア階級の政治的統合力の決定的な弱さ（反米・反チュウの学生デモラオス軍の相次ぐ脱走による「兵隊狩り」の強化等）は、みじめにもニクソン・グアムドクトリンを破産におとしこめている。

インドネシアに対する大巾な軍事援助もニクソン・グアムドクトリンの一端である。米帝は六六年以来の経済復興用の「平和的援助」から「軍事援助」への転換を決めた。（昨秋千三百万ドルの追加軍事援助、うち五百十萬ドルがインドネシア軍近代化にあてられる。）これは、米帝の反革命第二戦線のインドネシアへの設定であり、新たな反人民的策動にほかならない。（米帝はニクソン・グアムドクトリン戦略の実質化として「ポスト・ベトナム」政策として、これを行なわんとしているのである。インドシナ革命戦争の永続性と能动性に規定されて決して泥沼から足を引き抜く事は出来ないのではあるが、）

以上の様なマクナマラ戦略からニクソン・グアムドクトリン戦略への転換の本質的な背景は、帝国主義諸国、後進諸国、「労働者」国家群の併存する現代過渡期世界の特殊な構造に規定され、とりわけ一九四五年以来永続的に斗われている後進諸国民族解放斗争の能动性（インドシナ人民の闘い、パレスチナ人民の闘い、中南米人民の

闘い等）。詳しくは、「闘り意志」を参照）、その外的インパクトによるアメリカ国内の非和解的な階級斗争の激烈な昂揚（黒人低賃金労働者の反政府運動、叛乱が都市を中心に展開され、軍隊外では、反戦運動、革命運動が、帝国主義軍隊内部では兵士自身の反戦運動―叛乱とともに、マリファナが軍隊を動揺させている。そして、沖繩の反戦兵は、全軍労ストの支援に立ちあがっている。）に大きく規定された形で、世界統一市場の維持を各国帝国主義の当面の特殊利益に優先して不可欠の任務として持っている世界資本主義が、第一次帝国主義戦争の戦後処理（統一市場の崩壊―各国の金本位性からの離脱、ブロック経済、アワタルキー経済―ファシズム運動―各国帝国主義の倒壊の危機と戦後革命による新たな「労働者」国家群の誕生）を深刻に総括し、圧倒的なドルの優位性のもとに成立したIMF・ヤルタ体制によって、この任務にこたえようとしてきた訳であるが、(1)世界資本主義市場の統一性の復活過程が同時に帝国主義の内在的運動―不均等発展の貫徹過程であった事。即ち、各国資本主義の産業構造の平準化から市場をめぐる商品、資本競争を不可避に招来させた。(2)米帝を中心とした先進国内部における完全雇用政策等の階級緩和と政策が、「新植民地主義」の下、後進国に矛盾を蓄積したものにほかならず後進国において急激な階級構造の変化から、歴史的な反帝―反植民地斗争の経験に加えて、「民族解放斗争」の永続化、能動化をもたらした、逆に先進国の階級矛盾の原因ともなっていた事によりIMF・ヤルタ体制の破綻は不可避であった。

こうして六〇年代に「戦後世界」の崩壊をもたらしてゆくのであるが、これは帝国主義にとっては、反革命同盟の平和的再編を火急

の任務としたことにほかならなかつた。各国帝国主義は、その世界統一市場内部にますます矛盾をはらみつつも不漸に、しかも平和的に、反革命同盟の再編・強化を要請されているのである。

ニクソン・グアムドクトリンが以上の様な背景で登場してきたわけであるが、決してそれが容易に実質化・完成される事はなく開始当初から決定的な破綻を見せている。ニクソン・グアムドクトリンの実質化・完成がそもそもインドシナにおける勝利的展開に裏打ちされた米軍撤兵を前提とするにもかかわらず、インドシナ人民の英雄的な闘いの前に、ベトナム・カンボジア・ラオスというベトナム戦争のインドシナ全域への拡大という「あやまち」を犯し、自らを死へ追いやる泥沼へ両足を引っ込んでしまっている。

ニクソン訪中・ドルII金体制の事実上の放棄——国内非常事態宣言にみられる米帝の「歴史的転換」それも各国帝国主義をさしおいての独走した動きは、まさに、米帝のそして帝国主義支配体制の危機の深さを物語っている。ニクソン・グアムドクトリンの「精神」を貫徹する為の中ソ対立の利用あるいは各国帝国主義に対する圧力と米国内の反革命体制の強化も所詮はインドシナ——中国——朝鮮人民の革命戦争の前に敗北し、各国帝国主義の相互矛盾を深めてゆく構造を決して突破することはできないのである。

2 米帝がニクソン・グアムドクトリンで七〇年代を乗り切らんとしている中であって、日帝は何に活路を見い出さんとしているのか？ 米帝のアジア支配の空隙をぬって、着々と、独自の国家意志を貫徹（政治的、経済的支配の貫徹）すべくアジアに向けた侵略・反革命を推し進めようとしている。七二年「沖繩返還」はその一大メルク

エッソンの精油工場の埋立て、ガルフ石油基地建設中、アルミ精練のルコア社、「沖繩アルミ」(日軽金、昭電、住化、三菱化成、三井アルミの合弁)の進出)による沖繩の国民経済への組み込みを行なわんとしている。

ニクソン訪中発表以来急展開している「国連の中国代表権問題」において、日帝が「台湾」擁護に積極的に動いたのは決して偶然ではない。個別企業の利害をこえて七〇年代の日帝にとって、日米帝の反革命同盟——「韓」台反革命プロックの再編強化は死活問題なのである。この反革命体制を軸に日帝はアジア全域における独自の政治的・経済的野望を果さんとし、七二年沖繩の上からの国民統合によって、自らの国民経済に組み込むと同時に、自衛隊の沖繩派兵を通じて沖繩の侵略前線基地化をはからんとしているのである。我々はこの沖繩の「権力再編」の問題を見落すのは決定的にあやまりであると考える。

二、今や沖繩人民の闘いは一大転換点にきて

522

こうした日帝ブルジョアジーによる攻撃が着々と加えられている中で、沖繩人民の闘いは、未だ「赤旗と日の丸の並列による闘い」すなわち、民族——階級問題が一体として内包されている闘いなのである。しかしながら、コザ住民の決起、国頭村の米軍射撃演習実力阻止斗争、美里村における毒ガス移送実力阻止斗争、更には全軍労働者の大衆解雇に対するストライキ、とりわけ、今年二月、三月、

「マイル」として日帝のみならず、米帝、「韓国」、台湾にともなうアジアの反革命同盟の再編——強化の中心環として存在しているのだ。昨年六月の六〇〇名にものぼる陸海空自衛隊の広報関係者、音楽隊の派遣、沖繩出身の自衛隊員の帰郷作戦等によって、沖繩人民の反自衛隊感情をときほぐそうと着々と、七二年沖繩への自衛隊派兵（「沖繩防衛計画」——七二年中に三千二百人の陸海空自衛隊配備）に向けて準備をととのえていた。そして、それに伴って沖繩にある

米軍のナイキ、ホーク購入、リーダーサイト基地等の施設・区域の自衛隊への移管、こうした事前準備をなす中から、自衛隊の沖繩派兵を頂点とした日帝による沖繩の侵略前線基地化の策動が行なわれている。そして、それと同時に七二年「沖繩返還」をメドに沖繩の上からの国民統合を平和裡に推し進めんとしている。それは、まさしく基地撤去運動の解体をめざし、散漫であっても広く存在している沖繩人民の民族国家に対する幻想性を逆手にとった形で進められんとしており、その第一歩として、まさしく七〇年十一月の沖繩「国政参加」選挙があった。又、この間、発表されている沖繩復帰対策要綱でもみられる如く、教育行政制度に関する本土法の適用——すなわち、市町村教育委員の公選制から任命制への切替え、教公二法（地方教育区公務員法、教育公務員特例法）の適用——とそれと表裏一体となつた所の市町村教育区の廃止という形で基地撤去運動を担ってきた教職員会に対する弾圧、そして、諸々の「本土」の帝国主義的諸秩序（司法、裁判制度 etc）の導入を行ない国民統合を押し進めんとしている。

そして、又、もう一方においては、独占資本、特に、公企業の大規模な進出（東洋石油、琉球石油、琉球セメント、日石の合弁）、

四月のストライキそして、その中でのコザ市の米軍関係業者との実力衝突をも含めた形での対立、そして、未曾有の規模で闘い抜かれた五・一九セネストという一連の闘いの中で、六〇年代復帰協運動の分解を経て、今や沖繩における闘いが一大転換点に達しており、沖繩人民内部に急速な階級意識の分解をひきおこし階級斗争の激化を呼びおこしている事ははっきりと見る必要がある。（しかし、単純に七二年返還粉砕を叫ぶ反帝学評諸君は、現実の沖繩斗争とは縁のない超観念論者である。）

六〇年代における復帰協が「本土復帰」のための島ぐるみ組織として、自然発生的に依拠し、民族的な民族国家に対する幻想性を即自的に持った組織として登場してきた。それ故に、六〇年代初頭においては、沖繩における階級斗争の一定程度の推進を果たし、労働運動の再編を進め、六六年における教公二法阻止斗争、全軍労働一〇割年休斗争等といった闘いを進めてはきた。しかし、六九年二・四セネストの挫折——そしてその中で青年労働者、学生の既成指導部への不信がみなぎり、スト決行派の全軍労働、官公労等では、屋良琉球政府によるセネスト回避が、青年労働者に、弾圧としてはね返りつつあった。屋良「革新」政権が、沖繩人民の闘いによって、権力問題がつき出されんとするや、その闘いを民族的斗争の枠内へ押し込めようとする犯罪的な役割を果たしている事ははっきりと見ておく必要がある。この時点ですでに、復帰協内部において分解の契機が芽ばえている。

そして、六九年十一月における日米共同声明において「沖繩返還」が発表されるや、復帰協運動が分解せざるを得なかつたことは、おのずと明らかである。

六〇年代の復讐協運動から、その分解をみた現在、昨秋のコザ住民の決起、国頭村、美里村人民の闘いという一連の闘いは沖繩における階級斗争が現在、一大転換点にきている事を示している。そして、六〇年代のあの屋良を象徴とする沖繩の「革新」の運動は今や沖繩の階級斗争を、ブルジョア民主主義運動へと押し込め、更なる発展の桎梏とさえなっているのである。(美里村毒ガス移送実力阻止斗争、全軍労官公労斗争への琉球政府の対応を見よ)

戦後「労働者国家」群の新たな誕生に規定された形で世界資本主義が (1)世界統一市場の維持 (2)反革命同盟の平和的再編という二つを各国帝国主義の個別利害に優先して不可欠の任務として持っている事を見抜くならば、日米反革命同盟の再編・強化として七二年沖繩「返還」の平和的移行は日米両帝国主義にとって不可欠の任務である。(詳しくは第一章)それ故、コザ住民の決起、国頭村の闘い、美里村の闘いという一連の闘いが、いったん実力斗争・暴力斗争として展開されるや、一見、日帝ブルジョアジーの特殊利害にかなっている(基本的に米軍政打倒の質を持った闘いがあるという意味において)かの如くみえる闘いが、日米反革命同盟の平和的再編に真向から対決するものとしてあるが故に、日帝権力からの熾烈な弾圧がかけてくるのだ。その闘いは誰が支配者であり、誰が支配者になろうとしているのかという権力の問題を突きださざるをえなくなり、上からの国民統合と対決するものである。それゆえ、コザ住民の決起への騒乱罪の適用この矛盾にあえぐ日帝の強権発動であったが、これも、沖繩人民の闘いによって粉碎されるのだった。そして、また、全軍労大量解雇撤回ストライキにおいても、全軍労ビテ隊と基地関係業者・右翼団体との対立がエスカレートしている

んとする革命戦争に断固として連帯し、日米帝の反革命同盟の再編強化にさらなる反動的な人民的侵略・反革命体制の構築を打ち砕き、帝国主義心臓部における蜂起・労働者権力樹立の実現を通して求めなければならない。世界革命戦争の歴史的地平を切り開く事によって、現在の革命的な人民の任務を考える場合この蜂起・労働者権力樹立を実現する「計画された戦術」として「正しい情勢分析」を基礎にたてられるべきなのである。

既述のとおり、沖繩における帝国主義者による市民社会の統合様式と階級斗争の発展過程は「本土」におけるそれと明らかに異なっている。したがって、沖繩斗争における任務を考える場合に沖繩におけるプロレタリアートと「本土」のプロレタリアートを同一視し、全く同じ任務をかかげることは誤っている。われわれは沖繩のプロレタリアートと本土のプロレタリアートの任務の区別と連関を明らかにする中で沖繩斗争の位置を考えてゆきたい。

「プロレタリアートの歴史的行為とその行為過程における心理的意識内容との……論理的歴史的区別と連関」(ボル通)を明確にすることはマルクスレーニン主義の原則である。第二章において見えてきたように、現在沖繩における闘いは「赤旗と日の丸が併存する闘い」という事態に象徴的に見られるとおり、民族問題をはらんだ階級斗争の新たな局面を向えて大きく発展しつつある。たしかに、沖繩が戦後一貫して米軍政の支配下にあり、この圧政に対する民族的エネルギーとして沖繩人民の闘いは表現されてきた。しかし、沖繩におけるこのよりな闘いは、六〇年代においては能動的意義(沖繩返還)を反革命同盟の再編に当り不可欠とした一つの要因となるエネルギーを持った)を胎みつつも大きな試練に直面したのだ。現

き、三月二日より行なわれた全軍労四八時間ストにおいてはスト反対のコザ市の基地関係業者が琉球政府に押しかけ主席室に乱入するという事態の発生、ゲート前でビテ隊と業者・右翼団体の武力衝突がおこっている。さらに、全軍労は、第三波のストに当たって、武力衝突も辞さない意志をかちとっており、現実には、五・一九全島ゼネストの闘いで、右翼・日思会の襲撃を自らの暴力で粉碎した。この様に、「復帰」の一点で民族的に統合されんとしていた沖繩人民は、日本帝国主義の新たな支配者としての登場の開始を期に、諸階級の対立・分解と階級意識の急速な形成をかちとっており、階級斗争の激化の中で、復讐協運動は更なる分解を露呈している。

(屋良を頭目とする「革新」—人民戦線—政権がブルジョアジーの後押しをするものでしかないことは、権力の問題を突き出す質をもって、帝国主義の秩序的平和的再編—反革命同盟の再編強化—の枠を突破する実力斗争を展開する人民の闘いを「復帰」の一点で収約せんとすることであきらかだろ。コザ市長の集会・デモ禁止令・屋良の官公労ストに対する破壊etc)

三、沖繩斗争をめぐる革命的な人民の任務とは何か

第一章で詳しく展開してきたように「七二年沖繩返還」をめぐる日米帝の支配再編がまさに「戦後世界」総体の歴史的な転換であるがゆえに、沖繩斗争をめぐる「本土」—沖繩人民の闘いの方向性はインドシナ人民を最先頭とする全世界人民の過渡期世界総体を止揚せ

代過渡期世界における侵略—反革命体制は、先行的な帝国主義内部のプロレタリアートの階級斗争の圧殺を前提としており、とりわけ七〇年代における反革命同盟の再編強化—平和的にし切らんとする日米帝にとって「沖繩問題」の「平和的解決」は不可欠の任務である。

ここから沖繩における階級斗争の転換点たる現在の核心的問題点が次のように結論される。即ち、民族問題の側面を持ちつつ発展してきた闘いが現段階においてその意識内容をのり越えて、帝国主義ブルジョアジーの利害に非和解的に対決してゆく質に発展しつつある事を確認し(コザ住民の決起に対する騒乱罪適用を見よ)すでに屋良等に体现される「既成指導部」をのみこんで闘いをむしばもうとするブルジョア民族主義を粉碎して、さらに断固として闘いを押し進めインドシナにおいて英雄的に闘っている人民とともに日米帝のアジア支配を根底からゆるがすことができるか、あるいは日本帝国主義の上からの国民統合—先行的な階級斗争の圧殺攻撃に屈服し、日米帝の反革命同盟の再編強化—日帝によるアジア侵略前線基地化を許してしまうのかという先行的な階級攻防戦としてあることである。これは具体的な沖繩プロレタリアートの任務の面から見れば次の通りである。すなわち第一に「七二年返還」をめぐるブルジョアジーの攻撃の意図、誰が支配者であり、誰が支配者にならんとしているのか(この内容は既に第一章で展開した。)を、闘いを断固非和解的に進める中から明確にしること。この点をめぐって諸党派が、米軍基地が合理化強化されている事実のみをたよりに「米帝に従属」「ペテンの返還」等と混乱し、ブルジョア民族主義に一切太刀打ちできない状態に陥いる中で、沖繩人民の闘いは自然

発生的にはあれ、それをのり越えんとする部分を生み出している。第二に、第一で確認された権力再編の問題を踏えて、ブルジョアジーや既成指導部が闘いの民族主義的集約―解体を自論んでいる事の反動性を明らかに確認し、それをのりこえて闘いを押し進めんとする労働者人民の基地撤去、米軍政打倒、自衛隊派兵阻止を軸に日米帝の反革命同盟の再編強化―日帝による沖繩のアジア侵略前線基地化のたぐらみを打ち砕いてゆくことである。根底的な階級斗争の展開が進んできている沖繩においては「本土」階級斗争への不信も手伝って「返還粉砕」の自然発生的スローガンが一部出ているが、一貫して日米独占ブルジョアジーの利益のみを見すえて左右されてきた沖繩の歴史と労働者人民の意識の展開を見ならば民族的エネルギーを軽視する事は決定的に誤りに落入るし、同時に沖繩斗争は、国際主義の問題、とりわけ後進国階級斗争、「本土」階級斗争と切り離しては一步たりとも前進しないのである。「本土」においては返還協定批准―関連法案国会一上程―七二年自衛隊派兵―四次防開始自衛隊の帝国主義隊としての完成へと続く一連の日本ブルジョアジーの政治過程の進行は「中国問題」、「円切り上げ問題」を伴ないブルジョアジー内部までからめて動揺を不可避としている。この政治情勢の煮つくり中でこそ五・一九以来、「血の団結」を勝ちとり始めた「本土」―沖繩の階級斗争の新天地をさらに切り開いてゆく条件が存在する。日帝の七〇年代侵略反革命の路線の危機は具体的には佐藤政府の危機として現象するであろうし、今秋期三里塚斗争を突破口に沖繩返還協定国会批准を断固阻止してゆく一大政治斗争の大爆発の中から佐藤内閣を打倒し日帝の侵略―反革命を打ちくたしてゆく事こそ今秋期「本土」において問われている第一の任務な

のである。そして、第二の任務としてまさに具体的に日帝が沖繩へ自衛隊を派兵してアジア侵略前線基地として使用を開始する七二年には自衛隊の派兵を絶対に阻止する闘いを組織しなければならないのだ。この一連の闘いはインドシナ革命戦争が形づくると世界的な規模での帝国主義支配体制打倒の闘いの地平と結合し、いや、結合せざるを得ない闘いとして帝国主義心臓部の労働者人民の偉大な決起の突破口となるものである。六七年一〇・八羽田斗争以来「プロレタリア国際主義と組織された暴力」を見すえて一大飛躍を期してきた日本階級斗争は、今では、更に徹底した武装斗争を要求する政治的高みに到達している。この政治的地平を守り抜き「本土」―沖繩の更に強固な団結を形成する中から日帝の侵略反革命を打ち砕いてインドシナ革命戦争と連帯を勝ちとってゆく闘いは一切の日和見主義者をふるい落してゆくだろうが、この試練になんとしても耐え抜いてゆかねばならないのだ。

四、沖繩斗争をめぐる諸党派の混乱

これまでの論述の中で、諸党派がいかに現代帝国主義の攻撃に対して、無知であるか、そして、その事が日米帝の七〇年代の戦略に対して、無対応を生み出し、実践的に屈服しているかが明らかになつたと思うが、以下、諸党派の「沖繩斗争論」を逐一、批判してゆきたい。

「民族共産党」として七〇年代に突入するや、ますます、その反動性を明らかにしてきたのが、代々木「共産党」である。彼らは、ますます反動化、重国主義化を強め、帝国主義として復活する傾

向を強めながら、一方では、ますます米帝に従属を深めている。」という、主観的な「対米従属論」をふりかざして「植民地革命」よろしく、図式的に革命の段階を分割し、革命の諸段階の政治的課題の解決と革命を遂行する階級規定を直対応させるといふ、反ファッシ統一戦線（一九三五年コミンテルン七回大会）を一層、反動的にも「自主独立」という一國的視野であってはめて、人民の目をあざむき、帝国主義ブルジョアジーの人民に対する攻撃を補完しているのだ。彼らは「七二年返還」を「沖繩の人々が勝ち取った」ものとして、「屋良」等に代表される「復帰協運動」のもっとも民族主義的な部分を全面賛美して、沖繩プロレタリアートの闘いが明確な階級的視点を要求している事に対し、反動的にも、帝国主義ブルジョアジーの上からの国民統合―「国政参加」選挙に積極的に加担する事により、これを狂殺するのにかしたのだ。「本土全体の沖繩化」といふ表現は、恣意的に「沖繩七二年返還」の権力再編の内容を隠蔽したものには他ならないし、沖繩プロレタリアートの闘いを「沖繩の人々」といふ表現でねじ巻いているのだ。彼らは、全軍労ストに右翼基地関係業者がナグリこんでいる事をいかなる詭弁で「説明」するのだろうか。

もっとも、混乱し右往左往しているのが中核派―反戦会議の諸君である。彼らの現代帝国主義に対する無知は大きな混乱をもたらしている。「アメリカの沖繩支配と本質的に不可分な状態にある軍事基地としての沖繩」において「アメリカの沖繩支配の動揺を日帝の補強的介入―予防的介入によってささえ」といふ把握は、現代帝国主義が不断に要請される反革命同盟の再編―強化の問題を単純な「運命共同体」としてしか考えられない把握である、よって、日米

帝が七二年「沖繩返還」にかける意図が理解出来ず、佐藤が「返還」ができるかのように提起しているのは「ベテンだ」といって、「本土沖繩の爆発的な闘いで本土復帰をかちとっていくことこそ問題である。」と言いつ放つていたのである。そして、また沖繩人民が六〇年代を通じて闘いぬいてきた大きな闘いの歴史的な意味を理解せず、即自的な意識内容ばかりに目を奪われて、その階級の発展を考えない思考方法は、まさに日米帝が自らの死活をかけてきた今日、反動的なものにならざるを得ないのである。「沖繩県民自らの手に「沖繩」をとりもどす闘い、すなわち沖繩奪還」（一九七二、三・二九『前進』）といった一切マクス主義と関係のない言辞をはいて本土プロレタリアートと沖繩プロレタリアートを同一視、自らの任務を沖繩人民の自然発生的な闘いに溶解させる誤りをおかし、権力の再編を一切明らかにせず、実践的な屈服を生みだしているのだ。昨年十一月の「国政参加」選挙に於ける一切の無方針で、路線の破産が人民の前から明らかになりそうになると、コザ人民の決起を一切の階級規定なしに「内乱の死闘」の時期に突入した証拠などを言うプラクティズムは、もはや人民の闘いの前に乗り越えられているのだから、その典型的な表われは「首都を本土のコザとせよ！」であり、しかもそれが「十一月決戦をも越える大爆発」（『前進』五・二四日五三五号）とされていることである。ここには六九年十一月の闘いがまったく教訓化されておらず、大衆的暴力斗争の自然発生的拡大を願望するだけで、ノミの「はねも権力問題に近づいていなし」である。「沖繩県民の怒りを自らのものとする」等々の人道主義的あるいは民族主義的に語られる沖繩人民との連帯と、それに支えられた実力斗争では沖繩斗争の世界的革命斗争に占める位置と本土人



民の任務が全くあいまいにされ、暗闇の中で刀を振りまわしているにすぎないのである。大衆的暴力斗争は蜂起し労働者権力樹立から規定される戦術の中で位置づけられないかぎり「やったノやった」という自己満足のものにすぎなくなるのである。

一方、反帝字評諸君の「返還粉砕、沖縄ソヴェト」論は具体的な階級関係を無視したピンボケ論議である。彼らは、プロレタリアートがどのような具体的、実践的過程を通じて階級意識を自覚してゆかか把握できないため、民族問題の重要性が一切理解できない。このような発想法は、現在日帝がますます政治的反動し民族的抑圧を強める中において帝国主義的経済主義として反動的な路線とならざるをえない。これは「解放」での次のような文章にはっきり示されている。

「沖縄人民の斗いは『民族主義』『本土復帰路線』による……解決は何か？結論からいえば『本土沖縄を貫くソヴェト建設』（プロレタリア権力の樹立）に外ならない」（七二号四・一五）

七二年沖縄返還を「『沖縄返還』は『七〇年アジア太平洋圏安保』の全面展開である」、またそれは帝国主義的恣意的な政策ではなく、内在的な運動法則としてとらえ、それに直対応して「七二年沖縄返還粉砕、沖縄―本土を貫くソヴェト樹立」という「革命的」空文句をかかげ、それで事足りれと考えるというまったくの小児病的、超主観主義的な発想である。「返還粉砕」の斗いは彼らに言わせると「……帝国主義ブルジョア政府の打倒からファシズムを粉砕してプロレタリア政治権力をうちたてる斗い」なのであり、それにもかかわらず蜂起のスローガン（すなわち人民に対して武器を取れノと呼びかけること）が欠落している以上、単なる観念の行為でしかなく、

現在の沖縄斗争の直面している問題の解決にはまったくないのだ。「正しい情勢分析」に基づいていかに「正しい戦術」を決定するかという問題意識すらないのである。

彼らのこのような態度はとくに民族問題に対する無知、軽べつとしてあらわれている。民族抑圧―民族解放の問題はすべて世界のブルジョアジーとプロレタリアートの矛盾に還元され、民族解放斗争が帝国主義と真向うから対決し、革命戦争へと発展している事実が否定され、中国革命、インドシナ革命戦争も「民族主義的な枠」をもってしていると否定的に評価するのである。

沖縄斗争に関しても、それが「赤旗と日の丸の併存する斗い」階級問題と民族問題の混在）であることが見ぬけず、観念的にブルジョアジーとプロレタリアートの矛盾で多量に理解するだけである。戦前、戦後を通じた帝国主義による沖縄人民と本土人民の分断支配の構造に無自覚であり、沖縄人民の民族主義的な斗いが現実に日米帝の侵略―反革命政策と対決していること、また、戦前、戦後を通じて本土人民の革命斗争が敗北し、沖縄人民との分断支配を許したという点について総括する視点が全くないのである。

「……、このような変革の時期を、その時代の意識から判断することはできないのであって、むしろ、この意識を、物質的生活の諸矛盾、社会的生産諸力と社会的生産諸関係とのまじだに現存する衝突から説明しなければならぬのである。」（カール・マルクス「経済学批判・序言」）

この講座は学習用の域を出るものではない。しかし、我々は過去の国際共産主義運動を検討し、その最良の部分を貧欲に学び、自らの実践に役立てていく上でどのような地平に立っているのだろうか。観念的反スタ主義はスターリン主義なる言霊に憑りつかれて昇天してしまった。スターリンの「気配」がするものをぶつた切る思考方法は自らを国際共産主義運動と無縁の地平に立たせ、過去を实践的に総括もできず、現在の世界革命の潮流はどこに発見し結合していくのかを明らかにできなくしてしまった。彼らにとつては、現在、世界革命の潮流は無いかあるいは彼らのみ？なのである。六七年以降の我々の実践は「プロレタリア国際主義と組織された暴力」を如何に実体化するかという闘いであつたと断言ではない。こうした実践こそ我々に新たな世界観―歴史観を要求した。蜂起―労働者権力樹立から世界革命戦争への偉大な闘いを切り開く任務の前にすべての日和見主義者は脱落するか反革命に回るかするであろう。現在、日本の革命的左翼は、「蜂起を組織する党建設」か「蜂起に敵対する党建設」か「解党主義」かの決定的な岐路に立たされている。

我々は合法マルクス主義に毒されている実践をかえりみず自らの「理論的高み」から過去の共産主義をぶつた切る事もしない。過去の、そして、現在の世界の共産主義者の最良の部分の実践から最も多くものを学ぶ事は我々の特権であり責務である。

人類の歴史に終りをづけ後史の幕を切つておとす偉大な事業は全世界のプロレタリアートの事業であるのだから。第一回として
「中国革命と我々」を五回に分けて特集します。

中国革命とわれわれ

高田宏・山本次郎

目次

第一章 はじめに

 第一節 中国革命・中国の共産主義運動への視点

 第二節 インドシナ人民の闘いは世界革命を切り開く

 第三節 日帝の侵略―反革命と日本人民の闘い

 第四節 国際主義と無縁の代々木「共産党」と勸念的反スタ主義

 第五節 おわりに

第一節 中国革命・中国の共産主義運動への視点

日本新左翼の多くが、アジアにおける第二次帝国主義世界大戦を日米帝国主義間戦争における日帝の敗北として一面的にしかとらえられないことは、新左翼それ自体が、スターリン＝コミンテルンによる指導の下での国際共産主義運動の腐敗・墮落を看破しつつ、しかしその視点自身に創造的マルクス主義とは無縁な観念的反スタ主義の左翼反対派的偏向を含んでいたがゆえに、コミンテルンと日本共産主義運動・中国共産主義運動の主体的な総括ができない地点から出発してしまつたことまぎれもない証左である。

現実には、抗日戦争で日本帝国主義の侵略戦争を打ち破つた中国共産党―中国人民（朝鮮人民）と、帝国主義間再分割戦争に勝利した米帝が二重の勝者として存在していたのであり、日本共産党―日本労働者人民が中国人民の抗日戦争に応え、帝国主義戦争を内乱へ転化することができなかつたが故に米帝軍による日本占領として、そ

の結着がついたにすぎない。

この中国人民の抗日戦争をその視野から欠落させる者が、この抗日戦争の主体であつた抗日民族統一戦線の問題をめぐつての中ソ共産党間・中国共産党内部の確執の世界的意義をとらえられないのは当然である。

コミンテルン七回大会（三五年）で定式化された国際反ファシズム統一戦線のアジア版を構想していたコミンテルンは、蒋介石・南京政府を中心とした国民的統一戦線を考へていた。「共産主義者は国民党および蒋介石を日本侵略者と同じ立場で評価してはならない」（「共産主義インターナショナル」三六年八月号）と中国の共産主義者に警告するその路線は、第二次国共合作の直接的な契機となつた三六年二月の西安事変に対する論評の中にはつきり表われている。「日本軍閥は：：：蒋介石政府を中心とする中国統一の過程が力強く前進を遂げており、日本の計畫によつて致命的な危険をなすものであると正当にも見なしている。」（「プラウダ」一二月四日）「昨年中に、南京政府を中心とする中国のあらゆる社会勢力の結集が著しく進んだ。南京政府は、その：：：優柔不断ぶりや統一戦線運動反対のキャンペーンにもかかわらず、なおも日本に抗して國の防衛を指導する用意と能力のあることを示した。」（ソ連政府機関紙「イズベスチヤ」同日）と蒋介石を賞讃し、中国共産党と紅軍の影響を受け、蒋介石を監視し、彼に反共の内戦の中止抗日をよぎなくさせた張学良・東北軍を親日反動派であると非難するのである。「陝西の裏切り者・張学良の叛乱はみじめな結果に終つた。これは、中国人民の統一に反対する日本側の陰謀の眞の失敗である。南京は大して動じる気色もみせず、叛乱司令官に向けて軍隊を送つたので、彼は蒋介石を釈放せざるを得なかつたのである。」（「イ

ンプレコール」三七年一月二日）この統一戦線路線（実は蒋介石に對する屈服路線）は、中国共産党・紅軍と解放区を売り渡し、中国革命を再度の「四・一二クーデター」の前に敗北させる道であつた。事実、蒋介石が共産党と解放区に對する第一次反共攻撃（三九年一月一四〇年四月）をかけていることが明白であつた時にも、ソ連は大量の武器を蒋介石政府に輸出している。（三九年六月には一億五千万ドル）

一方、三五年一月一二月に全国の主要都市で開かれた「内戦中止、連合抗日」の示威運動の高まりに應じて、中国共産党の「当面の政治情勢と党の任務についての決議」（三五年一月二二日）中央政治局會議で採択）は述べている。「当面の情勢はわれわれに教へてゐる。：：：従つて、党の戦術方針は全中国、全民族のすべての革命勢力を動員し、結果して、当面の主要な敵——日本帝國主義と売國奴の頭目。蒋介石——に反對することである。

抗日戦争に参加する広範な民衆に對しては、彼らの基本的な利益に對する要求（農民の土地に對する要求、労働者、兵士、貧民、知識人などの生活改善、待遇改善の要求）を充たしてやらねばならない。彼等の要求を充たしてやつてこそ、はじめて、より広範な民衆を反日の戦線に動員することができ、また、反日運動に持久性をもたせることができ、運動を徹底的勝利に導くことができる。また、こうしてこそ、はじめて、抗日戦争における党の指導性を獲得することができる。」

西安事變を契機とした国共合作においても、中国共産党は「党の組織を強固にし、党の武装勢力を強固にするとともに、全国の人民を動員して、投降、分裂、後退にたいして断固たる闘争をすすめ」

「おこりうる突発事變に對処する方法を用意し、党と革命がそのお

「おこりうる突発事變のなかで思いがけない損害をこうむることのないように」

「ブルジョワジーと連合している時期に、ブルジョワジーにたいして断固とした、きびしい「平和」的闘争を行な」つてきた。
（引用は「共産党人」発刊の辞）
しかし、三五年一月（長征の途上）の遊義における拡大政治局會議において党に對する指導を確立することに成功した毛沢東は、コミンテルンの路線に對する批判をコミンテルンをめぐる國際的な党派闘争にスターリン主義との対決として貫徹することを回避し、中国の共産主義者内部の問題として、全国の人民に對する共産党の政治指導の礎石として反対した（蔣を刺激するから）張國燾・王明に對する党内闘争として解決せんとしてきた。

我々はこの中国革命と中国共産主義運動の全ての集約的な表現をみなければならぬ。

「ロシア革命の一発の銃声は、マルクス・レーニン主義を中国に送り届けた。」とも毛沢東が表現するほどに、ロシア革命の圧倒的な影響の下に、一九一九年五・四運動として中国の階級闘争は新しいサイクルを開始したのだが、これは農民が人々の大多数をしめる半封建的・半植民地的社会における革命を指導する任務をコミンテルン中国支部に結集した中国の共産主義者に課したのである。この新しい状況をめぐつて、マルクス主義の創造的な発展が問われ、中国革命の性格・発展過程、依拠すべき階級、統一戦線、主要な闘争形態、党の組織等をめぐつてコミンテルン、中国共産党内部でさまざまな論争・対立が生じた。コミンテルンによる中国革命の指導の誤りに對し、問題を中国共産党内部に限定することによつて、スターリン主義との対決を回避してきた毛沢東と中国の共産主義者は、現在、中ソ論争と中ソプロレタリア文化大革命としてその問題に限

界を持ちつつも一定の解答を与える作業を開始している。

中ソ論争の中で発表された中国共産党の意図的に曖昧にされた（？）スターリン批判を引用してみよう。

「スターリンのものの考え方は、一部の問題では弁証法的唯物論から遊離して形而上学と主観主義に陥り、そのため時には實際の状況からかけ離れ大衆から浮き上がった。彼は党内と党外の闘争の中で、ある時、ある問題については、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾という性質の異なる二種類の矛盾を混同し、この二種類の矛盾を処理する異なる方法を混同した。彼の指導した反革命肅清の活動は：：：反革命分子を正しく処罰したが、一部の善良な人にあやまつた判決を下し、一九三七年と一九三八年に反革命肅清の拡大化という誤りをおかした。彼は党と國家の組織の中で、プロレタリアートの民主集中制を充分に実施しなかつたり、ある程度それに違反したりした。彼は兄弟党と兄弟國の關係を処理する面でも、いくつかの誤りをおかした。彼は國際共産主義運動のなかでいくつもの誤つた助力をしたことがある。これらの誤りは、ソ連と國際共産主義運動に若干の損害を与えた。：：：スターリンのいくつもの誤りについては、中国の共産主義者は早くからこれを身をもつて体験してきた。：：：はやくも二〇年代末期と三〇年代全体にわたつて、その後また四〇年代初期と中期において：：：中国のマルクス・レーニン主義者は、スターリンの若干の誤りの影響をおさへ、しだいに「左」翼日和見主義と右翼日和見主義のあやまつた路線を克服し、ついに中国革命を勝利に導いたのである。」（「スターリン問題について」）

「スターリンは労働者階級と広範な大衆に依拠して資本主義勢力に反對する闘争をおこなうのではなく、資本主義復活の可能性の問題をただ國際帝國主義の武力攻撃とつながりのある問題にすぎない

とみなしていた。これは理論的にも、実践的にも、正しくないものである。」（「フルシチョフのエセ共産主義とその世界的教訓」）中国革命の具体的実践の中で、スターリン的に歪曲された「マルクス・レーニン主義の普遍的真理」は厳しく検証されてきたのである。我々は、中国革命と中国共産主義運動の歴史を真剣に総括する作業を通じて、中国の特殊な状況の中で、中国の共産主義者がかたちづくってきたマルクス主義の理論と実践の中から、過渡期世界におけるマルクス主義の創造的發展の課題にこたえる普遍的な質を学びとらねばならない。

この中国革命、中国の共産主義運動から一切主体的に学びとる姿勢をもたない代々木「共産党」や観念的反スタ主義者が、現在、世界革命を切り開く苦闘を闘い抜いているインドシナ人民とインドシナの共産主義者について、何事かを語ろうとする時、それは日本共産主義運動の客観主義「プラグマチズム」ぶりを告白する。

第二節 インドシナ人民の闘いは 世界革命を切り開く

インドシナで赤々と燃え上っている人民の闘いの炎は、米帝の反革命介入をことごとく粉砕し、今しも米帝軍をインドシナ半島からたたき出さんとしている。

昨年五月、ロン・ノル派のクーデターによってシアヌーク政府を倒したのちカンボジアへの侵攻を行なった米地上軍一万は、クメール・ルージュを先頭とするカンブチア民族統一戦線と全インドシナ

底的に世界的に突き崩す偉大な革命戦争である。その英雄的な革命戦争は世界の帝国主義支配体制の支柱であった米帝国主義軍隊の解体を促進して、政治的、軍事的に敗北し、経済的危機をますます深化・拡大した米帝は根底的な支配体制再編をよぎなくされ、七〇年代の初頭においてニクソン・グアムドクトリン戦略とその基調をなす日米反革命同盟の再編・強化にその解決策を求めながら、当初からすでにラオス介入の米帝の敗北によつて破綻を示し、また、日米帝の思惑をこえて矛盾の露呈はピッチを速めている。ベトナム反戦運動は、アメリカを中心とした帝国主義心臓部において、インドシナ人民を力強い味方だと感じる最も抑圧された人民（米の黒人・メキシコ人・プエルトリコ人・カナダのケベック・英のアイリッシュ・日本における沖縄・部落・在日中朝人民）の闘いと結合し、新たな階級闘争のサイクルを形成すると同時に、その最先頭に、旧コミンテルン系の「共産党」にかわる新しい共産主義者のグループを生み出して来た。そして、「労働者」国家、中国での階級闘争の激化と（プロ文革）その過程での中国共産党の激烈な党内闘争（左派の勝利と中ソ共産党一政府間の対立の決定的な激化も、それ自身として抽象的にあるのではなく、ベトナム・インドシナをめぐる国際的な革命と反革命の激突の中にあつたのだ。中南米・アラブ・パレスチナ人民は「第二・第三のベトナムを」を合言葉に革命闘争の発展をかちとつて来たインドシナの共産主義者と人民は世界革命の最前線を切り開きつつある。我々は、そこに帝国主義支配の世界的な打倒と自らの革命の永続性の貫徹を求め、帝国主義心臓部のプロレタリアートの雄々しき登場と革命戦争の開始を要求する人民の闘いを見なければならぬ。

人民の断固たる反撃によつて完全に粉砕された。現在カンボジアの解放区は国土の三分の二の地域にわたり、三〇〇万の人民によつて支えられている。今年になって、二月一日、六年前の北爆開始と同じ日に、サイゴン政府軍三万、米軍九千、ヘリ一〇〇〇機を使つて国道九号線沿いにラオスへの侵攻を開始した。このラオス作戦の目的はホー・チ・ミン・ルート（のしや断）にあり、その要路に位置するチエボン攻略を目標としたが、一カ月とたたないうちに戦線は全面的に崩壊し、サイゴン政府軍精鋭部隊は、ラオス愛国戦線・北ベトナム軍・南ベトナム解放民族戦線の集中砲火によつて壊滅し敗退した。現在、新ジュネーブ会談を拒否し、米帝軍の全インドシナからの撤退を迫る中国共産党・中国人民と政府の力強い物質的・精神的援助をうけつつ、南ベトナムの非武装地帯の南をはじめ、全インドシナで人民は積極的な攻勢を最後の鉄ついでとして加えている。」インドシナ人民は、米帝を中心とした帝国主義勢力の排除、民族国家の建設、政治的民主主義、土地革命等それ自体としてはブルジョア民主主義的課題の解決を求めつつ、帝国主義の侵略・反革命と、それに屈服・結託した自国の買弁的官僚、動揺する民衆、大土地所有者の手先どもに對して長期にわたる激烈な闘いを闘い抜いてきた。四五年の八月降起以降、連綿と続く（ジュネーブ会談によつて一時後退を強いられたが）この闘いの中で、彼等は、民族国家の粹（国境）を越え、ベトナム労働党とインドシナの共産主義者に指導される強大な武装解放勢力へと自らをきたえ上げ、共産主義者に指導される武装した人民が統合する新しい国家のほう（解放区）を建設している。

第三節 日本帝国主義の侵略―反革命 と日本人民の闘い

このインドシナにおける革命戦争の前進と米帝の敗北によつて大きく転換しようとしているアジアの階級情勢の中で、日本帝国主義の野望は、さらに反動的・反人民的にふくれ上がっている。米帝による占領下で日本労働者人民の叛乱をのりきつた日本独占資本は、中国・朝鮮を先頭としたアジア人民の革命闘争の巨大な前進（具体的には四九年中華人民共和国樹立、五〇年朝鮮半島における革命戦争、四五年八月革命以降のインドシナでの革命戦争）の前に、沖縄人民を米帝の下に売り渡すことによつて自らと資本主義総体の延命をはかる道を歩みはじめた。そして米帝による世界反革命体制とドルの世界撤布により形成された世界統一市場―国防金融体制の下で急速に「復興」してきた日帝は、六五年以降、米帝資本との国際的競争の中で世界の反革命の盟主としての米帝の地位を経済的におびやかしてきている。「韓国」台湾を中心とした東アジアへの直接資本投下によつて原料資源・労働力・商品市場を確保し拡大（アジア人民を自ら賃金奴隷として直接・間接に支配する以外に「繁栄」と延命の道をもたない（これは米帝の自国経済の防衛政策によつてより確実になる）日帝は、世界的な、とりわけアジアにおける帝国主義総体の敗勢を自らのものとしてひきうけ、これを自らの力でもつてくい止め、逆転するといふ最も危険な野望を大きくふくらまし、その実現を開始している。（七二年沖縄施政権返還と自衛隊の派兵・四次防）佐藤政府の予測を越えて、大きく、急ピッチにやつてきた

米帝の敗北。そのアジア支配戦略の急激で大巾な転換を前に、日帝はより全面的。反動的。反人民的のより急ピッチな侵略。反革命を狂暴で死にもぐるの国内統合とともに決意せんとしている。この全面的な日帝の侵略。反革命を粉砕し、インドシナを先頭とする闘うアジア人民とともに日「韓」台反革命体制、日米反革命同盟をこなごなに打ち砕くことが、我々日本労働者人民に問われているのだ。そして、この日本労働者人民の世界革命の舞台への雄々しき登場を組織することは、我々日本における共産主義者の国際主義の任務である。

我々はこの任務に應える闘いを全力を上げて闘い抜いてきた。六七年一〇・八羽田闘争以降の四年間にわたる激闘はベトナム・インドシナ人民の革命的な闘いに応え、日帝の侵略。反革命の策動と真正面から対決するものであった。我々は、佐藤の南ベトナム訪問を實力で阻止しようとした闘いにはじまり、全国の学園の総叛乱を経て、今、沖縄・三里塚を先頭に燃え上がっているこの激闘の上に、「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の旗を高々とかかげることが出来る。

第四節 国際主義と無縁な代々木 観念的反スタ主義

このように、インドシナを先頭とした革命戦争が一步一歩着実に前進をかちとり、日本における階級闘争がより全人民的で、より非和解的な闘いへとほりつめんとする中で真のプロレタリア国際主義

化するために、決して日本軍国主義・帝國主義の復活を認めることができず、アジア人民に対して日帝を擁護せざるをえないのである。「自主独立」のうらには、合法主義・日和見主義の排外主義への転化の実体がかくされているのだ。革命戦争の前進にしっかりと呼応した日本労働者人民がたちあがる時代において、彼らが、帝國主義者と公然たる城内平和を結び蜂起の前に立ちはだかることはまちがいない。

一方、国際共産主義運動と日本共産党の腐敗・墮落を自覚し、これを反スタの名の下に断罪して、日本新左翼の誕生に少なからぬ役害をはたした黒田寛一。革共同は、プロレタリア国際主義をその「革命的マルクス主義」の旗の下に復権したのであるか。否である。黒寛のブルジョア歴史観が生み出した「スターリン主義」なる言葉にとりつかれた彼等は、国際共産主義運動の歴史（とりわけ二〇一三〇年代における過渡期世界のマルクス主義の創造的發展をかけた苦闘）の主体的な総括を放棄し、その結界フルンチョフによるスターリン批判も、中国共産党によるソ連共産党に対する徹底的な批判。対決も「スターリンストの内輪もめ」として彼岸のものとし、再び自らを国際共産主義運動から無縁な位置へと転落させる。

六〇年代後半以降の人民の闘いの前進が我々に課した試験は、国際共産主義運動の左翼反対派の総括が、インドシナを先頭とした全世界人民の闘いに結合する日本労働者人民の重大な任務を回避する為の免罪符にはかならないことを白日のもとにさらけ出してくれた。蜂起に敵対する日和見主義建設の道を歩む革マル派はもちろん、その素朴実践主義的戦闘性から革マルの超観念論に不満をもち出す核派も、革共同イズムの枠をのりこえることができず混乱をきわめている。入管闘争を闘う中で、観念的反スタ主義の破産を最後のに

義の立場が日本の共産主義者に真剣に問われている今日、代々木「共産党」はもちろんのこと、反スタの旗の下代々木から訣別しつつ、その悪臭ふんばるる「左翼反対派の衣裳」をいまだ脱ぎすてることのできない諸君は、この問いに一切答えられず、いや問題の所在すらもつかめず、ますます自らを反動的な位置へと転落させている。

コミンテルン、コミンフォルムとその下にあつた自らの敗北を一切主体的に総括することなく、在日朝鮮人共産主義者「ソ連派」「中共派」をプラグマチックに切り捨てることによつてのみ「共産党」の名を僭称し続けた代々木「共産党」は、この間、ますます公然と国民党・議会議政党へと鈍化し、「自主独立」の名をもつて国際的な階級闘争と共産主義運動との一切の絶縁を表明している。この帝國主義の侵略。反革命と革命戦争を先頭とした全世界人民の激闘の時代に、国際的な階級闘争と共産主義運動から一切主体的に学ぶことなく、中国・朝鮮・インドシナ人民の「日本軍国主義」に対する革命的警戒に対し、こともあろうに「大國主義的干渉」の一言でもつて日本帝國主義を擁護する代々木「共産党」が、国際主義となんらかの関係があるだろうか。彼等がいかに「ベトナム戦争反対」「ベトナム人民支援」をしやべりたてようと、そしてハレンチにも、ベトナム労働党をかくれみのに自らの反動性を陰蔽せんとたくらもうとも、彼等の「民族共産党」「社会排外主義者」としての本質はかくすことはできない。

帝國主義の侵略。民族的抑圧。反動の攻撃に対する労働者人民の怒りと反抗を小ブル的に固定化することで、その網領のデタラメさにもかわらず生きのびている彼等は、帝國主義の暴力装置に屈服し、暴力革命とプロレタリア独裁をかなぐりすてた自らの姿を合理

宣告されたにもかかわらず、彼等は「反スターリン主義運動の飛躍」と称して、「民族解放」を抽象的にとりだし、これを人間学的に基礎づけようとして混乱を深めたあげく、結局は、先進国プロレタリアートの啓蒙運動に帰着せざるをえない一國主義をバクロしている。このように、プロレタリア国際主義をめぐる諸々の潮流の混乱と一國主義さらには社会排外主義への転落は、彼らの日本の革命闘争における実践上の反動性と深く結びついている。

第五節 日本における共産主義者の の任務

インドシナを先頭に全世界の人民の革命闘争は着実に前進している。しかし、「ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争は、その内容からではないが、その形式上、最初は民族的である。いずれの国のプロレタリアートも、当然、まず自國のブルジョアジーをかたづけねばならない。」（「共産党宣言」）我々は、日本革命なき世界革命戦争への飛翔への道を厳しく断たねばならない。

六七年一〇・八にはじまる四年間の激闘をその最先頭で闘い抜くことによつて、日本の革命的左派は代々木「共産党」となる一つの政治潮流へと飛躍し、代々木「共産党」を実践的にのりこれる実践的道程の巨大な第一歩を踏み出した。今、我々には、個々の闘いにおける戦闘性によつてしか自らを代々木「共産党」と実践的に区別しえなかつた左翼反対派から、日本における蜂起の実現の一点から現在の任務を系統化する真の革命党への飛躍が問われている。この中においてのみ、国際主義も問題となりうるのである。

六九年秋の安保決戦（それに先立つ全園学園闘争のなだれを打つた崩壊も含めて）の敗北。それは、帝國主義國家權力の暴力装置―機動隊に対する軍事的な敗北として現象した。

我々は、それを日帝の侵略―反革命の全面的な開始に抗し全国いたる所で湧き上がってくる労働者人民の闘うエネルギーを一点に収約し、自らは、共産主義者の組織の徹底的な壊滅をねらう政治警察の網の目をぐり抜けつつ、蜂起―労働者權力の樹立へと組織する任務を担う思想的。政治的。組織的の力量を闘いの中で獲得できなかった共産主義者―党の敗北として総括しなければならぬ。運動が軍事の領域に一步踏みこむことによつて実践的に検証されたのは、このことである。現在、多くの同志達がこの限界の克服にむけ苦闘している。

我々は、労働者人民がますます自らを人民に対する暴力的敵対者として純化する帝國主義國家權力に対して非和解的な激闘に突入り、その過程で「平時」においては想像を絶するような速さと深さにおいて政治的自覚を獲得していく時期がかならずや到来することを確信している。そして、その時期において共産主義者は決しておくれてはならない。それは革命の死を意味する。

日本における革命戦争の実現形態をよりリアルな形で規定する作業が、日本帝國主義の政治・經濟構造（より直接的には權力構造と市民社会の統合様式）の分析とともに、國際主義の深化を問うているのだ。帝國主義が世界的な權力であり、世界的な革命と反革命の激突に規定され、反対にそれを大きく規定しかえすものとして、日本における革命戦争があることを確認すれば問題の所在は明らかになるだろう。（たとえば、蜂起―ブルジョア國家組織の解体をめぐる米帝國主義軍隊解体の問題、うちたてられつつある權力をめぐる

中国・ソ連共産党―政府の対応もその意味において、我々は米帝心臓部における階級闘争と党、中国、朝鮮、ソ連の社会、階級闘争と党に対する真剣な評価を、日本新左翼のイデオロギーを色濃くおつている國際共産主義運動に対する左翼反対派総括―観念的反スタ主義を克服する中から深化することをせまられている。そして、この作業は、我々が思想の領域だけでなく、戰略・戰術・運動・組織にもまわりつかせていた左翼反対派的な体質を克服し、眞の革命党へと飛躍する過程の一環として担わなければならない。労働者。

人民の闘うエネルギーの増大と、しかし共産主義的政治をめぐる想像を絶する程の困難な情勢にもかかわらず、七〇年代初頭に我々が勝ちとろうとしている飛躍は、反スタの旗の下になされた新左翼の誕生に勝るとも劣らず「命がけの飛躍」である。

第六節 おわりに

インドシナを先頭に着実に前進する革命戦争にしっかりと呼応し、日本における蜂起―ブルジョア國家組織の解体・労働者權力の樹立を実現し、この両者を結合することによつて、巨大な世界革命の潮流を形成すること、これは我々がかならず果さねばならぬ重大な任務である。この困難な任務に應える一礎石として、我々は國際的な階級闘争と共産主義運動の歴史を概括すると同時に、困難な情勢の中でマルクス主義の創造的發展をかちとらんとした各国の最良の共産主義者達の理論と実践を、彼のおかれていた歴史的・社会的制約の下でとらえかえし、その中から普遍的な質を抽出し、我々の理論と実践の中に組み入れていく作業を開始しようとしている。

中国革命と中国の共産主義運動の真剣な総括をもつて、その第一歩

を踏み出していきたい。

以下統刊予定

△6号▽ 一九一九～二七年 スターリン、トロ

ツキー、コミンテルンと中国革命

△7号▽ 一九二七～三五年 毛沢東と中国革命

の性格

△8号▽ 一九三五～四九年 毛沢東・コミンテ

ルンの統一戦線戦術

△9号▽ 一九四九～現在 中ソ論争と文化大

革命―過渡期社会建設と世界革命―

労働戦線からの報告

稿 寄
まきおこる 中小・日雇・臨時工と下層未組織労働者の闘いを
自衛隊―帝軍解体闘争と固く結合し革命軍の一翼を創り出そう
山岡一雄

へはじめに

「親愛なる同志(レーニン)！ 最近、つまり、第二回大会後に、いわゆる多数派と少数派とが形成されたことを知らされた。この全ては、…：非常な重みで我々を抑えつけた。…：ただ、私の考えでは、この闘争(党内闘争)は、今とちがつた性格をもたなければならぬ。これを忘れるなら、とりもなおさず、我が党は、無力化する事になるからである。…：事業の利益が、泥の中で、ふみにじられ、全く、忘れられているのをみたとき、私は、彼らを政治陰謀家と名づけるのである。事業の先頭に立っている人が、何か他のことに没頭しているのを見ると、なんとなく、悲しくなり、事業そのものために恐ろしくなった。」

…：これは、ロシア社会民主党が、ボルシェヴィキと、メンシエヴィキに分れ、党内党派闘争の展開されているとき、今から、七〇年近く前、ひとりの工場労働者が、レーニン宛てに送った手紙の一節である。

私は、ある日、図書館で、これを読んで其感をもった。
レーニンは、この手紙を、自からの著作に全部引用している。私は、レーニンが、この手紙にどのように答え抜こうとしたのか、自

分なりによんでいった。

そして「労働者が、我々を理解しなくなる恐れをなくするためには、又、闘争における彼らの経験と、彼らのプロレタリア的感覚が「指揮者」である我々に、何かを教えるようになるためには、そのためには、分裂の気運が生じつつあることを、労働者が注視し、これらの機運に、彼らが、自覚した態度をとり…：どんな僻地の出来事も、全党の利益、運動全体の利益の見地から評価する道を、彼らが学びとるようになることが必要である。」…：という一節に出くわした。

ごく当り前のことであるかも知れない。

私は、これが、レーニンの答えだと思つた。

私は、このロシアの七〇年前の一労働者の手紙に共鳴し、レーニンの答えたところのことを追求したい。そして、そのささやかな実践のひとつとして、つたない文をつづります。

まきおこる中小企業・日雇・臨時労働者の闘いと、その永続化

昨日までは、会社で、飯場で、もつとも熱心に、精力的に、従順

に働く、従業員や、労働者だつた者が、今日は、会社から、上役から、現場責任者からもつとも憎まれ、なまけ者、不真面目者、言うことをきかぬ奴などと言われ、職制。ガードマン。右翼暴力団のいやがらせ、暴行。私刑リンチをうけ、あげくの果てには、政治警察―検察に追いかけてまわられ、パくられて、冷いコンクリートと、鉄格子に放り込まれ、司法権力によつて裁かれる労働者へ…：

…：こんなことが、今日、中小企業・日雇・臨時等、もつともしいたげられ、未組織の労働者の働く職場では、毎日おこつている。

この関西の地においても、いわゆるブルジョア新聞で、争議と名付けるところの闘争が、守る会なり、争議団なり、闘争委員会なり、共闘委員会なり、労働組合なり、種々の形態でもつて行われている。その数は、ブルジョア労働行政部において記されているだけでも千件をはるかに上回つていと言われている。

だから、労働行政機関に、関知しないで、例えば、ひとりでシコシコと、首切り撤回闘争を組んでいるものなどを加えてゆくと、その数は、膨大なものになる。

そして、これらの闘いは、量的のみならず質的にも、高く、非妥協的に、永続化して闘い抜かれている。

ひとつひとつの小さな、中小企業、未組織日雇・臨時労働者の闘いが、個々の会社資本家や、行政官僚をとびこえて、総資本の総司令部である経団連などの指導をうけ、国家権力―暴力装置をフルに使つて、圧殺せしめられんとしている。

資本家階級は、検察―政治公安警察そして右翼暴力団。第二御用組合・職制等から、行政機構。司法裁判権力。マスコミ権力そして日本共産党など、あらゆる力を用いて、そのささやかな労働者階級のろしを消さんとしている。

労働者階級は、このような国家権力の圧殺に抗して、先ず、労働者として自から、権力者共と闘い抜く姿勢を強め、大衆討論、ピラ作り、ステッカーはり、シユプレヒコール、大衆団交、押しかけ団交、…：つるしあげ、デモンストレーション、街頭デモンストレーション、大衆集会、ストライキ、時限ストライキ、抜きうちストライキ、指名ストライキ、ピケット、バリケードなどなどと、考えうるあらゆる戦術を使いながら、地域・産別のあらゆる闘う労働者のカンパ支援・共同闘争などによつて、その戦略をうちかためつつ、戦術を使い抜いて、いつそう闘いの戦列―陣型を、強めていつていく。

たたかいは、もはや、明白に、ひとつひとつの個々の資本家と、労働者の対立から、総資本家―権力者共と、労働者階級全体の闘いとして、社会的・政治的な様相をおびてきている。

まさしく、現在の自衛隊―帝軍主義軍隊―警察機動隊―政治公安警察を中軸としながら、右翼暴力団・御用第二組合―司法行政機構そして、マスコミなど、政治権力をにぎっている者との政治をめぐる闘いとなつてきている。

私は、これから、中小企業・日雇・臨時等のもつともしいたげられた労働者の闘いの必然性、その内容、その発展行程と発展の条件をつかみ、この闘いが、新しい闘いへ移る方向を、微力ながら、さぐつてゆくため、ささやかな努力を行つてゆきたい。

そして、それは、私にとつて、闘いの目標―侵略・反革命を粉碎し、いつさいの搾取、収奪を完全に、終局的に断絶し、世界プロレタリアート独裁―共産主義社会建設―を見失わずに、現実の闘いの中での「闘いの合言葉」をみつけたことです。

まず、現実に関い抜かれている二、三の闘争についてみてゆこう。

内藤 闘争

「庄殺に抗して」—内藤 闘争
委員会発行パンフから

内藤 建築事務所

—あくなき労働者搾取のドレイ工場

△ あくなき労働者搾取

資本金二五二〇万円。本社—京都。大阪・東京・福岡・松本。高知・亀山等一四支所。従業員二七〇名の内藤資忠一族の会社である。仕事は、建築設計、現場監理を行なう。

全国に、一四ヶ所に散在する支所の立地条件は、そこに、低価格労働力の市場があるか否かにかかっていた。目星をつけていた地方の沿線各駅に降りたち、最低労働力価格の労働市場の存在する地に、支所を設置するという徹底ぶりである。まさに、支所は、散在せざるをえないのである。

そして、従来の設計事務所という企業のもつていた数名から五、六〇名を適性基準として、師弟（建築家とその弟子）の徒弟制度の体質を温存した一見、創造の場としての自由を唱うが如き職場雰囲気をもつものであった。

建築設計を、総合芸術の実践であるとする幻想性に支えられたところの、大学・高等学校教育—建築教育の産物としての低価格労働力供給の基盤をもつて、労働者を搾取していた。

ところが、この「古い」企業体質に対し、内藤資本は、建築設計

制度—建築幻想性の中で、中小企業においては、大手の日建設などと同じが、なかなか、実施出来なかった。

ところが、内藤資本は、それを行なった。

今までの建築設計業界の徒弟制度—建築幻想性を打ちやぶつて「合理化」—労働者の人間性をはくだし、資本への全きの機械としての隷属化—を行い、文字どおりのドレイ工場化を狙った。

その手口は、労働管理者としての「チーフ」一名、数名の製図工（ほとんど若年女子）を一グループとするチーム制形態である。

これは、機械制的流れ作業の実態を人的におきかえたシステムである。

これによつて、設計に対する意志のもちこみを一切封じ込め、全く労働者をドレイ化せしめた。

△ 労働者を無権利状態におく暴虐な弾圧

ドレイ工場—内藤資本は、若年女子労働者、女子パートを低賃金搾取構造として、官公庁—防衛庁・日赤病院等々と結託して搾取し抜き、合理化—労働管理体制を強め、流れ作業化し抜き、一層の強搾取—劣悪労働条件下に、労働者をおとし入れた。

当然、不満・不平・そして怒り・反発・反抗・反乱がおこる。これに対し、力で押えこむことによつて、ドレイ工場は完成する。

労働者が、余りの低賃金と、劣悪な労働条件について、その改善を訴つたえれば、即日、配置命令、拒否すれば、即座に、問答無用と首切りが発令された。

目に余る内藤資本の暴虐と、低賃金と劣悪労働条件のため、労働者の定着はなく、二年程度で、そっくり入れ替るという状況であった。

を、総合芸術の実践であるとするところの建築設計幻想を自から打ち破り、そうして、今までの、低価格労働力価値創出—供給基盤と、徒弟制度を打ちやぶつて、むきだしに、建築設計—製図の心得など一切要求せずに、単純労働—機械のように使い、パツケージをもつて、若年女子労働者、パート、タイムの主婦を大量に、製図工として送りこんだ。

その平均賃金は二五、〇〇〇円という全くデタラメな過酷な低賃金である。

このように、今日の社会でもとも抑圧され強いたげられた女子労働者の社会的地位の低さを強制するところの低賃金によつて、全国に、支所を設置し、拡大し、あくなき労働者搾取を行なっている。

△ 官公庁（防衛庁等）と結託して

あくなき労働者搾取

このような低賃金—女子労働者・中小企業労働者のあくなき搾取の上になつて、無茶苦茶な受託ダンピングを行なつてきた。

この無謀ともいえるダンピングは、建築設計業界（建築家協会）からの除名、しめだしをくらうはめになつた。

だが、無茶苦茶なダンピング可能な基盤を、確立している内藤資本は、なんら憶するところなく、官公庁—防衛庁施設局・日赤病院等々と結託して、それらの受託を、いつばい受けて、保有して、いつそう、企業を支所を拡大し、女子労働者を軸に、労働者のあくなき搾取を強めていった。

△ 労働管理—合理化で、あくなき搾取

今まで、労働管理—合理化は、建築設計業界において、その徒弟

そして、このことが、まさに、内藤資本のあくなき私腹肥大追求の主材料であつたのだ。

このようにして、内藤資本一族は、この数年の間に、またたく間に、莫大なる資産をきずきあげ、京都市における長者番付の上位にランクされるまでに、生血を吸つたダニの如く、毒々しいまでのふくれあがり、驕りにおごる銭の亡者に成り上つた。

労働組合 結成

—ドレイ工場内藤資本への拒否宣言

内藤建築事務所のようなドレイ工場の中から、若い女子労働者をはじめ労働者は、たち上つた。労働組合という姿をとつて。

ときは、一九七〇年七月三〇日、五七名の労働者を結集して労働組合を結成した。

七、〇〇〇円のベース・アップ、残業協定の締結、配転の事前協議制度の確立等を要求して結成とともに闘いに入つた。

ピラ・ステツカー・職場集会・リボン闘争・残業拒否闘争等の闘いをとりくむ。

一ヶ月余の闘いを経て、九月八日、会社側、平均七、〇〇〇円のベース・アップのみ、勝利する。

そして、この間、労働組合の定着化—拡大化はすすみ、一八〇名に、組合員の人数はふくれた。

労働組合—それは、内藤資本に対する、労働者私物化への拒否の宣言であつた。

△ 資本の反撃——「合理化案」に対し、 全面無期限ストライキで闘う

内藤資本は、止むをえず、セ〇〇〇円のベース・アップをみるともつとも、次の反撃を準備し、一層の労働者私物化—労働組合の定着拡大阻止を狙って、十月二十一日、ドレイ工場の強化案—合理化機構改革案を出してきた。

これは、二〇にのぼる「課」の設置、各課の構成を二、三名の男子と四、五名の女子とし、資本の都合だけで、配転を可能とすることを一方的に規定したものである。

労働組合は、ただちに、集会を開き、大衆討議をすすめ、十月二十三日に「機構改革案」撤回を要求して、全面無期限ストライキ・大衆団交を行う。

その中で、予想以上の労働者の反撃の中で会社側は、労働組合への第一弾の攻撃としての合理化案を三〇日に、白紙撤回した。

△ 団交拒否—不当労働行為の攻撃 労働者分断策動

合理化案の撤回は、資本の側のあらたな陣型をしくための準備だった。

合理化案につづいての第二弾の攻撃は、「団交方式四項目」という—団交は、①、人員を制限し、②、時間を二時間にし、③、静粛にし、吊しあげなどしない。④、団交場所は、交渉委員以外入らぬ。——ものであった。

組合員・労働者の傍聴を一切拒否し、資本の好きなとき、好きな時間だけ、好きな場所でしたら団交交渉を開かないというものだった。

そして、このことを、団交ルールの中で定めるのではなく、一方的に、いわば、最後通牒的に、団交交渉権無視の不当労働行為をむきだしにやっていた。

一方、労働組合つぶしを、労働者に対し、あるいは、家族に対し組合批判の文書を送るなどの策動を行っていた。

十月二十三日以来の無期限ストライキは、合理化案の白紙撤回によって、終るかにみえたが、第二弾の攻撃の前に、続行された。

団交交渉を拒否することなく行え—というしごく当然の要求に対し、会社側は、かたくなに拒否しつづけた。

組合側は、ストライキの無力化しつつ、分裂策動をくりかえす資本の攻撃の前に、ストライキを、十一月二日、中止した。

組合員労働者の間に、動揺と脱落が出てきた。又、執行部批判が出てきた。

会社資本側は、団交拒否—分断—分裂策動を行いつつ、一方的にボーナスを一・五倍支給し、さらには、団交に関する地方委あつせんをもくつて、一層の分断・分裂策動を強めた。

第二御用組合を結成していった。

△ 押しかけ団交へ 委員長告訴、解雇、三名停職の攻撃

このようにして、いわば、正規のルートによる話し合いへの道は、全て、会社側によって抹殺され尽したのである。

会社側は、団交四項目なるカーテンを組合との間に降し、その裏で、組合分裂攻撃—第二御用組合を結成していったのである。

そして、さらにあくらつたる第三の攻撃を着々と準備した。

一切の話し合いを拒否した会社資本に対し、十二月二十四日、押

しかけ団交として現象したのは当然だった。

そして、それは、資本によつて、強要されたともいえるものだった。

一切切が、内藤資本によつて、仕組まれた労働者庄殺の謀略だった。

内藤資本は、組合委員長を告訴すると共に、年始休暇明けの一月八日、委員長に、懲戒解雇、他の二名の組合員に停職処分というあくらつきまわれる資本の本性的全貌を明らかにしたのであった。

内藤アウシュビッツ体制の確立へ

— 資本・権力・右翼一体の攻撃

一月八日、内藤資本は、全国の支所・出張所から数十名に及ぶ職制・二組が動員され、加うるに、護友会なる京都産業大学の民族派系の右翼学生数十名が動員されて、本社玄関が固められた。

そして、私服警官—デカも動員され、組合員労働者に圧力をかけ組合集会にすら介入してきたのであった。

内藤建築事務所京都本社は、一夜にして、暴力資本の要塞化したのである。

その日の朝、宿直していた組合員は、電話交換室に軟禁され、出社した組合員は、検問され、社内での自由行動は、一切封じられた。

委員長をはじめとする処分対象者の三名は、出社と同時に、はがいにじめにされて、総務室にひきずりこまれ、処分を口頭で通告するなり実力で、社外に放り出されたのである。

このようにしてはじまった内藤アウシュビッツ体制は、翌日になり、さらに、エスカレートした。

職制・ガードマン・右翼学生そして私服警官—デカによる労働者庄殺の策動は、全くの狂気のさたの状況を呈した。

各職場には、三—四名の監視がつき、一切の会話はおろか、席をたつこと、窓を開けることまでが禁止された。外部からの電話は盗聴され、組合関係の電話は、カットされた。

そして、社の内外において、右翼学生を中心に、組合員に煽喝を加え、果ては、狂犬のように、組合員におそいばかり、にげまどう組合員の一名に対し殴るけるのリンチ—私刑を加えるに至つたのである。

△ 資本・官憲権力・マスコミ一体の委員長の逮捕

このように、アウシュビッツ体制は、内藤資本のドレイ工場—低賃金・合理化搾取強化—への労働者の拒否反逆・反抗・反乱に対し労働組合を分断し、御用第二組合を作り、職制機構を強化し、右翼・ガードマンを前面に押し出し、いつそう強固なドレイ工場への道をかためたためのものであった。

だが、組合は、労働者は、屈することなく首切り不当処分撤回闘争を組み、地域の闘う労働者・学生・建設支部の労働者との支援・連帯・共闘を強め、就労闘争を含む、大衆集会デモンストレーションなどの闘いを推しすすめていった。

当初からアウシュビッツ体制の密接な一翼を担っていた官憲は、屈服しない労働者に対し資本と一体になつて、右翼暴力団・ガードマンに代つて、前面におどり出た。

連日、官憲—政治警察は闘いを妨害介入し、組合員に対し、監視し、張り込み、尾行などの活動を、活発におこなつていった。

そして、二月十一日、委員長を逮捕し、マスコミを通し、デマゴ

ギーを流し、分断攻撃を加えてきた。委員長は、ブタ箱に、十日間放りこまれ、起訴された。裁判所は、労働者を裁こうとしている。マスコミは、官憲と一体になって、官憲からのたれこみ記事を流し、官憲一政治警察の手先として、労働者の分断分裂策動を行なった。「重役らに乱暴一軟禁」「反戦学生と組んで闘争」「企業破壊の危険性も」などと、闘いの本質を陰蔽して、労働者階級の間に、分断・分裂をおこさせるキャンペーンをはつたのである。

アウシュヴィツ体制の圧殺に抗して

資本一政治警察権力一右翼暴力団・ガードマン。職制第二組合一マスコミ等の一体になったアウシュヴィツ体制による労働者圧殺の策動にもかかわらず、労働者は、屈することなく闘い抜いている。いかなる狂気のアウシュヴィツ体制も、労働者の闘いの火を消したり、憎しみ、怒りを圧殺することはできない。小さな火も、炎となつて、野をこがしもえつくす闘いとなつて、アウシュヴィツ体制を粉砕する。

二月の権力を頂点とした攻撃一弾圧に抗して、官憲への攻撃闘争一就労闘争を、地区・産別の労働者・学生を結集して闘い抜いた。そして、闘いの中で、マスコミのデマキャンペーンに対し、労働者の闘いのキャンペーンが、はられていき、地域の住民が、結集しはじめた。

そうして、労働者は、敵のアウシュヴィツ体制の陣型に対し、地域の学生・下層のプロレタリアートと結合し、共闘の陣型をきざいでいった。

このようなかで、五月七日・二十二日には、実力でもつて、大

衆的に地域住民と共に、就労闘争を闘い抜いた。

このような闘いの前進の前に、敵は、アウシュヴィツ体制を一層強化してきた。それはひとつは、右翼の新たな一正武館の登場であり、同盟第二組合高野一派の強化であった。

だが、闘いは、春闘、不当処分撤回一就労闘争・裁判闘争等、さらなる我々の陣型の強化にむけて、爆発するエネルギーを秘め、潜めてすすんでいる。

七月の組合大会では、内藤闘争を闘うひとりひとりとの諸問題が根底的に問われ、「従業員から労働者へ」ということが、①、内藤闘争の必然性と自然発生性、②、外部からの反戦キャンペーンと既成労働運動、③、差別と弾圧の中から価値観の転換、④、第二組合労働者の「脱落者」「裏切り者」「ビューティフルな話し合い」「運命共同体・生産性向上思想」の四点にわたつて追求されていった。そうして、「闘う組織」について、労働運動全体の中で決起することとその困難性と闘かうことによる連帯を、内藤労働者における、①、徹底した民主主義と執行体制、②、自立した個人と団結、③、他の闘争から学び、自からの闘争から提議できる内容……の三点にわたつて追求した。

このように、アウシュヴィツ体制粉砕の闘いは、権力と対峙しつつ、自からの労働者主体・組織体制の共産主義的永続化をかちとつてきている。

人文社闘争

人文社分会から発行のパンフ参照

人文社

ワンマンドレイ工場

△ 人殺し低賃金。一年使い捨て

大阪人文社は、八年前、五人で作られた。現在では、二つの営業所をもつて、約八〇人の従業員で、近藤一族資本の会社である。仕事は、地図一各府県・市区地図・道路地図などの作成・販売である。

人文社の労働者は、自から「人殺し低賃金」とよぶほどの低賃金下にある。大学を出て三ー四万というのだから何をかいわん。二五才で三、四〇〇円平均である。

このような「人殺し低賃金」を強制して、労働者を自発的な退職におこし「一年使い捨て」でいった。

中小企業は、資本主義の再生産構造の中で不断に生みだされる「流れ者一若年労働力」の処理機関ともいふべきものになっている。

今日、中小企業は、生産点でもつともしいたげられた臨時工。日雇労働者などが、なんとか、もつと労働条件がよくて、仕事の定着を求めて「流れ」てくる若年労働力を吸収・処理している。

そして、また、中小企業の低賃金、劣悪労働条件のため、中小企業労働者は、他の中小企業や、臨時工・日雇労働者へと、「流れ」

ている。

これら相互に「流れ」ている労働力に依つてはじめて、「人殺し低賃金」「一年使い捨て政策」は、なりたつているといえる。

△ 官公庁機構と結び、労働者支配

地図の作成・販売という業務は、近年、大きくのびてきている。情報化時代といわれる今日、帝国主義者はその不気味な欲望をもつている。すなわち、「一億総背番号制」という政策である。

これは、国内支配体制の完璧化を狙つて「いつ、どこに、だが、どのように生活しているか」を一目瞭然につかんで、近代的・合理的に支配を貫徹せんとしている。

この政策の完遂のためには、地図は、不可欠の武器である。だから、帝国主義支配者共は、行政機構をもつてして、地図出版業者を通じて、一層この政策を推しすすめることになる。

近藤資本は、その仕事の性質からしても、密接に、官公庁・行政機構と結びついている。そして、企業と資本の性格は、その下請としての内容をもつている。

だから、近藤資本は、自から意識するにしろ、しないにしろ、その権力との結びつき、下請機関化の中で、権力の意向を敏感に、まっとうから受けとめている。

そして、一層、労働者の私物化一搾取をおしすすめている。

△ ワンマン体制で労働者を、無権利状態におく！

近藤資本は、その個人が、小卒以来、四〇年近くわたつて、セールス一本に生き抜いてきた男であれ、金銭に対し、人一倍執着心が強い男であれ、資本主義体制の中で、今日まっしぐらに進む反革

命軍事体制に照応し、低賃金構造を支える低賃金労働力処理機構及び、大企業行政機構の下請機構の役割を果し抜くため、家族体制を軸に、ワンマン体制をしいている。

古い家族の親子・兄弟・夫婦関係を、企業の中に組みこみ、それを軸に、中小企業体を形成している。

ワンマン体制は、労働者を、業務上の分断のみならず、労働者のささやかな要求をも、ふみにじり、ましてや、労働組合なんかは、絶対にゆるさぬものだった。

全く、労働者を差別分断支配し、私物化し無権利状態におくことによつて、資本を、こえ太らせていく必至の体制が、ワンマン体制である。

労働組合結成

昨年七月、組合を結成した。

労働者は、「賃金が、安い」「労働条件が無茶」「仕事がおもしろくない。」「ワンマン社長が、けしからん」「どうせ、すぐ会社をやめるのや」などの気分をもつていた。

そして、まずは、サークル活動からはじまった。その中で労働者の不満と怒りと、「どうせやめるのや」という流れ者意識が、結びついて、賃金・労働条件の向上、時間短縮を要求して、出版労協（日共系）の指導の下、労働組合を結成した。

それは、ワンマンドレイ工場―近藤資本に対する闘いののろしだった。

△ 近藤資本と闘えぬ出版労協

労働者が、組合を作つて賃上げ・時短などの賃金・労働条件についてささやかな要求をつきつけて、闘いをすすめていくと、団交を拒否し、さらに、実に百余件に及ぶ処分攻撃を次から次へと狂気の弾圧を加えてきた。

あげくの果てには、ピラはりに伴つて、デッチあげの告訴を行うという仕末であった。

闘いは、賃金闘争から、権利闘争の様相をおびてきた。

△ 闘う労働者を結集し、人文社闘争委員会を結成

十一月七日、地区の反戦派労働者。全港湾建設支部などの労働者が、人文社闘争の勝利にむけて、人文社闘争委員会を結成し、さらに闘いの前進を求めた。

人文社闘争は、近藤資本の狂気の労働組合弾圧―労働者私物化支配の策動―処分・告訴そして、政治警察の策動の中で、シレッとな局面に入った。

人文社闘争委員会の地域的労働者の力で、近藤資本をおいこんでいった。数度にわたる時短ストライキ・ピケット・団交を経て、おいこんでいった。

そして、必然的に、政治警察の介入がもたらされ、全港湾指導部の判断の中で、百余の処分や、デッチ上げ告訴等の弾圧を撤回させつつも、一定の妥協を行なつた。

闘いは、一時、延期された。

△ 資本の再攻撃―労働者分断支配へ

妥協は、人文社闘争委員会の政治的力量の弱さの反映だった。資本は、この妥協を逆に利用して、労働者分断支配の攻撃に出た。

近藤ワンマンドレイ工場―近藤資本に対決し、人文社の労働者が闘いを組織していったとき、出版労協―総評―日共系は、全く無力だった。

すでに近藤資本が、現実の反革命軍事体制の一翼として、自からの使命を定め、労働組合の存在をみとめず御用組合化のワンマン体制を一番強めようとしているとき、これと対決し抜く以外に、闘いの方向はない。

労働者の闘いを、ブルジョア秩序内の議会主義―組合主義の枠内へ押しとどめるのは、労働者を、資本の前に屈服させ、権力のエジキにさせる以外の何物でもない。

三十四・五年頃、ドル危機の出つばじめに、まきおこつた中小企業の労働運動を、「労働者は、中小資本の反独占の面を無視してはならない。中小資本が、反独占の闘いをするかぎり、労働者は、中小資本と連合し、中小資本を助けて闘うべきである。」とし、民族民主革命二段階革命路線の下、民主連合政府の建設という方針をうちだし、まきおこる闘いを「議会を守れ」安保闘争へ集約し、闘いを押えてしまった。

この無力化し、破産した路線に、いまだ固執し、労働者が、もつているところの労働力商品所有者意識を固定化再生産し、権力と対峙し闘い抜く労働者の形成を押えているのが総評―出版労協であった。

△ 怒り狂う近藤ワンマン

団交拒否。百余の処分。デッチアゲ告訴

労働組合結成に際し、個人的によびだし、どう喝を加えたり、賃上げをほめかしたりのムチとアメで、なんとか押えこもうとした。だが、それが、不可能と分ると、近藤資本は、怒り狂つた。

一方、労働者は、闘いの妥協と一時金闘争の不貫徹の中で、政治的にとらえきれず、自ら何を行なっているのかわけが分らなくなりいわゆる挫折と苦悩にさいなまれた。

年あけて、七一年に入り、資本はそその機能をフルに使つて、業務を分化し、販売部門の切離し―人文社出版センターを設立し、労務機構の再編総合。商品在庫の大量確保などを行ない、労働組合への分断・きりくずしを狙つてきた。

この資本の攻撃と、労働者の苦悩―挫折の中で、労組は、脱退者を出していった。だが、脱退者は、第二御用組合へとは、集約されなかつた。すなわち、労働組合へとより強固に結集しえずとも、資本の側につかぬほど、労働者の憎しみは大きなものだった。

そして、労働者は、苦悩から、自からの入総括Vを行い、春闘へ向つて戦列をかためていった。

△ 春闘にむかつて、永続的闘争の宣言

労組は、春闘にむかつて、昨年の処分撤回告訴粉砕闘争の総括を行なつた。

それは、①、要求貫徹の問いかえし、②、権利は、賃上げと有機的関連をもつ、③、地域労働者との闘いの結合、という三点にしほりつつ―自からが、知らぬうちに、ブルジョア秩序への補完物―になつていくことへの鋭い問いかけ、その克服にむけての闘いの思想。戦略そして闘争形態を追求していった。

そして、労働者は、「己れをかけて闘う以外に取るものをもたぬ。」と、闘いの思想をうちかため、春闘にむけて「処分撤回・告訴粉砕の闘いは、一三、〇〇〇円の一律ベース。アツプに近づいたため弾圧突破でしかない。」と、闘いの戦略を打ち出し、「労組は、

闘争体であり、運動体であり、資本との闘いの中でいかなる労働組合を作るかが問われているのだ！」を闘いの形態の追求を行なっていた。

これらの方針は、資本の再攻撃の中で、労働者が、非妥協的・永続的闘争を行うとの宣言であったといえる。

△ 団交拒否―社長逃亡

そして、ロック・アウト

この労働者の闘いの宣言は、三月十五日、賃上げ要求を行い、デモストライキを含むあらゆる戦術を駆使した闘いへと発展していった。資本は、労働者の分断支配から、例によって、団交拒否・社長逃亡をしていった。そして、再々度の攻撃をかけてきた。ブルジョア法的にも全く無法なロックアウトをかけてきた。六月二十五日だった。

△ 政治警察の強権的弾圧体制下へ

労働者は、不当なロックアウトに対し、実力で毎日の就労闘争を行なっていた。

そして、泊り込み、集会、デモ、職制追及等々の闘いをおこなっていた。

闘争は、非妥協的・永続化の様相をおびてきた。そして、資本は権力と結託して、弾圧の全てを、権力にゆすりわたし、ロックアウトを七月二十五日といていた。すでに、レベルはひかれた。

政治警察は、昨年来の暗躍を、ここに、公然とあらわした。

五月七日の団交を口実に、大阪府警警備課は、三ヶ月もたった八月十日朝、十六・七日の両日の三日間で、八名の労働者を、暴行・

強要・傷害等の罪名で逮捕した。そして、検察当局は、数名の任意出頭をかけた。

まさしく、労働者の永続的妥協的闘争体制の前に、資本は、国家権力―政治警察を前面におしだし、職制層をしてマスコミと一体になつた強権的弾圧体制下に、人文社分会をおいていった。

△ 権力・資本・マスコミの強権的弾圧体制をはねのけて

近藤資本のワンマンドレイ工場は、その本性をあらわにし、国家権力―政治警察を、全面的に前面に押しだし、職制層をしてマスコミと一体になつた強権的弾圧支配体制として強められ、一層の搾取をやり抜こうとしている。

マスコミは、「全港湾分会員を逮捕」「団交暴行――一連の騒動も追及」との見出しで、「五月から六月にかけて、続発した西成地区の騒動で、全港湾労組が、労働者の扇動的役割を果たしたとみており、七月二十三日の全港湾西成分会の三人逮捕につづく、今回の摘発も、一連の騒動の背後関係を糾明するのが狙い」と、権力のタレコミ記事を流している。

だが、労働者は、弾圧されればされるほど強くなる。バクられた者・任意出頭の者も全て、完全黙秘で、三日―十日間を闘い抜き、弾対活動も、差し入れから警察への大衆行動、裁判所への大衆行動を、家族を含めて行なつた。

そうして、早期奪還を勝ちとり、強権的弾圧体制をはねのけていく、反撃の体制を強めている。

釜ヶ崎闘争

釜ヶ崎

―あくなき搾取・収奪

一日使い捨てドレイ市場の街

数年前、闘争の後、あいりん地区とブルジョア権力共によつて名づけられたところが、釜ヶ崎である。いくら行政的に名称をかえても、労働者は、相変わらず釜ヶ崎(釜)という。

小手先の手口でさええることのない、日雇建設労働者の街が、釜ヶ崎である。

△ 「一日使い捨て」で労働者の生き血を吸う搾取

釜ヶ崎には、二万人ぐらゐの労働者が生活している。

鹿島建設、竹中工務店、大成建設、大林組などによつて建てられたビルディングは、釜ヶ崎労働者の生き血を吸って、みにくい姿をそびえたせている。

労働者の街・釜ヶ崎の朝は早い。朝五時三〇分すぎから、釜ヶ崎は求人トラックが、新今宮駅前からたちならび、手配師の活躍がはじまる。

大手の建設会社などの下請、その又下請の飯場(例えば、竹中工

務店(元請)―片山工務店(下請)―平田興業(飯場)へ、手配師を通じて送りこまれる。手配師のピンハネは、すごい。一人四、〇〇〇円のうち、一、八〇〇円ピンハネし、釜の労働者には二、二〇〇円しか渡らないのである。全く、一番末端の労働力である。

トラックにはりつけられた求人内容―日当・仕事の内容―によつて、その日の契約を行う。そして、飯場―建設現場などに送りこまれる。

いわゆる組織された労働者のような、社会保障―健康・失業傷害保険等―は、ない。途中から雨がふれば、半日分あるいは足代だけで掃き、又、残業しても、口約束の日当は、残業を含めての日当だといわれれば、そのまま、夜の九時十時まで残業手当なしで働かせられる。

もつとも危険な現場で、重労働をしているのだから、ケガをし、死者が出ることが多い。だが、何ら保障もなく、あつても涙金である。もちろん、一時金もなく、住宅手当とか家族手当などない。

このように、戦後民主主義下の産物の労働法の適用からはみだし、全く生命の保障もなく「一日だけの安い賃金」で、ケガをしようとするのと「一日、ポロ切れのように使い捨て」られる。

もつとも、資本に、都合のよい労働力を供給しているのが、釜ヶ崎である。文字どおり、昔の青空ドレイ市場ならぬ、現代の青空ドレイ工場が、釜ヶ崎である。

「安い労賃」を、なんとかケガもせず、生きて持つて帰れば、高いドヤ賃(一畳―二五〇円、二畳―三〇〇円―三五〇円、月に一畳―七、五〇〇円、二畳―九、〇〇〇円―一〇、五〇〇円、六畳に換算すると、三六、〇〇〇円―四五、〇〇〇円)と、食堂、オールナイトの酒

屋、パチンコ、パクチなどの収奪がまつている。明日も働けといわんばかりに……。

まつたく、八方から押えられ、ハダカひとつ労働力以外何も無い状況に日々おかれ、「一日使いですて」青空ドレイ市場が、釜ヶ崎である。

△ 行政官庁と結たくして、ドレイ市場を維持し、

あくなき搾取・収奪

行政官庁―大阪府、大阪市、労働基準局、そして、六一年の闘争の後出来た、西成労働福祉センターなどは、搾取・収奪のもつとも手緩な「一日使いですて」労働力の維持のために、資本の忠実な犬となつてゐる。

大阪府と西成分会の団交の席上、釜ヶ崎ドレイ市場に労働力を求めてくる業者の半数は、所在地等は不明であると行政官庁はみとめ、全く、現在の法―日雇失業保険、健康保険、労基法、建築基準法など―は、適用されてゐない。

行政のあたたかい手を―とか、〆あいらん地区〆と名称をかえてみても、また、デツカイ建物―ピンハネセンターをたてて、近代的装いでもつて、労働者の八方ふさぎりの不満・怒りを、そらそうとしている。

△ その手先としての「日本共産党」

「日本共産党」は、やれ民主府政だとか、やれ民主勢力の勝利だとか、夢の中の雲をつかむようなはなしで、現実の釜ヶ崎ドレイ市場粉碎―解放の闘いに、敵対している。

現実には、「日本共産党」の支持の下、成立した黒田府政において

も、さらに、民主的ヴェールのもとに、「一日使いですて」釜ヶ崎ドレイ市場を、温存していつてゐる。

さらに、労働者の闘いを弾圧し抜いている官憲とマスコミと一体になつて、「日本共産党」は、大阪民主新報は、釜ヶ崎の闘いを、騒動・暴動といひ、トロツキスト云々と分断攻撃をかけてきてゐる。

ドレイ市場の支柱―公安政治警察機動隊

一〇人くらいの若い屈強な機動隊員が、警棒を抜き出しにして、毎夜、釜ヶ崎をはいかいてゐる。そして、私服共が、飲み屋で、食堂で、パチンコ屋で、労働者スタイルで、目をいたるところで光らしてゐる。

三角公園には、高い鉄塔の上に、テレビをつけて、警察所から監視してゐる。

西成署は、生野署（在日朝鮮人）と曾根崎署と並んで、大阪府下でも、もつとも大きな警察である。常に、機動隊の出動出来る体制をしいてゐる。

六一年八月一日、交通事故で死んだ労働者に対する警察の処理の仕方に反発し、派出所襲撃などの闘いが、三ヶ日間つづいた。

六〇〇名の機動隊を投入し、タテと警棒で弾圧し、一一一名の逮捕者を出した。

そして、六六年五月二八日から三日間と、六七年六月二日から四日間、パチンコ店、食堂、警察署への襲撃などの闘いがあつた。

これらに対し、権力は常に、大量の機動隊―私服で、大量検査―弾圧を行ない、ドレイ市場の維持―支柱の役目を果していつた。

組合結成

戦後民主主義の枠外におかれた釜ヶ崎日雇労働者に対し、幻の民主主義者共が、組合を作ろうとしたが、全て失敗した。幻想の民主主義にのしかつた労働組合は、枠外におかれた釜ヶ崎労働者に適用しなかつた。

だが、ついに、釜ヶ崎に、労働組合が結成された。数年前、港湾労働法に基づく登録日雇労働者の組織―全港湾大阪港支部を作りあげていつた全港湾の下に、建設支部西成分会が生れた。

時は、一九六九年五月二十三日だつた。

一九六九年三月から四月にかけて、一二名の活動家―マジ粉砕闘争を、完全勝利に闘い抜いた三座建築事務所の労働者と、結合して生れた。

「この三座分会と、西成分会の結合は、労働者階級の分断を粉砕するものとしてあるだろうし、又、相互の視点を批判しながら、一歩、一歩着実に、展開しなければならぬだろう。現場にあつては、管理者と被管理者に分断され、ネクタイとナツパ服に分断された我々の分断を何でもつて何でもつて克服し、我々の結合を創りだすのか？」

だが、建築設計労働者と、建設日雇労働者は、建設業界の全般的な非近代的雇用形態、元請、下請制度の中で、等しく、劣悪な労働条件の中で未組織の下におかれてゐる。「その考え方から、建設支部は生れ、「未組織労働者の組織化」を行ない、「建設支部を単に分会の上部組織化としてではなく、真に闘う労働者の共同組織として勝ちとるだろう。」

六九年五月二三日、西成市民会館に、一五〇名の労働者が結集し

て、熱気の中で建設支部西成分会を結成した。

それは、権力・資本・手配師などから訣別ののろしであり、ドレイ市場粉碎―労働者解放の闘いの第一歩だつた。

行政官庁との団交―報告集會

連日の駅頭ピラ

地道な闘いが、始まつた。闘いは、ピラまきからはじまつた。機関紙「大阪城」が、週に二回、新今宮駅前配布されていつた。

◎ 西成日雇労働者への呼びかけ！

怒りを冷たくもやそう、地下水のように

人目のつかぬところで、

日々、ふかく大きく組織されてゐる。

怒りを、ときすまそう、

俺たちは、黙々と、真の実力を

身につけよう！

酒で、怒りをわすれるな！

地下水のように、地中ふかく流れる

俺たちの怒りは、釜ヶ崎だけでなく、

日本全国にいつながつてゐる。

俺たちの怒りは、そうだ！！

ピストルも、戦車も、ジェットも

もえつくす怒りだ！

怒りを、組織せよ！

（機関紙「大阪城」第三六〇号）

このようなピラが、連日、釜にまかれた。

ピラは、訴えと共に、大阪府、大阪市、建設業協会、万博協会、労基局などとの団体交渉の報告、働いている現場での問題点、釜ヶ崎のまじのこと——ドヤの部屋代、南京虫、メシ代、酒屋のことなど——そうして、世界の動き、日本の動きのニュースなどなどの内容をもちこんで入った。

そして、この「大阪城」は、釜ヶ崎の中に定着し、生き生きと浸透していった。

大阪府、大阪市、建設業協会、万博協会などとの再三の団体交渉が、つづけられた。

又、西成労働福祉センターとの大衆団交もまこなつてゆき、釜ヶ崎労働者の参加を得ていった。

あいりん会館での大衆集會を定期的にもつていった。そして、三角公園での大衆集會（大雨で流れる。）も計畫した。

九・五の西成労働福祉センターでの大衆団交では、差別発言（労働者発言）に対する大衆的追及をも拒否し、団交拒否をつづけ、あげくのはてに、機動隊—私服を導入して排除された。

このように、行政官庁・関係資本家団体に、団体交渉をねばり強くつづけていった。

年末には、年末一時金を要求したが、力量不足でダメだった。

三角公園で決起集會。メーデー集會

七〇年に入つて、大阪府に—一項目の要求をつきつける。

そして、三月二五日、「釜ヶ崎日雇労働者の権利と生活を闘い取

る決起集會」を行い、五月一日には、権力によつて「最も事件が多発する区域であり……公共の安全に差し迫つた危険が、明らかに認められる。」として、釜ヶ崎地区でのデモンストレーションは禁止されたが、初めて三角公園で、メーデー決起集會を行なつて、新今宮駅まで々さみだれデモを勝ち取つた。五月二三日には、西成分会—周年「映畫メタベ」を開き、四五〇名を集集する。

行政官庁・関係資本家団体への団体交渉をかきねつ、大衆集會をかちとつていった。

西成労働福祉マンモスセンターへの闘い

七〇年一〇月、西成労働福祉マンモスセンターは、開所された。万博の祭りが終つた後。労働者は、これを、ピンハネセンターとよぶ。文字どおり、新しい装いをこらして、万博後の労働市場を調整し、一層のピンハネせんとするものだった。

当然ながら、労働者の闘いの焦点になつた。

一〇月一日以降、連日、センター前で、抗議行動—ピラまき、組合オルグ宣伝活動等を行い、大阪府、市へむけて、大衆団交をかちとり、府庁・市庁を制圧していった。そして、闘いは、おこつた。

自然発生的であれ、明確に、福祉センター—ピンハネセンターにむけて闘いがすすんだ。

労働者の生活が、もつとも苦しくなり、毎年一〇名近くのゆきだおれを出す年末。年始にかけて、何らの対策の手もうためセンターに對し、抗議行動—闘いがおこつた。一二月末のことだった。

五・一メーデー。デモの成功と

暴力手配師—警察権力・マスコミへの闘い

六九年五月、組合結成以来幾度となく、年末一時金、夏期時金、そして日当手当の引き上げ、手配師の追放などのささやかな要求に對し、行政官庁。資本は、何ら答えることなく、デツカイ—ピンハネセンターをたて、一層、巧妙に、「一日使い捨て」労働市場の確保・維持につとめてきた。

だが、労働者は、組合の地道なピラ・集會・団交等のねばり強い闘いをつづけた。

そして、遂に、釜ヶ崎地区において始めて、労働者の怒りのデモンストレーションをかちとつていった。

五・一メーデーとして、五〇〇余名の戦闘的大衆的デモンストレーションが、労働者の街の中で展開された。

全く、畫期的なものだった。二年足らずの労働者の闘いが、ようやく釜ヶ崎「一日使い捨て」労働市場の真只中で、行動として、組織された行動として展開されていったのである。

それは、二年の闘いを、一層、飛躍させるに十二分の圧倒的な勢をもちつたデモンストレーション だった。

労働者は、たち上つた。

「一日使い捨て」労働市場を、先端において、資本の手先として担つている手配師追放の闘いが、種々な闘いとその形態でもつて展開されていった。

センターの前で、飯場現場で、手配師の会社で、創意と工夫にみちた闘いが、展開された。

だが、この先たんの攻防に對し、資本は、「一日使い捨て」の低

賃金労働力市場の崩壊に危機を感じ、佐家の宝刀—警察権力・私服を使つて、弾圧してきた。

闘いは、手配師追放の闘いを含みつつ警察権力との対決の姿を、当然ながら含み、永続的様相をもつてすすんだ。

かつて、六一年、六六・六七年には、三・四日間だった闘いは、一週間連続してつづいた。七一年の五月二四日以来、一週間つづいたのである。

そして、闘いは、つづいている。

この闘争におそれおののいた権力は、労働者の永続的・組織的闘いの前に、その分断策動を、「日本共産党」の手をかりながら、又、マスコミを使つて、デツチあげを行ないながらすすめた。

労働者がドレイ市場への闘いを、手配師追放としてすすめているとき、その闘いを、暴力的に、弾圧し、手配師を保護し、資本の犬の自分の姿を陰蔽し、もはや、力だけで押えきれぬと分ると、労働者の分断策動を強めていったのである。

闘争を△暴動▽とか△騒動▽に歪少化し、その△暴動▽△騒動▽は、労働者の自覚した闘いとしてではなく、あたかも△過激派▽があつたかの如く、ごていねいにも赤軍派ヘルメットをおいたり、火炎ビンを投げたりして、デツチ上げと、分断—弾圧の口実を作るうとした。

そして、これの手先に、マスコミキャンペーンがあつた。

そうして、建設支部、西成分会への弾圧のレールをひいていったのである。

弾圧に抗し、七・一八建設支部の集会を二〇〇余名結集して開く

以下、七・一八集会の基調報告を記す。

七・一八建設支部

緊急報告集会／基調報告

全日本港湾労働組合 関西地方本部建設支部

△ 釜ヶ崎解放！ 権力の弾圧をはねのけ、釜ヶ崎労働者の決起を断乎防衛せよ。

△ 人文社闘争勝利！ 人殺し低賃金粉砕、近藤資本権力一体となつた、ロツクアウト攻撃を阻止せよ

△ 小林闘争勝利！ 首切り粉砕、資本のカイライ、右翼組合を解体し、闘う労働組合を建設せよ。

△ 内藤闘争勝利！ 首切り告訴粉砕、資本権力の手先右翼暴力団追放。

△ まき起る中小企業労働者、未組織労働者の闘いを、断乎勝利へ！！

三里塚、沖繩の闘いに呼応し、階級的、戦闘的労働運動を拡大強化、資本権力の弾圧包圍調査つきくずせ！

釜ヶ崎解放！ 人文社、小林、内藤闘争の勝利をめざして結集された、全ての皆さん！

本集会の最大の任務は、我々に関りのある、これら、四つの個別闘争の詳細な、報告を受ける中から、闘いが、共通した内容を持つて

いる事を、我々の体質としての鋭敏さで受けとめ、その内容の普遍性！全ての労働者の闘いに深く関る事を明らかにする事に在る。建設支部の闘いは、四つの闘いに限らず、組織される事から、放置され続け、資本の圧政の直接的な支配のもとにある。日雇労働者、中小企業労働者の、憎しみのあらわれとして、噴出して居る。建設支部は、六九年春、大量首切りの攻撃を受けた。三座分会がなりふりかまわず、最も戦闘的だと聞いた。全港湾へころごこみ、地区の闘う労働者、反戦青年委員会の仲間と力を合せて、この攻撃を阻止した所から、始つた事に、我々の憎しみと、闘いの内容が、最も、象徴的に表現されている。

我々建設支部は、何度同じ質問に出向したか知れない。「建築事務所労働者や、地図出版の労働者や、自動車部品を販売する労働者や、全港湾におるんや？ それにも増して、釜ヶ崎の日雇労働者と共闘し、聞く所によると、反戦派労働者も「諸君闘つては、どう困つてしまふ。けれども、そう質問する人々が、そうならざるを得なかつた。建設支部各分会の闘いを、ワイ小にしか、受け止めてない事を知ると、いつも残念に思い、増々闘いを押し進めて来る訳だ。

闘いに勝つ為に、弾圧をはねのける為に、生活を闘い取る為に、もつともふさわしい、闘いの陣型を組むのは、当然ではないか！七一年五・一釜ヶ崎初のデモ、メーデーデモ行進の中に体现された我々の、とりつくしえもないほどのエネルギーを、我々は誇らかに言う事が出来る。我々は、西成分会と釜の労働者の、圧倒的な力で切りひらかれて行つた、解放された通路を、狂喜して、埋めつくした事を、我々二年間の、最もとくいとす。

その様にして、結集された、建設支部は、生い立ちのままに、なりふりかまわず、闘いの場へ出向き、大阪、京都で、圧政の限りをつくしている、人文社近藤資本、内藤資本に対して、憎しみと、怒りを爆発させて立ち上つた、労働者と出会つた。

西成分会の仲間達は、せつせとピラをまき、それは、既に、機関誌「大阪城」は、三〇〇号を越え、何度も何度も、行政やら、業者やら、関係ある所、釜の労働者から、しほり取つて居る輩の所へ出向き、説得し、大衆的な力で、「釜の小中学校をつくれ！」、「南京虫追放」「あぶれ手当出せ」「ドヤ代下ろ」と要求し続け、時には、機動隊の出動をまねいたりもしたが、少しづつ、資本、権力から、獲得してきた。

この様な、建設支部の闘いに、最も注目したのは、味方はともあれ、敵！資本。権力であるかもしれない。この間の、我々の闘いに對する、資本。権力一体となつた弾圧体制が敷かれて居る事が、それである。

大阪人文社に於いて、いなおつた近藤資本は、昨年の我々の一定の勝利を、押しつぶさんと、人殺し低賃金、差別賃金を、しつように押しつけ、団交を拒否し、分裂策動をくりかえし、政治警察と結託して、デマ、デッチ上げ、分断攻撃を行い、ロツクアウト攻撃をかけて来ている。そこには、あまた所なく、弾圧によつて、労働者を屈服させようとする、むきだしの資本の姿が暴露されている。

京都内藤に於いても、同様である。昨年末、起ち上つたばかりの、労働者におそいかつた内藤資本は、一時金低額回答を押しつけ、第二組合をデッチ上げ、団交を拒否し、今年に入るや、首切り、不当処分をもつて弾圧をエスカレートし、その事だけでは、労働者を屈服させ得ない事を、思い知らされている資本は、右翼（学生、ガ

ードマン、ゴロツキども、暴力団を使い、職場の暴力支配を七ヶ月に渡つて続けている。そして、政治警察京都府警は、資本と一体となつて介入し、暴力事件をデッチ上げ、闘う労働者を逮捕し、告訴し、売質な、マスコミを動員して、闘う労働者に対して、分断キャンペーンを行つて居る。

そして、建設支部の闘いを、最もまつすぐに受け止め、内在化させて起ち上つた、釜ヶ崎労働者の五月六月連続闘争に対しては、正しく戒厳令体制で臨み、多くの、闘う仲間をうばつた。そして、一方では、みえすいた、カイジユウ策を一〇年あいもかわらず出し、一方では、マスコミキャンペーンで、デマを流し続けている。いわく、過激派学生におどらされたといふ革新府政をだいなしにするといふ？

又、小林商店で闘いを始めた一人の労働者に、資本は、首切りをもつて応えた。そして今や、その闘いが、地区の労働者の連帯のもと、くじける事がないのを知るや、右翼同盟と一体となつて、第二組合作り、精出すといつた有様だ。小林商店で働く仲間が集つて、労働条件に関する、七項目要求をつくつた、それを中心的に荷つた一人の女性への応え方が、首切りであり、パトカー、私服が、ウロチヨロするは、いつたどういう事か！

資本権力の攻撃は、一貫している。やつらは、自らが、生きのびる、死命線の一つを握る中小企業労働者、日雇労働者を、圧殺し続けるしか、手がない事をよく知つて居る。そして、その圧殺に抗して、起ち上る、我々の、直接的な、資本に肉迫してゆく闘いが、普遍、拡大する事に、階級的な恐怖を感じているのだ。せつかく、六〇年代を辿り、賃上げ、合理化のとり引きの中で、骨抜きにし、戦闘性を奪う事に成功したと思つて居る組織された労働者の中へ、

憎しみを込めた、我々底辺労働者の、組織されざる労働者の闘いが、拡大、浸透して行くのを、恐怖しているのだ。そして、中小企業労働者、日雇労働者の闘いを、間接的ではあれ、最も勇気づけた一〇・八羽田闘争以後の、全共闘、反戦の闘いが、我々の中に、かみくだかれて、波及して行くのが恐ろしいのだ。

建設支部の闘いは、目的意識的に、資本権力が、おそれる様にと、運動した訳ではなかつたけれども、みはなされ、組織されざる我々が、闘いを組んだ時、そうなる行つたのである。しかしこれは重要なことだ。我々は、自分達の闘いの、素晴らしさと厳しさを、四つの闘争に、端的にあらわれている、資本権力の狂乱ぶりから、逆に知らされている。いままさ、なりふりかまわず、始めた我々の闘いを、しかめつらしく総括しようと言うのも、ためらいを感じるけれども、我々は、それなりに、準備を始めなければならない。公然と且つ権力に対しては、つかみどころもなくしつっ！

我々は、その様に、資本・権力の弾圧に抗して闘いぬいている、多くの仲間達を身のまわりに知っている。ゼネスト闘争を闘う仲間、全金細川鉄工、港相互タクシー、朝日新聞臨労組、平和台病院闘争を闘う仲間達、その他数多くの！我々は、これらの仲間が、しわよせのふきだまり、スクラップ&ビルトの嵐の中、奴隷工場をつきやぶつて闘い抜いている事に対して、自らの闘いを闘う中から、連帯して行かねばならない。

そして、同じ様に、日本帝国主義の最も、かくしておきたいと願い、分断差別でもつて支配して来た部分からの闘い、最も抑圧された下層労働者人民の闘いを、我々の、は、かきわけろ。三里塚、沖繩、在日外国人の闘い、部落、自衛隊、水俣の闘いの中に！

神戸……平和台病院の闘いなど、
京都……内藤闘争の外、畑鉄工、反帝労組の闘い等
十指に余る闘いがある。

これらは、三つの報告した闘争と同様の資本・権力・右翼・マスコミ等の敵の弾圧陣型に、決してひるむことなく、永続的闘争として闘い抜かれている。

未組織の中小、日雇、臨時等の下層労働者の闘争は、まきおこり、永続化している。

ある弾圧された労働者は、次のように言っている。
「ほんのささやかな賃金引き上げの要求すら認めず、団交を拒否し、相手は逃亡する。やむえず、押しかけたり、怒りをぶつつけると、右翼・ガードマンや職制を使ってドウ喝し、あげくの果てには、ささやかなことで、告訴し、権力を介入させ、ブタ箱に何日も送りこむ。そして、労働者の首をきつて街頭に放りだす。

だから、私は、自分の全生活に、おもいをめぐらし、生活者としての論理をもつて、地区の労働者と共に、敵の弾圧包囲の網を打ちやぶる永続的な闘い以外にないと思う。」

なぜ、資本・権力・右翼など一体になつて
闘いを強権的に弾圧するのか

以上の報告や、労働者の話にもあるように中小・日雇・臨時等の下層のプロレタリアートは、なぜ、ささやかな要求すら認められず、ぶみにじられ、強権的弾圧をうけるのか？

又、このことを追及することは、闘いの必然性を明らかにするだ

我々は、未だ、別の戦場で闘っており、その闘いの深さも異なるが、敵を同じくして、闘っている事を深く心にとめよう！

我々は、建設支部二年の闘いをふまえつつ、まきおこる、中小企業労働者、未組織労働者の闘いを断乎勝利へ！三里塚、沖繩の闘いに呼応し、階級的、戦闘的労働運動を拡大強化し、資本・権力の弾圧包囲網をつきくずせ！

本集会の中から、我々の飛躍をかけて、釜ヶ崎、人文社、小林、内藤闘争の勝利にむけて、次の一步をふみ出そうではないか！

ドレイ市場粉砕の火は消えない

この集会を経て、一週間もたたぬうちに、弾圧の序曲がきられた。五・一メーデー、五・七人文社闘争、五・八西成闘争に対し、三ヶ月もたつた、七月二日から八月末までの一ヶ月間に、一二名に及ぶ逮捕を行つていった。

そして、つづいて、弾圧を狙つている。
だが、いかなる弾圧をも、ドレイ市場粉砕の火は、消すことが出来ない。この火は、かならず、弾圧という油を得て、一層、野をもやきつくす。

以上、三つの闘争の報告を行なつたが、今年四・二八闘争後も、中小企業・日雇・臨時労働者の闘いは、僚原の火の如くもえひろがつている。

私の知つているだけでも……
大阪……人文社、釜ヶ崎闘争の外に、朝日新聞臨労の闘い、港相互タクシーの闘い、小林商店首切り撤回の闘い、細川鉄工の闘い、ゼネラル石油の闘い等々、

ろう。微力ながら、考えてみたい。

△ 資本の安全弁——中小・日雇・臨時労働者層

日本資本主義は、近代に入つて、封建時代以上に、農民を、地代という近代的ヴェールでもつて、強搾取・収奪し、その基礎をきずいた。

そして、これは、第二次大戦まで基本的につづいたといえる。
日本のブルジョアジーは、農村を、解体し、ブルジョア化し抜く

ことなく、小作人制度で収奪し抜きつつ、労働力としていつでも不況になつたら農村に帰れるところの産業予備軍——低賃金構造として温存し、又、大日本帝国軍隊の人的再生産補充構造として存在せしめた。

これらは、階級解体の構造としてあり、国家の中核の帝国軍隊のイデオロギー——天皇制イデオロギーの支柱としてあつた。

すなわち、日本のブルジョアジーは、農民層を、もつとも搾取・収奪した。

そして、もつともしいたげられた農民層に依つて、帝国主義戦争は、展開され、それは同時に、農村——農民層の徹底した疲弊であつたといえる。

戦時中、農村の労働力は、軍隊か、工場に吸収され、農村は疲弊した。そして、戦争直後、都市工場労働力・軍隊人口が、農村に集中し、矛盾が集中した。

これを、農地改革で、地主——小作人制度を崩壊し、自営農民化して再編した。

そして、戦後二六年間において、ブルジョアジーは、農村を解体し、もはや農業人口は、一〇パーセント以下である。

農村を解体し、その人口を、都市プロレタリアートとして、都市に吸収していった。

もはや、帰るべき農村をもたぬ都市プロレタリアートが、労働力である。

ブルジョアジーは、戦前の農村に代つて、都市の中に、低賃金構造と、帝国主義軍隊の人的再生産構造を求めた。

それが、都市の中の中小企業・日雇・臨時等の未組織労働者層である。それは、資本の安全弁であり、帝国主義の展開の軸をなすものであろう。

△ 下層の反乱は、帝国主義総体へ波及する

日本帝国主義は、自衛隊―帝国主義軍隊を中軸に、その戦略的物資供給輸送を、大企業官公労協―帝国主義労働運動で押え、その利益、国防論から、生産性向上思想等を、国境―民族―在日外国人管理法で、そのイデオロギー化し、これらの戦略的なるものを展開する安全弁として、中小企業・日雇・臨時等の未組織労働者層をもつている。

だから、この帝国主義の安全弁―補充基地での反乱は、総体を問うものであり、総体をゆるがすものである。

その闘いは、必ず、在日外国人や、部落民、沖繩人民、農民等と結合する。なぜなら、中小・日雇・臨時労働者の内実が、在日外国人であり、部落民であり、もつともしいたげられているからである。そして、その闘いは、必ず、大企業、官公庁、運輸部門の労働者に波及する。

また、自衛隊―帝国主義軍隊にも波及する。そして、それらの闘いは、必ず、帝国主義軍隊―自衛隊内の弾圧、大企業内の弾圧と同

質の先行的弾圧をうける。

△ 日帝―アジアの憲兵へ

今日、世界は、革命戦争を軸に階級闘争が進展している。この革命戦争に、対応して世界は動いている。ヴェトナム革命戦争の敗北から、ドル危機をもたらし、政治的危機におちつたニクソンは、米中会談を、中国に再三たのみつつ、八月一六日のニクソン演説をして、さらなる陰謀をたくらんでいる。

中国が、現在、主に執ように、日本軍国主義として日本を攻撃しているように、アメリカは、日本帝国主義に、アジアの憲兵の役割をになわせようとしている。

そして、日帝は、アメリカ帝国主義との関係を保ちつつも、自立化を一層押しすすめ、台・日・韓の運命共同体的展開を一層強め、自衛隊―帝国主義軍隊の強大化につとめている。

このようなき、帝国主義は資本の安全弁をとりはずし、帝国主義総体の解体へ波及するような「中小・日雇・臨時等未組織労働者」の闘いを放置しえないで、弾圧し抜き、分断し、芽のうちにつぶし抜く以外に手段をもっていない。

△ アジア憲兵化へ拍車―ニクソン演説

八月一六日の「ニクソン演説」にみられるように、戦後、圧倒的なドルの力量を背景に作りだされたIMF国際通貨体制は、早くも一九五八年に危機におち入り、ベトナム革命戦争の激化の中で、そしてアメリカ帝国主義の敗北の中で、又、日帝・西独帝の新興帝国主義の抬頭の中で、ドル流出は、防ぎえず、ついに、崩壊し、金とドル交換の一時停止になつたのである。

アメリカ帝国主義は、この資本主義の危機に対し、その原因となつた、第一のベトナム革命戦争―アジアの憲兵の役目の肩代り、第二の新興帝国主義国に対し、平価の引上げを要求し、国内の労働者に対し、賃金三ヶ月凍結という策に出た。

日本帝国主義は、経済的にも、百億ドルをこえた外貨―円切り上げの圧力をはねのけ、又、円切り上げの際の損失を少くするためには、資本輸出しかないといえる。

そして、それは、必然的に、軍事的なものになり、自衛隊―帝国主義軍隊の海外派兵と結びつかざるをえないし、又、労働者階級に経済的矛盾を押しつけ、一層の収奪・強搾取をつよめていくだろう。そして、それは、資本の安全弁に、もつとも矛盾が集中し、搾取―収奪の強化がすすむだろう。

△ 敵の陣型の強化―攻撃に対し

我々の陣型はいかに築き強化すべきか

以上からも明らかのように、帝国主義の攻撃の陣型は、自衛隊―帝国主義軍隊を中軸にして、大企業―重化学工業を抑え、資本の安全弁として、経済的危機・政治的危機に際し、機能しえる低賃金構造―軍隊再生産構造として下層プロレタリアートをアウシュヴィッツ的、強権的弾圧体制下においたものであるといえる。

そして、「報告」にもあるように、個別資本は、日経連の指導の下、政治警察―機動隊―私服を軸に、右翼暴力団・学生・ガードマン・職制等を、右翼突撃隊として組織し、同盟第二組合を使つて、生産性運動として展開せしめ、資本・権力・右翼の三位一体となつた、ファシズム的な、生産性向上思想を、右翼組織運動と結合せしめ、マスコミ等を使つて、労働者階級の中に、分断を押しすすめ、

階級解体を押しすすめている。

△ 敵の陣型の先兵―右翼突撃隊の粉碎を！

だから、資本と権力の間を、いわば媒介しているものとして存在しているところの生産性向上運動―右翼大衆運動を、同盟第二組合―右翼突撃隊―白色テロ集団を、権力・資本との対峙関係を作りだしつつ、粉碎し抜き闘いを行わなければならない。

その中から、我々の陣型を、敵の陣型の基底からゆさぶるものとして形成しなければならない。

すなわち、下層プロレタリアートの、中小・日雇・臨時等労働者層と、在日アジア人、部落民、沖繩人民、農民等と、深く強く結合し抜き、自衛隊―帝国主義軍隊内の闘いと、大企業―重化学工業内の闘いと結合、連帯し抜いてゆくところの陣型を作りだすことだろう。

△ 一〇・八以降の階級的労働運動の若干の総括

我々は六七年一〇・八羽田闘争以降の一定の政治的高揚の中で、街頭政治闘争に、常に参加し、学生の勇敢な闘いにはげまされてきた。そして、六九年四・二八沖繩闘争では、我々も、学生と共に、ゲバ棒を手にして先頭にたつて闘い抜いた。

その間、我々は、政治闘争に参加しつつ、報告パンフレットや、八ミリアルムを使いつつ、職場の中で、地域で、政治宣伝し、新たな政治潮流を形成していった。

だが、政治闘争に、労働者が、学生と共にゲバ棒を手にして当揚し、自らの生活をかけて闘い抜く部分を軸に、職場・地域に、強固に深くひろい戦列を作りあげていく前に、権力と一体になつた資本

は、政治警察一同盟第二組合「マスコミ」等を使つて、労働者階級の分断攻撃を強め、自らの生活をかけて政治闘争を闘い抜く活動家をパージしていった。

この攻撃に対し、地区反戦労働者・学生を中心に、地区共闘という闘争形態と、実力闘争によつて、マツダ自動車販売・植田齒車・ナス電機等々が、闘い抜かれた。

しかし、いわゆる全共闘運動の発展に影響された自衛武装ソヴエト運動論によつて理論づけられた政治内容は、敵の陣型を見抜かず、又、生活・生命をかけた闘いへと発展していった労働者活動家に答えきれず、味方の陣型の強化にむすびつかず、闘いの敗北をもたらしたといえる。中電マツセンスト地区共闘は、その矛盾の焦点であった。

かつて、六〇年安保闘争の前段、五八年ドル危機を反映し、中小企業等の闘いが、まさおこつて、死者を数名だすところのシレッとな闘いがおこなわれた。

その闘いは、必然的に、地区共闘の形態をとり、個別実力闘争の展開があつた。

ところが、このプロレタリアートの闘いに対し、その指導をおこなつたところの日共は、民主連合政府・議会主義・労働組合主義の理論・政治内容でもつて、市民主義的安保闘争に集約し、プロレタリアートの闘い・実力闘争と闘争形態を解体してしまつた。

この現実を前にして、共産主義者同盟は生まれた。もつともしいたげられたプロレタリアートの闘いを解体させず、敵の分断攻撃に抗しきれる政治理論を追及していった。

そうして、関西においても、共産主義者同盟は、その政治の姿勢故に、もつともしいたげられたプロレタリアートと結合して行くこ

とができたのである。

敵の攻撃とその陣型に抗し、我々は、あくまで、実力闘争と、地区共闘形態をくずさず、もつともしいたげられたプロレタリアートの連帯を強め、強固な陣型、強固な戦士を生みだし、戦士を先頭に、右翼突撃隊を粉碎し抜く、政治内容の追及し、革命党の建設にむかわなければならぬ。

△ 自衛隊・帝軍解体にむけた

叛軍闘争と結合して、闘おう

自衛隊・帝軍解体にむけて、叛軍闘争を担っている労働者活動家はいう。

「我々が、政治過程をたどつて非和解的に権力に肉迫し、のほりつめた地平、一〇・一月闘争は、まさに、我々のイデオロギーが、日共と同様、戦後平和と民主主義の土俵上であることを見事に暴露した。

旧軍隊の解体を、人民自らの手でなしえず、主要に米軍の手で外在的になされた日本人民の歴史は、悲哀そのものであつた。人民は、終戦を安堵とタメ息でむかえ、前衛党「獄中一八年組」は、勝つた」と勝利感でむかえ、しかも、ごていねいに、米軍を解放と規定する仕末だつた。

血で書かれない労働者・人民の解放の歴史は、米軍からのおくり物・幻の民主主義と平和に満足し、そのブルジョア階級性に安住してしまつたのである。

そして、軍事をタブー視したのである。「戦争につながるもの一切反対」「自衛隊は戦力だから反対」「平和憲法に違反する自衛隊反対」「税金泥棒・自衛隊」「私生児・自衛隊」……として、自衛

隊員と、自衛隊を混同し、彼らへの批難・中傷し、自衛隊建設・軍隊復活とゆるしてしまつたのである。

そして、新左翼も、この枠から未だ抜けでていない。

賃労働と資本の関係を、商品交換関係と見て、労働力商品化がなくなつたら、解放されるとするイデオロギーは、労働者の中にある、労働力商品所有者としての意識にかかつたものである。そこには、資本家階級がスツポリと認識の外におかれ、日共の「中小資本も大資本に収奪されているから、共に闘おう」というのと、全く同じで、敵・味方はなくなり、中性化される。

だから、現実の敵の陣型と対峙し抜き、もつともしいたげられたプロレタリアートに依拠して闘い抜けない。

まして、自衛隊解体にむけての政治内容を展開しえず、自らの生命と、彼の生命をかけた闘いは、できない。」

我々は、敵の攻撃が、右翼突撃隊・政治警察・機動隊を使い、労働者分断・弾圧支配を狙つているとき、右翼・政治警察を粉碎し、その中枢である自衛隊・帝軍と、その補充再生産基地を解体し、革命軍を作りだすためには、日本共産党・スターリン主義や、新左翼内部の反スターリン主義の古いイデオロギーと政治内容から訣別し、資本家と労働者の対立が、その労働と所有の分離から生みだされ、非和解的なものとしてあるという、ごく当り前のことを、もつともしいたげられ、非和解的なプロレタリアートに依拠して、政治理論内容を展開していくことである。

まさおこる中小・日雇・臨時等下層のプロレタリアートの闘いを、叛軍闘争・自衛隊解体闘争と結合せしめ、味方の陣型を、政治的に

強固なものにしてゆかなければならぬ。

「マルクス主義は、階級闘争が、政治をとらえるだけでなく、又、

政治においてももつとも本質的なもの、すなわち、国家権力の構造をとりあげる場合に、はじめて、この階級闘争を、完全に発展した「全国民的」階級闘争とみなす。」

「階級闘争と、階級的抑圧のより広い、より自由な、より公然たる形態は、階級一般を廃絶するための闘争をプロレタリアートが行うことを非常に助ける。」(レーニン)

◎ 編集部註

山岡一雄氏は永年主に関西労働戦線を中心に活動してきた同志です。最近の労働戦線の注目すべき動向について寄稿を求めたところ、快よく応じてくださいました。われわれは氏の問題提起を今後の活動に生かし、革命的労働戦線の構築にむかうものです。

革命運動の総括と展望

— 日本革命運動の〈否定の否定〉のために —

佐野茂樹

はじめに——本論の目的

日本の革命的左翼は、世界および日本の大再編において、次の課題に直面している。第一は、自らの闘いをもつてきりひらいてきた数一〇年の歴史において自己形成し、現実生きてくる世界の主要な革命の要素・革命勢力と、固い同志的な結合をとりわけ革命実践において実現しなければならぬ。

第二は、今日の大再編の基調が帝国主義心臓部に世界革命の波をおしあげ、求心化しゆくものであるかぎり、帝国主義諸国、とりわけ日本における世界革命の独自の論理を鮮明にし、最下層のプロレタリア人民が生きた運動としての共産主義を獲得する道を共産主義の側から追究することである。

第三、前二者の総合。このことは世界革命の道を、その現在の焦点を、すでに切り開かれた地平（革命的労働者国家の現存と後進国革命戦争の勝利）に立脚し、そのもたらす帝国主義の危機を世界性の凝縮した国内階級闘争の死闘として問うことを意味する。

われわれは先験的に理論をうちたて、それから天降ることはできない。とりわけ、革命という巨大で具体的な創造物、何億というプロレタリア人民がたんに資本主義のみならず階級社会何千年の歴史・人間の汚物の根源的清算である以上、とりわけ革命理論についてそうである。だから、われわれは世界と日本の革命経験の総括に立脚し、展望の展望をうちたてる必要がある。

この見地から問題をたて、問題に接近することは、さらに日本革命的左翼の現実に根拠をもつ。われわれは日本革命運動の（第二の否定）を闘いとらねばならない。一三年前、旧共産主義者同盟が既成の代々木共産党（共産主義運動から分離した）（第一の否定）は、革命の実践によつてのりこえられた、あるいは、のりこえられたことを明瞭に意識するに至つていからである。

実践が理論をのりこえる、プロレタリア人民の革命的闘争が前衛および前衛をめざすものをのりこえて進むことは当然である。それは根底的な革命、その進行の明らかな証ですらある。実践を通して理論を検証し、革命運動をつねに革にすることこそわれわれの本来の革命性である。問われていることはこれである。この逆ではない。

六〇年代後半の世界の革命的実践はとくに日本の革命的左翼をのりこえてしまった。ヴェトナム革命戦争と中国文化大革命はその代表的な闘いである。同時期に日本革命的左翼が共働して直接に組織した実践すら不充分ながら、自己自身をのりこえた。このことに恐怖し、理論の理論主義的補正で自己防衛することの中は、すでに既成性と反動への転落、運動の墮落が宿つている。問われているのは、一三年の歴史をもつた革命的左翼運動の革命なの

である。

われわれは、日本の革命的左翼が出生において直接に依拠した実践基盤の狭さ——政治の狭少性Vのゆえに、部分的一面的観念的抽象的非歴史的な世界革命・プロレタリア独裁・暴力革命派に局限されてきたことを見ないわけにはいかない。言うまでもなくわれわれはそのような仕方ではか歴史に登場しえなかつたのであり、開かれた運動と理論への視点にたつきがり、そのこと自体を非難し清算することはできない。だが、そのような歴史への登場の仕方規定されて限界が顕わに生じているとき、つき出された限界の自覚を通して過去を揚棄しなければならぬ。何よりも、われわれは徹底して世界的規模の階級闘争を世界革命に転化する見地にたつて、階級闘争の運動する実体として対象世界をとらえねばならない。そして対象世界のどこに歴史的・現実的に位置しているかをつかまねばならない。敵、我を明らかにし、友をうきばりにすることは目的意識的な革命運動の原点である。だがこの点にわれわれは未確立であつた。そのゆえにこそ反スターリン主義、先進国主義V一種の社会排外主義への傾斜を内から許してきた。端的にそれは、国際的には植民地・半植民地・後進国革命に対する軽視、国内的には最も革命の欲をもつ最下層のプロレタリア人民のなかでの活動の動揺的召還的態度としてあらわれた。これは基本的な欠陥である。

歴史をその基軸において正しくとらえ、現代世界の特徴を核心においてとらえているとはいえない。一連の帝国主義強国での革命の敗北と反革命の登場の中で、しかもそれを許した世界革命の主体的欠陥（スターリン・コミンテルン指導部をものりこえて、自ら最前線にたち、かつ系統的に帝国主義心臓部に革命をおしあげることに）つて世界革命を切り開いてきた植民地・半植民地・後進国を主力とするべきである。

とする生きた歴史と現実に立脚しえなかつた。それは帝国主義国プロレタリアートの敗北と解体の深さにも、再建に要する徹底した世界性にも無自覚であつた。そしてなによりも帝国主義国内革命派がもつべき主体的責任の論理が不在であつた。

だが、われわれはいまこれを革めることができる。最近の世界と日本の実践の高みから、これをおし進めることができる。われわれは自己の最良のラディカリズムを継承しつつ、最高の世界革命経験と勢力によつて自己を検証する。日本革命的左翼の既成性に対する（造反有理！）

第一部 世界革命運動の総括

序章 アジアの革命実践と日本革命的左翼

第一部の討究に先立つて、世界革命史総括の契機を、最近のわれわれの実践及び若干の歴史の検討とかかわらしめて明らかにしたい。1、ヴェトナム革命戦争は日本革命的左翼に何を提起したか。

一九六五年日「韓」闘争から六七一年〇・八一—一二への飛躍をつき動かし更に前方へわれわれをおしやつた力は、ヴェトナム革命戦争の不返転の永続的前進、中国文化大革命に見る革命の中の革命であった。それらは日本の人民の闘いに世界的な新たな革命基盤を形成するとともに、革命主体形成の内在的論理に深くくこんだ。にもかかわらず、世界革命主体への真の融合と飛躍を欠いてきているのは、主要には日本革命的左翼の思想的限界であることとらえるべきである。

日本の革命的左翼は自らの主体的任務の自覚としても、帝国主義

心臓部のプロレタリア革命が世界革命を獨断的に決定づける力であることを強調してきた。それは、帝国主義諸列強の革命を流産させてきた既成の国際共産主義運動指導に対する全面的分離をもって、とりわけかつての敗北の主体的要因を克服し、残されたこれら主要「戦場」での革命的結着に世界革命の主要な力点をそくたつたものであった。だが心臓部の革命闘争が世界革命の最前線から後退した三〇年代以来、再び心臓部の革命が最前線にたち、かつ世界革命の獨断の中心として聞いとられるには、帝国主義国プロレタリアートが国際主義の生きた結晶をもたらすには、どのような現代の世界革命の構造と過程においてかをその核心においてつかんできたとはいえない。だが、六〇年代後半の実践の火の試験を通して、日本の革命的左翼はより明瞭にそれをつかみはじめた。ヴェトナム革命戦争の世界史的意義の確認、この最高の革命実践の経験に媒介されてである。そして、現実のこのような確認は、わかれをあらためて歴史的に下降させる。中国革命戦争以来の歴史を、一貫して世界の革命と反革命の拮抗に純化されゆく過程が心臓部にも環流するものとしてとらえなおすことができる。

心臓部がなぜ革命の最前線たりえなかつたかだけでなく、心臓部の革命再建の論理が、心臓部革命敗北・解体以後どのように世界革命が進み、更に進みつつあるのかの把握にもとづいて、その歴史的に聞いとられてきた力の発展・転化として追求されなければならない。それは根底的に敗北した帝国主義国プロレタリアートを世界的権力を打倒する世界プロレタリアートとして再建する論理である。日本の革命的左翼に旧来欠落してきたのはこのことである。

一九六〇年代後半に、アメリカ、日本、ヨーロッパの諸国に反戦

界革命の地平にもかかわらず、それを帝国主義国革命闘争に発展・転化する革命主体を党的同質性をもって組織するに至っていない。それゆえこれらとも相対的別個に新たな革命潮流は自己形成してきた。これは単なる時間のズレではなく、このことをもつて中国やヴェトナムの党的限界を云々し、世界革命を普遍的になえないとするのは決定的にまちがいである。これらの「限界」は特殊の自己の革命から世界革命に永続する過渡性そのものにあり、同質の展開をなしえなかつた帝国主義国「共産党」の転落に規定されている。この「限界」は新たに生みだされてきている帝国主義国革命潮流が帝国主義国革命の独自の展開を導き、世界革命に永続させる主体的能力を獲得することによつてこそ現実を超えうるものである。「後進国」革命、革命主体の「限界」とは、「先進国」のそれとしてとらえかえされねばならない。だから、普遍的な世界革命、革命主体の確立は、すでに先行して最大限の世界革命貢献をなし、なし続けている確立された党、その運動と、たつたいま革命世界に登場しはじめたばかりの帝国主義国革命潮流との、相互揚棄によつてのみきりひらかれるであろう。われわれは、抽象的な普遍的世界革命者から天降るわけにはいかない。

だがそれにもかかわらず、帝国主義国革命潮流としてのわれわれは、相互揚棄にむかつてまづもつて自己を形成しなければならず、それは既存・現存のこれら最良の党とその実践に学び本質的な同一性を獲得するものでなければならない。「後進国」の同志がきりひらいた地平にわれわれは依拠し、自己形成するのであり、その発展として展開するのであり、それは彼らの実践を一方の極とした現代史、現代世界の世界革命法則性に立脚し彼らとの固い同志的結合なしにはありえないからである。とりわけ日本の左翼に問われているのは

反帝のラディカリズムがまきおこつた。これは帝国主義心臓部に革命の波が再興し始めたこと、そのような歴史の回生を意味する。しかも日本革命的左翼を先行的表現として、この新しく革命を荷う力が概して（ソ連派）「共産党」とは全く別個のものとして登場している。ここにはここ数世代の世界革命運動にたいする明瞭な総括が提起されている。このことは、主に帝国主義国の「共産党」がかつてコミンテルンにおいて旧植民地・半植民地の共産主義者党と同一の根をもちながら、後者が自国革命を徹底し世界革命へと永続してきたことに対する敵対者、新しい革命の基盤と条件に依拠して自己を再建する任務の失敗者であることの最終的な証であった。

この対極的な事態は、三〇年代敗北以降の全過程で（曲折をもちながらも）、持続的に形成されてきた結果である。（労働者國家については、ソ連の墮落・中国の永続革命という対極である。）単純化を恐れずに言えば、ここ数一〇年来の世界革命の前進は、帝国主義に対する「後進国」共産主義者党の勝利と闘争の持続、「先進国」「共産党」の革命・闘争の持続的な敗北と修正主義への墮落という構造を内包してかちとられてきた。だからこそ、革命の巨大な昂揚が帝国主義国にも環流するに至つたときに、「後進国」共産主義者党がもたらした昂揚を「先進国」「共産党」とは全く別個の潮流がうけとめるという構造的な不均衡が生じている。それはまた客観的な革命の端緒形成にもかかわらず「先進国」「共産党」が完成された修正主義としてあらわれ新たな潮流は党的に確立された運動と組織としては端緒にたばかりであるという落差にもあらわれている。

また、主に旧植民地・半植民地から発した革命的労働者國家。革命戦争を主導する党も、自らの永続革命がきりひらいた新たな世

このことである。われわれは、とりわけ同時代の先行して、あるいは現にわれわれをのりこえている革命実践とその党に学び、結合することなしに、革命党となることはできない。

一九六〇年代後半の帝国主義国のラディカリズムをうみだした動因は、ヴェトナム革命戦争（とそこに凝結した世界革命の歴史）である。ヴェトナム革命の永続性が米帝をうち破つてきたこと、それは米ソ体制をつき破り、米帝戦略がたがたにし、世界支配秩序の破壊を一国的國家統合に投げこみ、そのことを通して帝国主義に包摂され加担してきた帝国主義国人民に革命化の道をきりひらいた。

最強帝国主義が張り子の虎であることを、人民の驚異的な力で実証することによつて、そのことを通して正義はどちらにあるかを明らかにさせることによつて、この全世界的規模の政治闘争によつて、プロレタリアートは自己を発見した。自己を革命的階級として再構成する諸口をつかんだ。それは未だに巨大のカオスにおかれています。しかしそれは歴史を総括し、帝国主義・日和見主義と格闘し、その汚物を一掃する、かつての敗北・解体の根因を真にラディカルにのりこえるうえでの混乱である。これをのりこえる基準は決してまえてもつて提起されてはいない。しかし、この基準の原型は、かかる歴史の推力がもたらしたものの総括、その最良のものを発展させるといふ見地の中のみ存在する。

ヴェトナム革命戦争の世界史的意義は、とりわけ、「戦後」永続革命を封じこめようとしてきた、そのような唯一世界的能力をもつた米帝の侵略・反革命を敗北させ、世界反革命の牙城で革命戦争に対する城内平和を永続的にうちくだいたことである。この主客の連

関は、先行する革命戦争の直面した壁をうち破つたものとして、決定的である。

毛沢東・林彪風に言えば、かつての世界的都市における根底的敗北―反革命的都市による世界の農村のじゅうりん―世界の都市の反革命的屈服をのりこえた革命的農村の形成。反撃―農村の革命の断行と都市への展望―世界の反革命的都市の再編による革命的農村との対峙。包囲―包囲の突破、逆包囲と都市内革命の条件の形成としてとらえることができる。

こうした把握は、歴史と世界の解釈のためにではなく、変革するべき対象がどのような歴史的特質と地位をもつに至つたかを世界の規模の階級闘争の結果としてとらえ、それをおしあげてきた革命主体の特殊な形成―再建過程とその現段階を明らかにして、世界革命主体となるべきわわわの今後の展開方向のために必要である。われわれは、主に「後進国」革命が世界革命を主導するという転倒を通して、この転倒を再転倒する条件が形成されてきたことをふまえ、それをなしうる能力をもつて歴史に登場しなければならぬ。

日本の革命的左翼にとつてこのことは、直接の自己史の揚棄である。決してとびこえることのできなない歴史のとびこえを埋めることあるいは歪曲を糾すこと―世界革命・プロレタリア独裁。暴力革命の見地とその実践的ラディカリズムを継承し、その具体的な展開を、われわれに先行して実践的に超え生きた世界革命史とその力の中に自己を再規定し、直接的な基盤の狭少性をこえることによつてなしゆく必要がある。

これが、日本革命的左翼をのりこえた世界革命実践を基準として

革命に発展転化し、世界帝国主義の組織された反革命をよびおこす、事態はこのように進んだ。

中国革命の世界史的地位は、三〇年代末の心臓部革命の敗北以降、スターリン・コミンテルン指導のあいにく誤謬、しかも「後進国」からという二重・三重の逆境をついてプロレタリア・ヘゲモニーのもと、世界革命の解体を防ぎ、戦線を維持し、最大のしかもつとも人民的ヘゲモニーの貫ぬかれた革命をやりとげ、世界革命に新天地をひらいたことである。それは膨大な被抑圧民族にたいし一貫して反帝民族独立をプロレタリア革命の方向におしやる主導的イムパクトとなり、一方で撃退し、敗北せしめた帝国主義―とくに日帝を革命的危機にたたきこんだ。

「後進国」の民族解放民主革命への、とくにそのプロレタリアの徹底への、更には敗戦帝国主義国プロレタリア革命への永続性をもつて、中国革命は世界の最も強力な革命主体として登場した。日本プロレタリアはこの状況に立脚して、一時代にわたる革命運動の壊滅という劣勢を一挙に回復することができた。だが、かゝる回復の仕方の中に日本革命主体の弱点が内包された。中国革命がおしあげた革命的現実を依拠するのは当然であつた。しかし、依拠すること自体、革命的資質と能力を必要とする。中国・日本革命をともにおし進めるといふ共働の革命実践経験で確かめられた連帯を日本革命の側から提起することはできなかつたし、しかも中国革命の結果および敗戦が生みだすであろう状況に立脚するべく目的意識的に「待機」することもできなかつた。それゆえ、日本の革命主体は全面的に国際性を刻印された日本革命の進路を鮮明にしえなかつた。

自己検証し、世界革命潮流と結合するための第一の基本作業である。

第一部 中国革命と日本

ヴェトナム革命戦争がおしあげた高みから歴史を省るとき、ことに日本の革命に即してみるとき、中国革命がきりひらいた世界史的地平をぬきに「戦後」世界、「戦後」日本帝国主義を語ることはできないし、今日の革命と革命党を総括し展望することは全く非歴史的、一面的、表相的であることが明らかである。

日本の革命的左翼は直接主要には、日帝との対決の中に自己の形成根拠をもつ。日本帝国主義を具体的にどうとらえるかということに自己をその対極者としてどう創り出すかの不可分の一環である。だが、日帝は、中国・朝鮮はじめアジアへの侵略、そしてその侵略はとりわけ中国革命戦争に打ち破られたという規定性をはなれては存在しない。だから、中国革命に対する旧来日本革命的左翼がとつてきた評価の未決定性、あいまい視、無視、反動的評価は、日本の左翼を非常に綺型化してきたといわねばならぬ。

中国革命は日帝侵略粉砕からの永続性として自己を貫徹した。ただし、中国の抗日民族解放革命戦争の勝利が日本プロレタリア革命の勝利に永続するのではなく、「戦後」日本革命の敗北の中で抗日勝利―国内戦勝利としてつらぬかれた。

こゝでも歴史は公式と常識をこえて進行した。植民地・半植民地の民族革命が帝国主義打倒プロレタリア革命に永続し、後者が前者を世界革命の中にかゝこむという具合にはならなかつた。半植民地中国の民族解放民主主義革命がプロレタリア

アメリカ帝国主義の日本占領は、枢軸諸国に対する勝利の結果、ソ連及び連合諸帝国主義との勢力圏再分割の一表現である。同時に反革命世界秩序構築の有力なテコであつた。

日本の革命は中国・アジアの革命的前進に依拠しつつ、旧帝国支配階級を打倒し反米帝に進む、もしくは反米帝正面戦の中で旧帝国支配階級を打倒するという、複合的な永続性をもつて世界に開かれた展望をもちえたであろう。こゝには、連合国・枢軸国の対立の中でいかに革命をやるかが一挙に凝縮した。この場合、プロレタリア革命派の独自の論理は本質的に中国革命と同様だといえる。すなわち旧枢軸勢力の打倒。一切の反動的ブルジョアの支配階級の打倒、アメリカ帝国主義との対決。これは反ファシズム反枢軸にとどめて帝国主義世界秩序との均衡を求めたソ連党・国家の路線と必然的に対立する。それゆえ、中国革命がそうしたようにソ連の制動をふりきつて。

日本革命はこれをなしえなかつた。このことは、旧枢軸国の敗北下で、帝国主義は米帝を中心に(ソ連の革命放棄の助けをえて)日帝を再建する方向で革命処理―敗戦処理する基調の確立をもたらし、日本の舞台上に、中国から発する永続革命の波がおしよせ、それと拮抗して米帝の反革命がおしよせ、同時にソ連の制動が加わる状況下で、日本プロレタリアは革命の永続性をわがものにしえぬうちに敗北した。中国革命の永続性は凍結された。日本に擬制的「戦後」が始まり、歴史は一面化された。日帝は米帝によつて中国革命戦争への敗北を救済され、そうすることによつて日本人民は自己と自己の対極たる日帝の歴史をいんべいされた。しかし、重要なことは、この敗北から立ち直るのには、何か新し

イメージではなく、永続性の確認・戦略・権力規定から出直すことこそ正当である。日本革命はきわめて凝縮された国際的因子のからみあいの中であらわれた。それはその後の力関係、姿態の変換の中でちがいはあつても、とくに一国的権力規定に重要な変遷はあつても、この時期につくり出された世界一國体制が持続してきた以上、世界革命一國革命の連関構造としては同じである。すなわち國際帝國主義の侵略・反革命の粉碎・帝國主義の打倒。

中国が反米帝を強調してきたことの脈絡をこうとらえるべきである。「戦後」一貫して反米帝を捨象した帝國主義打倒はありえなかつたといつてよい。そのような見地はむしろ一國革命主義というべきである。われわれは、帝國主義國の敗北の中でうちだされた世界革命(戦争)と世界反革命との拮抗に新しい世界革命の段階の表現をとらえ、そこから出発することを基底にすべきだったのである。

この段階の到来とともに、従来旧コミンテルン系諸党内部に封ぜられ、潜航していた路線の対立が顕在化した。いいかえれば、あらゆる点で中間主義であり未成熟であり試行錯誤をもつて修正主義・社会帝國主義への道をひらいてきたスターリン主義の過渡性に終止符をうつて労働者國家の完成された墮落、権力をにぎつた党の社会帝國主義への転化が完成した。この拮抗状況の反動的追認、体制間矛盾論への事実上の一面化と米ソ協調による「平和共存」への疎外他方、この拮抗の中で帝國主義内外からの侵略・反革命との対決、反米帝と各國帝國主義打倒の戦略の模索。

日本の革命的左翼は明らかに客観的には後者の戦列に位置してきた。しかし、米帝打倒戦略をきりすて自國帝國主義打倒に一面化する一國革命主義のゆえに帝國主義の内から永続世界革命を継承する

はもちこたえ、新たな革命による突破もまた長期にわたる苦難に充ちた対峙をこえて噴出してきた。これは革命の内包的永続性と外延的永続性の結合・発展である。ヴェトナムがついに米帝を決定的にうち破りつつあるのは、中国をはじめとする、かゝるもちこたえとの一体化された力の集中の結果である。二〇年代末中国から最近のヴェトナムを頂点とする永続革命戦争は、米帝反革命一國革命世界支配秩序をついにうち破つて再び帝國主義の対外危機を国内革命危機に永続させる地平を闊いとつたといふことができる。そして日帝は米帝の敗退の中でより直接的にかつてひきのばされてきた中国革命戦争への敗北をどうのりこえるかに直面する。そして同時に日本プロレタリア人民にとつては、永続革命戦争の発展、継承者たることをより決定的に問われている。

力を組織し、革命主体の永続性を自ら妨げてきた。それは、一九三〇年代以来の世界革命総括の不在一歴史のとびこえにもとづく。米帝打倒の捨象とは、この時期、最前線を構築した植民地。半植民地革命の永続的発展が最後にはどのような壁に直面したかを全く理解せず、それゆえ植民地・半植民地革命が現代世界革命に占める地位のきりすてに通ずる。また、「戦後」日本革命が主要に何にうち破られたかが明らかであり、たとえ日帝が復活・膨張した今日においても依然として最大最強の米帝打倒との複合的永続性をもつて世界日本革命を展望せねばならないであろう。

とまれ、日本の革命的左翼は、日本革命のひっそく状況と擬制的「戦後」性の中で復活した大衆的政治闘争を基盤として出発し、ラディカリズムを深化することによつて自己のよつてたつ基盤の政治的広大さを獲得し、世界革命闘争のもつと高度の実践への接近をなしてきた。いま、われわれはかつての政治の狭少性に拘束されたわれわれの世界認識・革命観を、われわれが実践上結合してきた世界革命闘争の実践の総括をもつて揚棄し、永続世界革命基調の継承・発展者として自己を革にすべきときなのである。

第三部 中国革命とアメリカ帝國主義

世界的な革命と反革命の拮抗の中で、中国革命が曲折をもちながらも、追求した方向は断乎世界革命の勝利のために革命的労働者國家としてみちこたえること、世界の至るところから、どこからでも反革命鉄環を突破することであつた。

おそらく古いマルクス主義的常識をこえて、長期にわたつて中国

▽このレーニン研究会理論雑誌『ボルシェヴィズム通信』第5号を、全国で開いている革命的青年労働者、学生の手許に送ります。▽『ボルシェヴィズム通信』は、六十年代階級斗争を最先頭で担ってきた革命的左翼の闘いの根底的総括——とりわけ、六九年春から秋にかけての決定的敗北（単なる戦術的敗北にとどまらない）の真摯な総括——と、新しい闘いを組織する過程での我々の新しい出発点をしつかりと把み取り、真の全国単一の革命党建設の一翼を担う闘いの一環として、今まで一号から四号まで発行されてきた。

我々は『ボル通』創刊号において、レーニン主義——革命的現実主義の立場から、六十年代階級斗争での無数の犠牲とともに獲得した新しい問題意識を七点に要約し、この問題意識を基礎に、その後の、『ボル通』において、その内容の豊富化を図ってきた。即ち、『ボル通』第二号において、「中ソ論争」を論じる事を通じて、国際共産主義運動の左翼反対派的総括——観念的反スタ主義の克服の一步を踏み出し、『ボル通』第三号においては、全共闘運動を担っ

てきた活動家の「全共闘テルミドル」期における思想的混乱を、レーニンの「学生運動論」を捉え返す中から、今日の学生共産主義者の任務を確定したのだつた。（『ボル通』第四号は、本号掲載の論文「プロレタリア階級斗争の戦術に関する覚え書」の第一章と第二章が収録されている。）

▽ニクソン訪中——「米中会談」とニクソン「新経済政策」によつて万人の目に明らかになつた戦後IMF—ヤルタ体制の根底的動揺の更なる深化は、日米両国主義の新たな反革命体制の手直し——強化とともに、世界革命の最前線で闘い抜いているインドシナ人民に真に連帯する日本帝国主義心臓部における労働者人民の圧倒的決起が緊急かつ重要な課題となつていることを如実に物語つている。今春の沖縄斗争の爆発と、三里塚斗争の前進によつて身動きのとれない日帝ブルジョアジー左藤政治委員会は、足もとが完全に掘りくずされ、それ故に、今秋三里塚第二次強制収用——「沖縄批准国会」を目前にして、更に強暴に人民を抑圧し、革命的左翼に気遣いじみた弾圧を加えんとしているのだ。我々はこの様な敵の攻

撃に対しては、三里塚——沖縄斗争を文字通りの全力量をもつて闘い、日帝ブルジョア政治委員会をコナゴナに打ち砕かねばならぬ。

我々は、今秋三里塚——沖縄斗争を総力をあげて闘う事を通じて、混迷を深める新左翼諸潮流の再編を二つの反レーニン主義の道を粉砕することをもつてなしとげなければならぬ。二つの反レーニン主義の道とは、一方は、革マル派の様に蜂起に敵対するまつたくの反革命の道であり、もう一方は、二重権力状態を自己目的化する事をもつて、真のボルシェヴィズムを無政府主義へと歩み道である。日本共産主義運動の最良の部分の手によつて新しい「革命党」は生み出されなければならない。どんなに困難であろうとも革命斗争の烈火の中でうち鍛えられた真の「革命党」を生み出さねばならない。我々は、今真剣に革命党建設の問題を考え、活動している全国の労働者、学生諸君とともに、真の前衛党を生み出す闘いの一環を担っていきたいと思います。

▽『ボル通』は、隔月で発行する予定です。

発行日 1971年9月18日
 編集 レーニン研究会「ボルシェヴィズム通信」編集委員会
 発行所 レーニン研究会
 京都市左京区東竹屋町京都大学熊野寮B棟307
 TEL(075)771-6291
 定価 200円

